埼玉県戸田市遺跡調査会報告書　第10集

鍛冶谷（かじや）・新田口（しんでんぐち）遺跡Ⅷ

2005

戸田市遺跡調査会

はじめに

戸田市遺跡調査会
会長 伊藤良一

戸田市は昭和63年に開業された埼京線の開通以来、首都圏から20㎞圏内にあり交通の利便性から共同住宅や事務所の建設など開発が盛んになり、街の景観が著しく変化してまいりました。

本書は、このような都市開発の中で文化財の保護を目的として緊急に発掘調査された「鍛冶谷・新田口遺跡―第８次調査―」の記録です。

鍛冶谷・新田口遺跡は、荒川の溢流によって形成された自然堤防上にあり、馬形埴輪を出土した上戸田本村遺跡や南原遺跡とともに戸田市を代表する遺跡です。本市では、昭和42年に初めて発掘調査を行った遺跡であり、以来、東北・上越新幹線及び埼京線の敷設工事に伴って調査も行われ、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓群として大規模な集落跡であることが確認されました。さらに、昭和51年には埼玉県選定重要遺跡にも位置づけられています。

本書を埋蔵文化財の保護と普及活用の資料として、また考古学をはじめとする学術研究の基礎資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりますが、本発掘調査に対し多大なご理解とご協力を賜りました株式会社　大京様、そして猛暑の中、発掘調査現場でご協力をいただきました皆様方に深く感謝を申し上げます。

例　　言

1　本書は、埼玉県戸田市上戸田５丁目25番２号他の共同住宅建設工事に伴って発掘調査された鍛冶谷・新田口遺跡第８次調査の発掘調査報告書である。

2　発掘調査事業及び整理作業は、共同住宅建設の事業者である株式会社　大京（東京都渋谷区千駄ヶ谷４丁目24番13号）から、戸田市遺跡調査会が委託を受けて実施したものである。

3　発掘調査は、平成11年７月21日から９月21日にわたって行った。

4　発掘調査は別表に掲げた調査組織により実施した。

発掘担当者　　小　島　清　一　（戸田市教育委員会　生涯学習課）

5　出土品の整理及び図版の作成は、発掘担当者の指導により、整理参加者全員で行った。

6　本書の作成にあたり編集、執筆、写真撮影は小島が行い、渡辺豊子、尾形美枝子、岡崎久子、加藤晴美の協力を得た。各遺構の図版及び基本土層は渡辺、尾形、加藤が作成した。

7　発掘調査から報告書を作成するまでの過程で、下記の方から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します。（敬称略）

石　川　日出男　　伊　藤　裕　厚　　西　田　賢　吉　　古　澤　立　巳

戸田市立戸田東中学校　戸田市立郷土博物館　戸田市遺跡調査協力会

8　発掘調査及び整理参加者は、下記のとおりである。

石黒千秋	上原　勇	大井公代	岡崎久子	尾形美枝子
勝俣初江	加藤晴美	古賀礼子	湖山淳子	早乙女孝子
信濃節子	下川美奈子	荘　由香	関　徳太郎	高橋富美子
長瀬梨絵	鳴瀬久美子	平吹久美子	広瀬幸子	本田五月
宮崎睦子	横山とり	渡辺豊子		

目　　次

はじめに　　戸田市遺跡調査会
会長 伊藤良一

例　言

凡　例

1　発掘調査に至るまでの経過 …… 1

2　発掘調査の経過 …… 2

3　鍛冶谷・新田口新遺跡の立地と環境 …… 3

4　鍛冶谷・新田口新遺跡の概観 …… 5

5　遺構と出土遺物 …… 8

(1)　住居跡と出土遺物 …… 8

(2)　方形周溝墓と出土遺物 …… 30

(3)　その他の遺構と出土遺物 …… 51

(4)　グリッド出土の遺物 …… 52

6　まとめ …… 54

挿　図　目　次

第１図　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅷ及び周辺の遺跡位置図 …… 3
第２図　大正期の鍛冶谷・新田口遺跡周辺の地形図 …… 4
第３図　鍛冶谷・新田口遺跡調査地位置図 …… 5
第４図　基本土層図 …… 6
第５図　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅷ遺構配置図 …… 7
第６図　第１号住居跡実測図 …… 8
第７図　第２号住居跡実測図 …… 9
第８図　第２号住居跡遺物出土位置図 …… 10
第９図　第２号住居跡出土遺物実測図 …… 11
第10図　第３号住居跡実測図及び遺物出土位置図 …… 13
第11図　第３号住居跡出土遺物実測図 …… 14
第12図　第４号住居跡実測図及び遺物出土位置図 …… 15
第13図　第４号住居跡出土遺物実測図 …… 16
第14図　第５号住居跡実測図 …… 17
第15図　第５号住居跡遺物出土位置図 …… 18
第16図　第５号住居跡出土遺物実測図 …… 19
第17図　第６号住居跡実測図 …… 21
第18図　第７号住居跡実測図 …… 21
第19図　第７号住居跡出土遺物実測図 …… 21
第20図　第８号住居跡実測図及び遺物出土位置図 …… 22
第21図　第８号住居跡出土遺物実測図 …… 23
第22図　第９号住居跡実測図 …… 24
第23図　第10号住居跡実測図及び遺物出土位置図 …… 25
第24図　第10号住居跡出土遺物実測図 …… 26
第25図　第11号住居跡実測図及び遺物出土位置図 …… 27
第26図　第11号住居跡出土遺物実測図 …… 27
第27図　第12号住居跡実測図 …… 28
第28図　第12号住居跡出土遺物実測図 …… 28
第29図　第１号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 29
第30図　第１号方形周溝墓実測図及び遺物出土位置図 …… 31
第31図　第２号方形周溝墓実測図及び遺物出土位置図 …… 34
第32図　第２号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 35
第33図　第３号方形周溝墓実測図及び遺物出土位置図 …… 38

第34図　第３号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 41
第35図　第４号方形周溝墓実測図及び遺物出土位置図 …… 44
第36図　第４号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 45
第37図　第５号方形周溝墓実測図 …… 47
第38図　第５号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 47
第39図　第６号方形周溝墓実測図 …… 48
第40図　第７号方形周溝墓実測図及び遺物出土位置図 …… 49
第41図　第７号方形周溝墓出土遺物実測図 …… 50
第42図　ピット実測図 …… 51
第43図　グリッド出土遺物実測図(1) …… 52
第44図　グリッド出土遺物実測図(2) …… 52

表　目　次

第１表　第２号住居跡出土遺物 …… 12
第２表　第３号住居跡出土遺物 …… 14
第３表　第４号住居跡出土遺物(1) …… 16
第４表　第４号住居跡出土遺物(2) …… 17
第５表　第５号住居跡出土遺物(1) …… 19
第６表　第５号住居跡出土遺物(2) …… 20
第７表　第６・７号住居跡出土遺物 …… 21
第８表　第８号住居跡出土遺物 …… 23
第９表　第10号住居跡出土遺物 …… 26
第10表　第11号住居跡出土遺物 …… 27
第11表　第12号住居跡出土遺物 …… 28
第12表　第１号方形周溝墓出土遺物 …… 29
第13表　第２号方形周溝墓出土遺物 …… 36
第14表　第３号方形周溝墓出土遺物(1) …… 42
第15表　第３号方形周溝墓出土遺物(2) …… 43
第16表　第４号方形周溝墓出土遺物 …… 46
第17表　第５号方形周溝墓出土遺物 …… 47
第18表　第７号方形周溝墓出土遺物 …… 50
第19表　ピット一覧表 …… 51
第20表　グリッド出土の遺物(1) …… 52
第21表　グリッド出土の遺物(2) …… 53

図　版　目　次

図版１
　⑴鍛冶谷・新田口遺跡Ⅷの位置
　⑵調査区全景（東から）
図版２
　⑴調査区全景（北から）
　⑵第１号住居跡（南から）
図版３
　⑴第２号住居跡（南から）
　⑵第２号住居跡土器出土状態
　⑶第２号住居跡土層断面ＳＰＢ南側
　⑷第２号住居跡ピット２
　⑸第２号住居跡ピット８
図版４
　⑴第３号住居跡（東から）
　⑵第４号住居跡（南から）
図版５
　⑴第４号住居跡土器出土状態⑴
　⑵第４号住居跡土器出土状態⑵
　⑶第４号住居跡土器出土状態⑶
　⑷第４号住居跡土器出土状態⑷
　⑸第４号住居跡ピット１
　⑹第４号住居跡ピット２
　⑺第４号住居跡土層断面ＳＰＡ西側
　⑻第４号住居跡土層断面ＳＰＢ北側
図版６
　⑴第５号住居跡（北から）
　⑵第５号住居跡土器出土状態
　⑶第５号住居跡土層断面ＳＰＡ東側
　⑷第５号住居跡ピット
　⑸第５号住居跡ピット
図版７
　⑴第６号住居跡（西から）
　⑵第７号住居跡（西から）
図版８
　⑴第８号住居跡（北から）
　⑵第８号住居跡土器出土状態⑴
　⑶第８号住居跡土器出土状態⑵
　⑷第８号住居跡土層断面ＳＰＡ東側
　⑸第８号住居跡土層断面ＳＰＢ南側
図版９
　⑴第９号住居跡（東から）
　⑵第10号住居跡（南から）
図版10
　⑴第11号住居跡（北から）
　⑵第12号住居跡（南から）
図版11
　⑴第１号方形周溝墓（東から）
　⑵第１号方形周溝墓北溝
　⑶第１号方形周溝墓東溝
　⑷第１号方形周溝墓ＳＰＤ
　⑸第１号方形周溝墓ＳＰＦ
図版12
　⑴第２号方形周溝墓（東から）
　⑵第２号方形周溝墓北溝
　⑶第２号方形周溝墓南溝
　⑷第２号方形周溝墓土層断面ＳＰＢ
　⑸第２号方形周溝墓土層断面ＳＰＣ
図版13
　⑴第３号方形周溝墓（東から）
　⑵第３号方形周溝墓南溝
　⑶第３号方形周溝墓西溝
　⑷第３号方形周溝墓土層断面ＳＰＣ
　⑸第３号方形周溝墓土器出土状態
図版14
　⑴第４号方形周溝墓（東から）
　⑵第４号方形周溝墓土層断面ＳＰＡ

(3)第５号方形周溝墓（南から）
(4)第２・５号方形周溝墓ＳＰＡ
(5)第６号方形周溝墓土層断面ＳＰＡ
(6)第７号方形周溝墓土層断面ＳＰＡ
図版15
(1)第２号住居跡出土遺物（第９図―１）
(2)第２号住居跡出土遺物（第９図―２）
(3)第２号住居跡出土遺物（第９図―６）
(4)第２号住居跡出土遺物（第９図―８）
(5)第３号住居跡出土遺物（第11図―１）
(6)第３号住居跡出土遺物（第11図―２）
図版16
(1)第４号住居跡出土遺物（第13図―５）
(2)第４号住居跡出土遺物（第13図―６）
(3)第５号住居跡出土遺物（第16図―１）
(4)第５号住居跡出土遺物（第16図―３）
(5)第５号住居跡出土遺物（第16図―４）
(6)第５号住居跡出土遺物（第16図―５）
図版17
(1)第５号住居跡出土遺物（第16図―６）
(2)第５号住居跡出土遺物（第16図―７）
(3)第５号住居跡出土遺物（第16図―８）
(4)第５号住居跡出土遺物（第16図―９）
(5)第６号住居跡出土遺物（第19図―１）
(6)第６号住居跡出土遺物（第19図―２）
図版18
(1)第８号住居跡出土遺物（第21図―１）
(2)第８号住居跡出土遺物（第21図―４）
(3)第８号住居跡出土遺物（第21図―２・３）
(4)第10号住居跡出土遺物（第24図―１・２）
(5)第10号住居跡出土遺物（第24図―３）
(6)第12号住居跡出土遺物（第28図―１）
図版19
(1)第１号方形周溝墓出土遺物
（第29図―１・２・３・６・７）
(2)第２号方形周溝墓出土遺物
（第32図―１・２・９・10）
(3)第２号方形周溝墓出土遺物（第32図―３）
(4)第２号方形周溝墓出土遺物（第32図―４）
(5)第２号方形周溝墓出土遺物（第32図―７）
(6)第２号方形周溝墓出土遺物（第32図―８）
図版20
(1)第３号方形周溝墓出土遺物（第34図―１）
(2)第３号方形周溝墓出土遺物（第34図―２）
(3)第３号方形周溝墓出土遺物（第34図―９）
(4)第３号方形周溝墓出土遺物（第34図―10）
(5)第３号方形周溝墓出土遺物（第34図―11）
(6)第３号方形周溝墓出土遺物（第34図―14）
図版21
(1)第４号方形周溝墓出土遺物（第36図―２）
(2)第４号方形周溝墓出土遺物（第36図―５）
(3)第４号方形周溝墓出土遺物（第36図―６）
(4)第４号方形周溝墓出土遺物（第36図―７）
(5)第４号方形周溝墓出土遺物
（第36図―１・８・９）
(6)第４号方形周溝墓出土遺物（第36図―11）
図版22
(1)第５号方形周溝墓出土遺物（第38図―１）
(2)第７号方形周溝墓出土遺物
（第41図―１・２・３・５）
(3)第７号方形周溝墓出土遺物／籾殻圧痕
（第41図―３）
(4)グリッド出土遺物（第43図―１）

発掘調査の組織

会　　長	戸田市教育委員会	教育長	伊藤良一
理　　事	戸田市教育委員会	教育部長	前田一男
（会長代理）			
理　　事	戸田市教育委員会	教育次長	加藤　正
〃	戸田市文化財保護委員会	委　員	中村信行
〃	戸田市都市整備部都市計画課	課　長	市村　眞
〃	戸田市都市整備部都市整備課	課　長	岡田隆司
〃	戸田市建設部建築課	課　長	本田良夫
〃	戸田市教育委員会生涯学習課	課　長	田中隆一
監　　事	戸田市社会教育委員会	委員長	秋元隆志
〃	戸田市立郷土博物館	館　長	石川日出男
事務局長	戸田市教育委員会生涯学習課	課　長	田中隆一
事務局	〃　生涯学習課	主　幹	當麻景一
〃	〃　生涯学習課	副主幹	和田茂穂
〃	〃　生涯学習課	主　査	小島清一
〃	〃　生涯学習課	主　任	香林有希子
調査員	〃　生涯学習課	主　査	小島清一

凡　　例

○　本書に掲載した挿図の縮尺は、原則として遺構図版1／80・1／40、遺物図版1/4である。それ以外は、図に沿えたスケールを参照されたい。

○　遺構・遺物図中の焼土、炭化物等の表示は次のとおりである。

焼　土　　炭化物　　土器の赤彩部分

攪　乱

○　土器観察表における胎土の記号は、下記のとおりである。

A：石英　B：金雲母　C：斜長石　D：黒く光る石　E：赤色粒子

F：白色粒子　G：褐色粒子　H：砂粒子

○　土層中の水糸レベルは、すべて標高　2.60mである。

1　発掘調査に至るまでの経過

平成11年６月、東京都渋谷区千駄ヶ谷４丁目24番13号の株式会社大京代表取締役長谷川正治氏（以下「事業者」という）から、戸田市上戸田５丁目25番２他に共同住宅建設の開発行為に伴う事前協議が開発担当所管課になされた。

戸田市では、昭和63年の埼京線の開通により共同住宅等の開発が進み、開発担当所管課との各種の協議を実施して文化財保護と開発事業との調整を図っている。

鍛冶谷・新田口遺跡は、昭和42年に本格的な発掘調査が行われて以来、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡や方形周溝墓を主体とする集落跡であることが明らかになっており、現在では埼玉県選定重要遺跡に位置づけられている。

教育委員会では、当該地が鍛冶谷・新田口遺跡包蔵地内に位置するため、開発を行う際には遺跡の現状を確認するため、試掘調査を実施する旨の回答をした。

その後、数度にわたる協議を重ね、平成11年６月23日に試掘調査を実施した。結果、弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡等を検出し、遺構に伴う土器を多数確認した。市教育委員会は調査結果を踏まえ、その取り扱いについて事業者と協議を行った。現地における遺跡の保存については計画を変更することが困難であることから、事前に記録保存のための発掘調査を実施することになった。

これをもって、事業者からは平成11年６月29日付で、文化財保護法第57条の２第１項の規定による埋蔵文化財発掘届が文化庁長官宛に提出された。発掘調査に際し、教育委員会と事業者で協議し、事業が緊急を要することを考慮し、戸田市遺跡調査会会長と事業者（株式会社大京北関東支店取締役支店長山口陽氏）は平成11年７月16日に事業委託契約を締結した。発掘調査は、平成11年７月21日から開始することになった。

戸田市遺跡調査会からは、文化財保護法第57条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官宛てに提出された。

なお、埼玉県教育委員会教育長からは、平成11年７月26日付、教文第２－58号をもって発掘届を受理した旨の通知があった。

2　発掘調査の経過　―日誌抄―

鍛冶谷・新田口遺跡第８次調査は、平成11年７月21日から９月21日までの約２ヶ月で実施した。季節的には盛夏にあって、調査初日から激しい雷雨に見舞われるような印象深い現場入りとなった。

以下、調査経過が６期に区分できるので整理しながら経過を見てゆきたい。

（７月21日～７月27日）

早朝より関係者が集まり、調査が速やかに進むよう調査方法の共通理解を図り、試掘調査の結果をもとに本格的な表土の掘削作業を行う。掘削にあたっては、試掘調査の結果をもとに遺構確認面である黄褐色土層まで慎重に行った。表土を取り除いてゆく過程で、住居跡（第５号住居跡）付近からは炭化物を多量に検出している。21日には、調査に必要な発掘調査用具・資材等を搬入した。また、26日から人力を組み合わせて表土の掘削を行っている。表土の掘削作業は、実質５日間を要した。

（７月28日～７月30日）

７月28日、表土の除去が済み基準点測量及びグリッドの設定を行った。また、調査区域内において北側から遺構確認作業を開始する。遺構確認面である黄褐色粘土層の精査を丹念に行った。給油所の再開発ということもあり試掘調査で確認されていた住居跡や方形周溝墓に撹乱を受けていた部分が多く各遺構の全容を把握することに苦慮した。表土の全面を掘削除去することによりこの段階で明らかになった主な遺構は住居跡12軒、方形周溝墓２基（第１・３号方形周溝墓）、溝跡５本である。なお、この溝跡をさらに精査し方形周溝墓として調査を進めた。

（８月２日～９月13日）

８月２日から確認された各遺構の調査を開始する。第１住居跡と第１号方形周溝墓から調査に取りかかり、作業の進歩状況を確認しながら同時並行で進めた。遺構の調査は、覆土から土器や炭化物が出土しており、遺物の取り上げについては分布図を作成し、出土品整理作業における接合関係が明確になるよう慎重に行った。

（９月14日～９月17日）

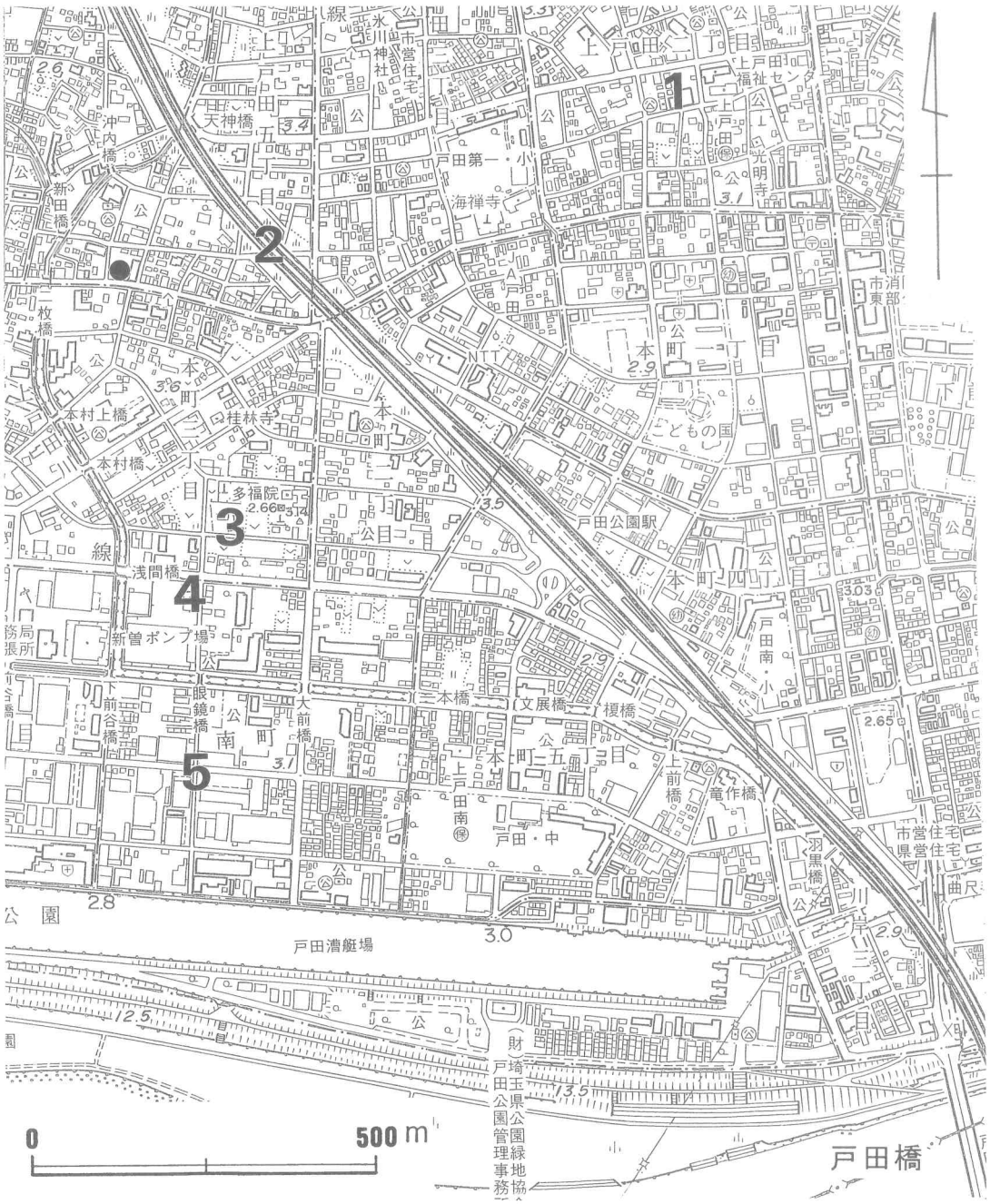
調査区域内における遺構の全容を写真に記録するため、９月14日から全員で清掃作業を行い、９月16日に全体の写真撮影を行った。

（９月13日～９月21日）

９月13日から20日まで検出された遺構の全体測量を行った。９月21日に予定された現地においての全作業を終了し、約２ヶ月を過ごしたプレハブ内の資材を撤収した。

調査日数44日、参加延べ人数451名であった。

3　鍛冶谷・新田口遺跡の立地と環境



1　前谷遺跡　　2　鍛冶谷・新田口遺跡　　3　上戸田本村遺跡

4　南町遺跡　　5　南原遺跡　　●鍛冶谷・新田口遺跡Ⅷ

第１図　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅷ及び周辺の遺跡位置図

鍛冶谷・新田口遺跡Ⅷ（第８次発掘調査）の調査地は、戸田市上戸田５丁目25番２他に位置している。ＪＲ埼京線の「戸田駅」より南側に約600ｍのところにあたる。交通の利便性から共同住宅等の開発が盛んな地域となっている。

戸田市は埼玉県の南端に位置し、東は川口市、北は浦和・蕨両市、西から南は荒川を境とし朝霞・和光両市、そして東京都板橋区・北区と接している。面積は、18.17㎢を測る。東には中山道が、西には国道17号バイパスが、中央には東北・上越新幹線及び埼京線が縦断して東京へと通じている。かつて、荒川には「戸田の渡し」があって江戸への玄関口として交通の要衝となっていたところである。現在、荒川は西部では北西から南東へ流れ、笹目付近で東へと方向を変え、南部ではほぼ東西に流路をとっている。

こうした周辺地域の立地環境の中で、埼玉県選定重要遺跡である鍛冶谷・新田口遺跡をはじめとする市内の遺跡群が分布する低平な微高地は、荒川（旧入間川）の溢流によって形成された火山灰質の黄褐色粘土層を基盤としている。標高は４～５ｍを測る。

戸田市内における主な遺跡は、市域の中央部に位置しており、第１図にも見られるように前谷遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、南原遺跡等が連なり、上戸田川に沿うように遺跡群を形成している。いずれも弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡や方形周溝墓等を検出する集落跡である。鍛冶谷・新田口遺跡は、№２である。

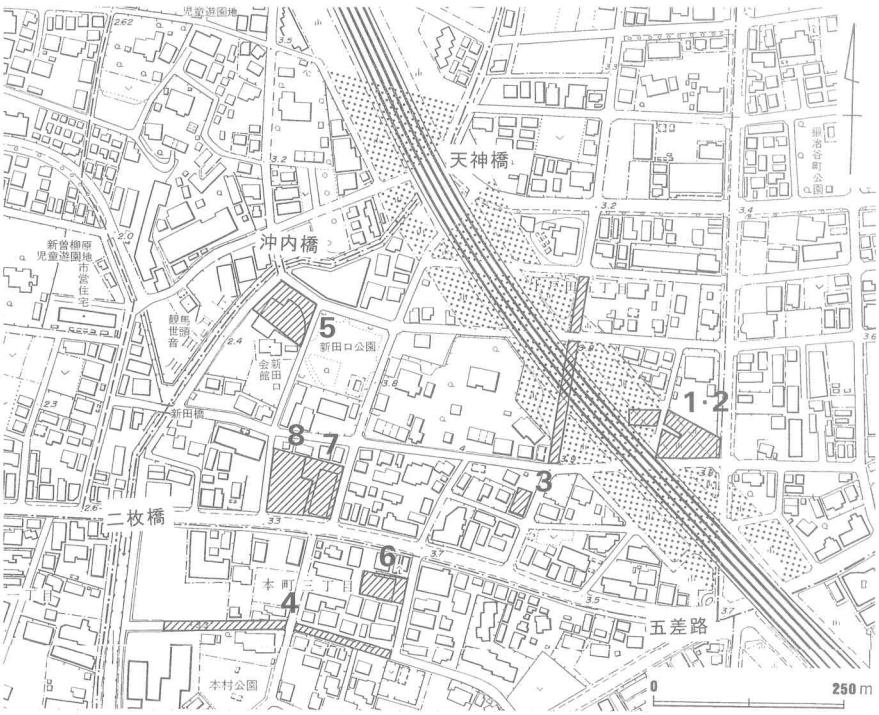
●鍛冶谷・新田口遺跡Ⅷ　　0　1Km

第２図　大正期の鍛冶谷・新田口遺跡周辺の地形図

4　鍛冶谷・新田口遺跡の概観

鍛冶谷・新田口遺跡は、荒川（旧入間川）の溢流によって形成された火山灰質の砂質粘土を基盤とする自然堤防の北端縁に立地している。弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓群として昭和51年に埼玉県選定重要遺跡に位置づけられ、これまでの発掘調査によって多数の方形周溝墓や住居跡が折り重なるように構築された大規模な集落であることが集落跡であることが明らかになっている。

遺跡の名称は、この地域がもとは「鍛冶谷（屋）」「新田口」と称したことに由来する。昭和40年代という早い時期から区画整理が行われ、現在では「上戸田」という地番名称になっている。したがって、昭和42年の第１次調査においては「鍛冶谷遺跡」として発掘調査が行われている。その後、第２次調査においては新田口地区にも遺跡が及ぶことが確認され「鍛冶谷・新田口遺跡」という名称になっている。



戸田市教育委員会調査
1．第１次（1967）
2．第２次（1968）
3．第３次（1982）
4．第４次（1983）

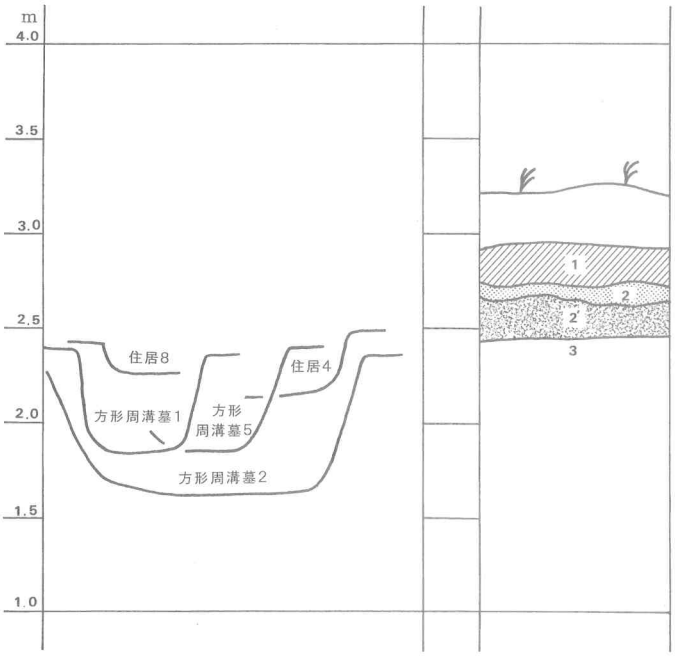
戸田市遺跡調査会調査
5．第５次（1989）
6．第６次（1992）
7．第７次（1997）
8．第８次（1999）

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査
（1982～1984）

第３図　鍛冶谷・新田口遺跡調査地位置図

この遺跡の位置する上戸田村は、江戸時代の末期に編纂された『新編武蔵風土記稿』の上戸田村の項を見ると、「上戸田村ハ群境荒川ノ岸ニアリ、江戸ヨリノ行程三里、戸田領十一カ村ノ本郷ナリ、古上下戸田及び蕨、塚越の四村ヲ合セ戸田村ト唱ヘシト云、サレド正保ノ改ニ戴タレバ分村ノセシハ近世ノ事ニアラス・・・」と記されている。(註１)そして、同書の小名の項には上戸田村として「鍛冶屋　新田　本村　前新田　後谷　東村」の地名があり、第２図の『大正期の鍛冶谷・新田口遺跡周辺の地形図』には「鍛冶屋村」「新田」と掲載されている。(註２)なお、現在では「鍛冶谷」「新田口」として自治会名に残されている。

この遺跡は、戸田市においては発掘調査のはじめになったところで、その発端は昭和42年に遡ることができる。それは、戸田の郷土に深い関心をもっていた一市民が、鯉のぼりの柱を立てる作業をしていたときに、一片の土器がエンピの先についていたことにはじまる。また、数日後には東側に位置する前谷地区（遺跡）においても水路から弥生土器が偶然に発見され、考古学的発掘調査への機運を一気に高めることになった。これらをきっかけに、発見された土器を慎重に取り扱い「鍛冶谷遺跡」として第１次発掘調査が行われている。このときの調査では、弥生時代後期の方形周溝墓が３基検出されている（註３)。以来、市においては当調査を含めると８次にわたり、また昭和60年には東北・上越新幹線及び埼京線の敷設工事に伴って、㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団により約21,000㎡にも及ぶ大規模な調査も行われている（註４)。市街地化が進む本市にあっては大きな成果となっている。現在までに行われた調査の成果をまとめると、弥生時代後期から古墳時代前期の主な遺構は、住居跡は57軒、方形周溝墓は113基を数えるものとなった。出土品としても壺形土器や甕形土器等の土器類、勾玉や管玉等の玉類、梯子や斧の柄等の木製品など多数の遺物が検出されており、大規模な集落であることが分かってきている。



土層註
1　明褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒を少量、炭化物を微量、白色微粒子を微量含む。粘性、弱。しまり、良。
2　暗褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を少量含む。土器を包含する。粘性、弱。しまり、良。
2′暗褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を少量含む。２層と同じであるが、色調が暗い。粘性、弱。しまり、良。
3　黄褐色土　粘土質土層。基盤となる層である。粘性、良。しまり、良。

第４図　基本土層図

註１　『新編武蔵風土記稿』巻之一百四十一　足立群之七　戸田領
註２　調査地については、現在の地図と照合して推定したもの
註３　『戸田市史　資料編。』戸田市1981
註４　西口正純　1986『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団

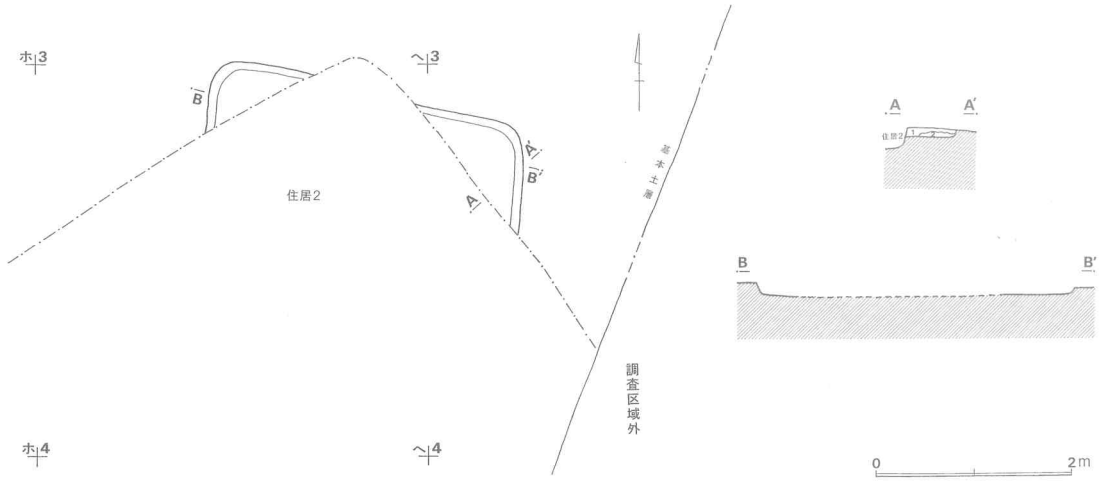
第５図　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅷ遺構配置図

5　遺構と出土遺物

(1)住居跡と出土遺物

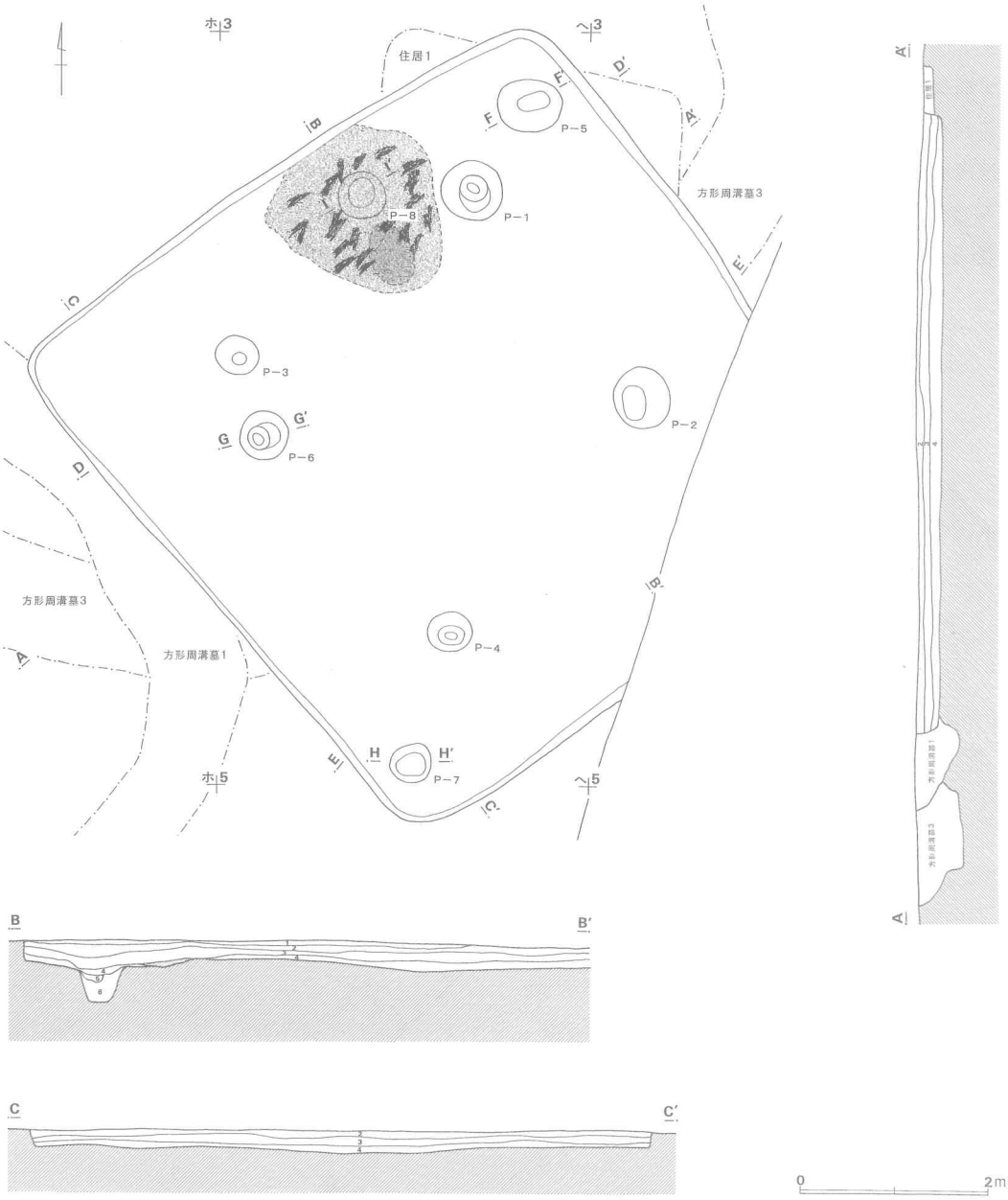
第１号住居跡（第６図）

調査区の南側ホ～へ－３グリッドに位置する。第２号住居跡と切り合って構築されるが、新旧関係は本跡の方が古い。検出された範囲が少なく規模が不明であるが、隅が僅かに丸くなる隅丸方形プランとなるようである。軸偏差は南北軸がN―10°―Eをとる。床面は、遺構確認面から８㎝ほどのところに検出され、浅く平坦な掘り込みであった。ピットは検出されていない。出土遺物は、古墳時代前期の土器破片が数点検出されたが、ほとんどが小破片で図示し得るものはなかった。



土層註
1　明褐色土　黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量、黒褐色土を微量含む。粘性、良。しまり、良。
2　明褐色土　黄褐色土を多量含む。粘性、良。しまり、良。

第６図　第１号住居跡実測図



土層註

1　明褐色土　黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を少量、白色微粒子を多量含む。粘性、弱。しまり、良。
2　暗褐色土　黄褐色土粒子を微量、白色微粒子を多量含む。鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。
3　暗褐色土　黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を多量、白色微粒子を少量含む。鉄斑あり。2層に同じようである。粘性、良。しまり、良。
4　黒褐色土　黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を多量、焼土・炭化物を部分的に多量含む。粘性、良。しまり、良。
5　黒褐色土　黄褐色土粒子を多量含み、合わせてブロック状（030～50㎜）に少量、灰褐色土粒子を少量含む。粘性、強。しまり、良。
6　炭化物層　真っ黒く堆積している。黄褐色土粒子を少量含む。台付甕形土器の脚台部を出土する。粘性、良。しまり、良。

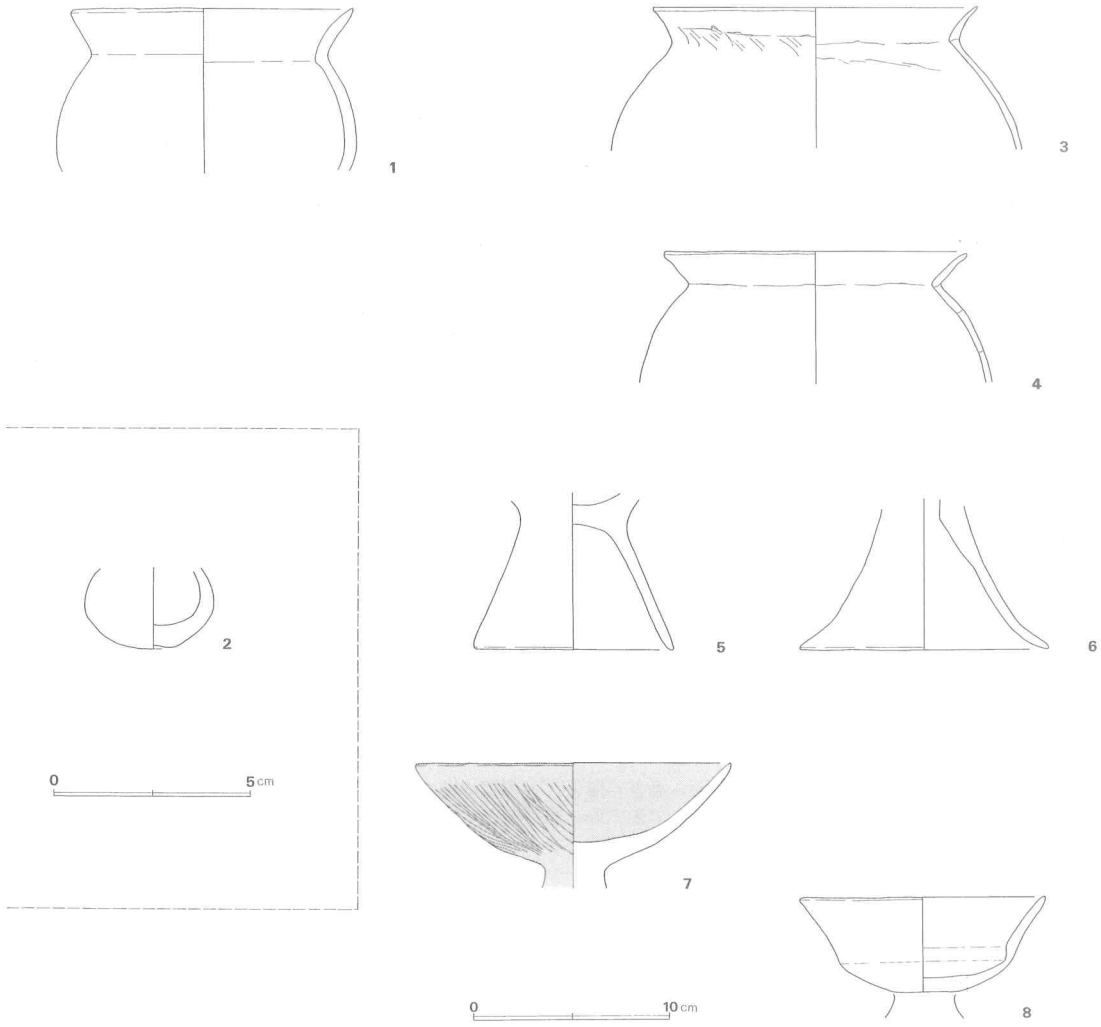
第7図　第2号住居跡実測図

第２号住居跡（第７・８図）

調査区の南側二～へ－３～４グリッドに位置する。第１号住居跡や第１・３号方形周溝墓と切り合って構築されるが、北東側コーナー部分は調査区域となる。新旧関係は、本跡の方が最も新しい。検出された部分での規模は、長径6.8m、短径6.6m、推定面積44.88m²を測り、方形プランとなる。軸偏差は南北軸がN—40°—Wをとる。床面は、遺構確認面から26cmほどのところに検出され平坦な掘り込みであった。ピットは合計８ヶ所検出され、主柱穴はP—１～４と思われる。P－１は長径65cm、短径65cm、床面からの深さ47cmを測り、中型円形で底面に柱根状の掘り込みがある。P－２は長径70

第８図　第２号住居跡遺物出土位置図

cm、短径60cm、床面からの深さ34cmを測り、中型円形である。P－3は長径50cm、短径42cm、床面からの深さ25cmを測り、中型円形である。P－4は長径50cm、短径42cm、床面からの深さ16cmを測り、中型円形で底面に柱根状の掘り込みがある。P－5は長径70cm、短径58cm、床面からの深さ20cmを測り、中型円形である。P－6は長径60cm、短径55cm、床面からの深さ21cmを測り、中型円形で底面に柱根状の掘り込みがある。P－7は長径50cm、短径40cm、床面からの深さ20cmを測り、中型円形である。P－8は長径50cm、短径50cm、床面からの深さ47cmを測り、中型円形である。炉跡は、ごく浅い掘り込みで中央やや北側付近から焼土が検出されており、炭化物も炉跡の周辺から多量に検出されている。出土遺物は、P－1覆土の中位層から小型（ミニチュア）の壺型土器（№2）が出土している。また、住居跡の覆土内から古墳時代前期の広口壺形土器（№1・3・4）、台付甕形土器（№5）、高坏形土器（№6・7・8）があり、小破片も含めて64点が検出されている。



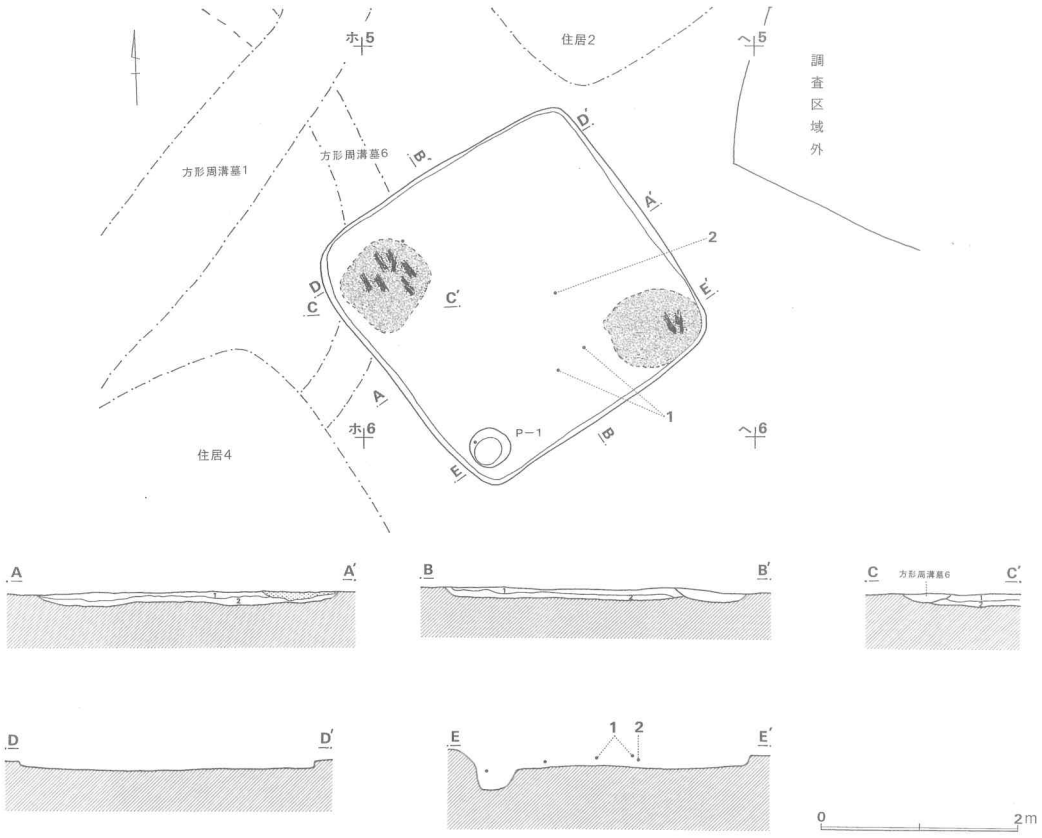
第9図　第2号住居跡出土遺物実測図

第１表　第２号住居跡出土遺物（第９図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	広口壺	口径（14.5） 胴径　15.3	鉢のような小型の広口壺型土器。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は短く外反する。胴部の張りは弱い。胴部下半及び底部を欠損する。内外面ともに摩滅が著しく調整等不明。残存、40%。	胎土　EGH少 焼成　やや不良 色調　淡い赤褐色	
2	坩	胴径　3.4 底径　0.9	ミニチュアの坩形土器の胴部。口縁部を欠損する。底部は、上げ底となる。内外面ともに摩滅著しく調整等不明。残存、60%。	胎土　FH微 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
3	広口壺	口径　15.7	「く」の字に屈曲する頸部。口縁部は短く外反する。外面は、頸部に櫛状工具による整形痕があり、口縁部には横方向のナデ調整、胴部は丁寧なナデ調整が施される。内面、口縁部は横方向のナデ調整、胴部は丁寧なナデ調整が施される。残存、20%。	胎土　EF少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
4	広口壺	口径（15.5）	「く」の字に屈曲する頸部、口縁部は短く外反する。胴部は球形となる。全体にうすいつくりの土器である。内外面ともに丁寧なナデ調整が施されるが、外面の口縁部には微妙に刷毛整形痕を残す。 残存、30%。	胎土　FGH少 焼成　良好 色調　鈍い橙褐色	
5	台付甕	脚径（10.4）	直線的に開く脚台部。内外面ともに磨滅著しく不明瞭であるが、脚台部外面はナデ調整が施され、甕部内面にはヘラナデ調整痕がある。残存、脚台部のみ30%。	胎土　G少FH多 焼成　やや不良 色調　濃い橙褐色	
6	器　台	底径　12.8	緩やかに外反しながら開く脚部。坏部を欠損する。接合部を穿孔する。内外面ともに磨滅著しく調整等不明。残存、脚部のみ30%。	胎土　H少E多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
7	高　坏	口径（16.3）	小さな接合部から口縁部に向けて緩やかに内湾しながら立ち上がる坏部。外面、丁寧なヘラミガキ調整が施され、口縁部には横方向のナデ調整が加えられる。内面は、丁寧なナデ調整が施される。内外面ともに赤彩。残存、50%。	胎土　E多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
8	高　坏	口径（12.7）	坏底部から大きく開き、下半部で段をもって外反する。脚部を欠損する。内外面ともに磨滅著しく調整等不明。残存、40%。	胎土　H微F少 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	

第３号住居跡（第10図）

調査区の南側二～ホ－５～６グリッドに位置する。第６号方形周溝墓と切り合って構築されるが、新旧関係は本跡の方が古い。検出された部分での規模は、長径3.06m、短径3.06m、推定面積9.36㎡を測り、隅が僅かに丸くなる隅丸方形プランとなる。軸偏差は南北軸がN―35°―Wをとる。床面は、遺構確認面から14cmほどのところで検出され、浅く平坦な掘り込みであった。ピットは、南コーナーに１ヶ所検出された。Ｐ－１は長径40cm、短径40cm、床面からの深さ24cmを測り、中型円形である。炭化物は、東と西のコーナーにそれぞれ多量に出土している。出土遺物は、古墳時代前期の広口壺形土器（№１）と高坏形土器（№２）が検出され、小破片も含めて総数５点が検出された。

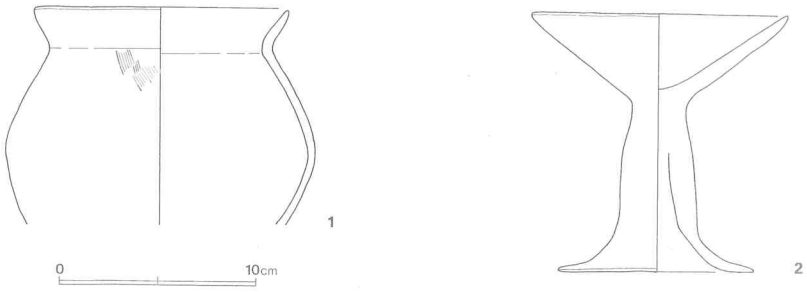


土層註

1　暗褐色土　　黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を多量、炭化物を少量含む。粘性、良。しまり、良。

2　暗褐色土　　黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック（φ30～50㎜）を多量、焼土を少量含む。粘性、良。しまり、良。

第10図　第３号住居跡実測図及び遺物出土位置図

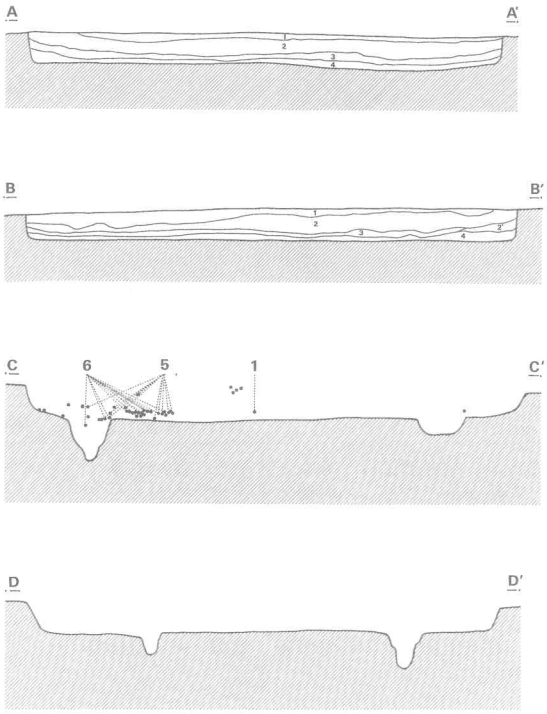


第11図　第３号住居跡出土遺物実測図

第２表　第３号住居跡出土遺物（第11図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	広口壺	口径　13.0 胴径（15.7）	頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は短く開く。胴部の膨らみは弱いが球形となる。底部を欠損する。外面、丁寧なナデ調整が施されるが、頸部に刷毛整形痕がある。内面は、丁寧なナデ調整。残存、40%。	胎土　GH少F多 焼成　良好 色調　濃い橙褐色	
2	高　坏	口径　13.0 底径（10.0） 器高　13.1	坏部は小さいが直線的にロウト状に開く。小さく収縮した接合部から脚部は裾部まで棒状につくられ裾端部で横に開く。坏部、脚部ともにナデ調整が施され、脚部の一部に刷毛整形痕が不明瞭であるが見られる。残存、60%。	胎土　FH少G多 焼成　良好 色調　鈍い橙褐色	

発掘調査風景



土層註

1　明褐色土　黄褐色土粒子を微量、白色微粒子を多量含む。粘性、弱。しまり、良。

2　暗褐色土　黄褐色土粒子をまばらに多量、灰褐色土粒子を多量、白色微粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。

2′暗褐色土　黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。

3　黒褐色土　黄褐色土粒子を少量、焼土・炭化物を少量含む。粘性、良。しまり、良。

4　黒褐色土　黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック（φ30〜50㎜）を多量含む。粘性、強。しまり、良。

第12図　第４号住居跡実測図及び遺物出土位置図

第４号住居跡（第12図）

調査区の南側ハ～ホ－５～７グリッドに位置する。第１・６号方形周溝墓と切り合って構築されるが、新旧関係は本跡の方が新しい。検出された部分での規模は、長径5.10m、短径4.84m、推定面積24.68m²を測り、隅が僅かに丸くなる隅丸方形プランとなる。軸偏差は南北軸がN―35°―Wをとる。床面は、遺構確認面から30cmのところで確認でき、しっかりとした平坦な掘り込みであった。ピットは、各コーナーに合わせて４ヶ所検出された。Ｐ－１は長径36cm、短径34cm、床面からの深さ35cmを測り、中型円形で底面に柱根状の掘り込みがある。Ｐ－２は長径46cm、短径40cm、床面からの深さ20cmを測り、中型円形である。Ｐ－３は長径22cm、短径20cm、床面からの深さ22cmを測り、中型円形である。Ｐ－４は長径50cm、短径40cm、床面からの深さ40cmを測り、中型円形で底面に柱根状の掘り込みがある。炭化物は、中央部付近にまとまって多量に出土している。出土遺物は、古墳時代前期の壺型土器（№１～５）と台付甕形土器（№６）が検出され、小破片も含めて総数55点が検出された。

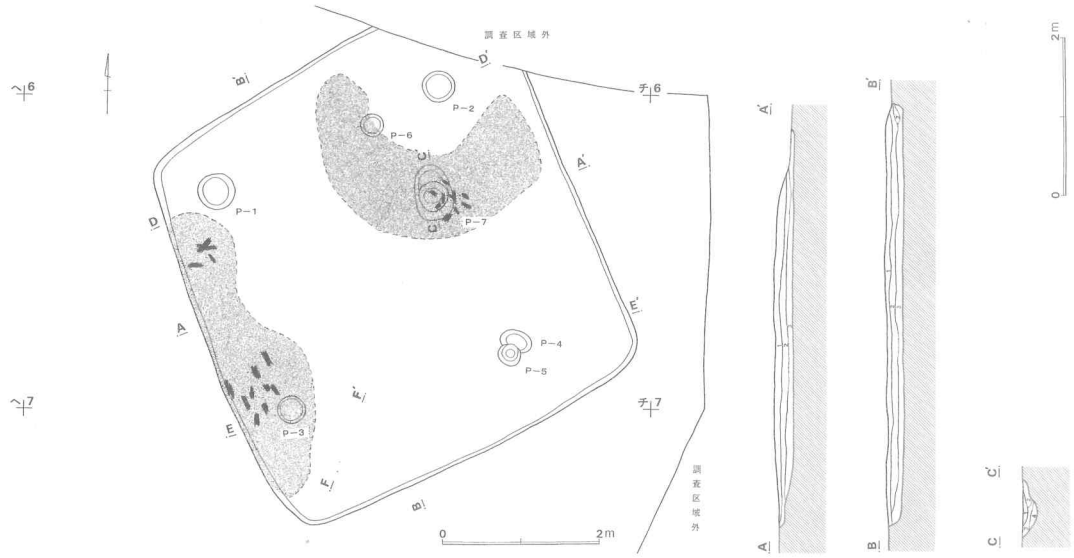
第13図　第４号住居跡出土遺物実測図

第３表　第４号住居跡出土遺物(1)（第13図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺		幅の広い複合口縁の壺形土器。複合部には、６本１単位の棒状浮文を模した条線が施される。内外面ともに丁寧なナデ調整後、赤彩される。残存、口縁部のみ。	胎土　H少FG多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
2	壺		幅の狭い複合口縁の壺形土器。複合部は丁寧なナデ調整。頸部の外面は、斜方向の刷毛整形後、ナデ調整が加えられる。内面は、刷毛整形後ナデ調整が施される。残存、口縁部のみ。	胎土　FGH少 焼成　良好 色調　鈍い橙褐色	
3	壺		幅の広い複合口縁の壺形土器。非常にうすい作りの	胎土　FG少	

第４表　第４号住居跡出土遺物(2)

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
			口縁部破片である。内外面ともに丁寧なナデ調整。残存、口縁部のみ。	焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
4	壺		幅の広い複合口縁の壺形土器。非常にうすい作りの口縁部破片である。器面の調整等、内外面ともに剥落が著しく不明瞭である。残存、口縁部のみ。	胎土　FG多 焼成　不良 色調　淡い橙褐色	
5	壺	胴径　27.0 頸径　9.8 底径　8.8	小さな底部から大きく膨らむ胴部、頸部はまた小さく収縮しロウト状に開き口縁部に向かい立ち上がる。残念ながら口縁部を欠損する。内外面ともに摩耗が著しく不明瞭であるが、外面の下部において僅かにヘラミガキ痕が見られる。２次的に火熱を受けたのか赤く変色している。 残存、80%。	胎土　H微E多 焼成　やや不良 色調　淡い赤褐色	
6	台付甕	口径　15.4 胴径　20.3 脚径　8.3 器高　28.0	頸部は「く」の字に屈曲し、胴部は膨らみは弱いが球形となる。全体的に粗雑で歪みが生じている。外面は不明瞭であるが、刷毛整形後ナデ調整が施される。とくに、口唇部はヨコナデによる調整痕あり。内面は、口縁部のみ横方向の刷毛整形、体部は丁寧なナデ調整が施される。残存、60%。	胎土　F微GH多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	



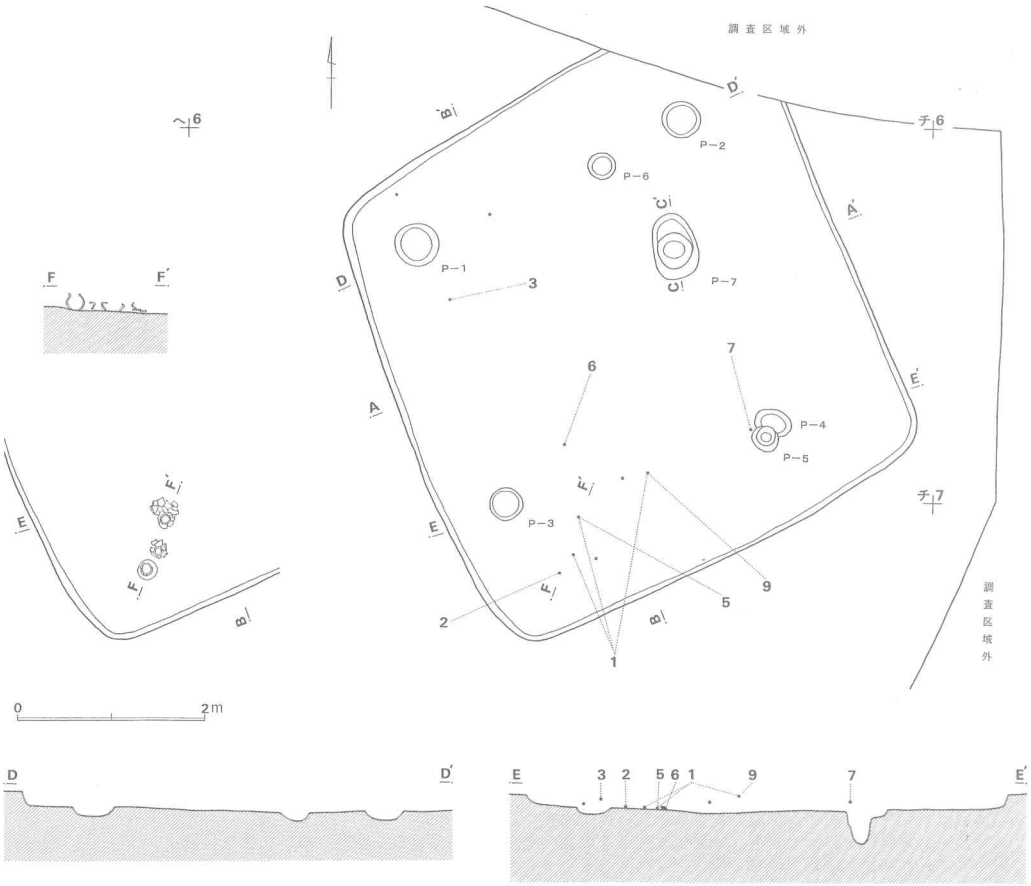
土層註
1　暗褐色土　黄褐色土粒子を少量、白色微粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。
2　暗褐色土　黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック（φ30㎜）を少量、白色微粒子を多量含む。
2′暗褐色土　２層に同じ。焼土ブロックが浮いた状態である。粘性、良。しまり、良。
3　灰黒褐色土　砂質になっている。黄褐色土ブロック（φ50㎜）を少量、炭化物を多量含む。粘性、良。しまり、強。

土層註（ピット７）
1　暗褐色土　黄褐色土粒子を少量、焼土を少量、炭化物を多量含む。粘性、弱。しまり、良。
2　暗褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を微量、炭化物を多量含む。粘性、良。しまり、良。
3　黒褐色土　黄褐色土粒子を多量、焼土ブロック（φ30～50㎜）を２ヶ所多量、炭化物を多量含む。粘性、良。しまり、良。
4　黒褐色土　黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。

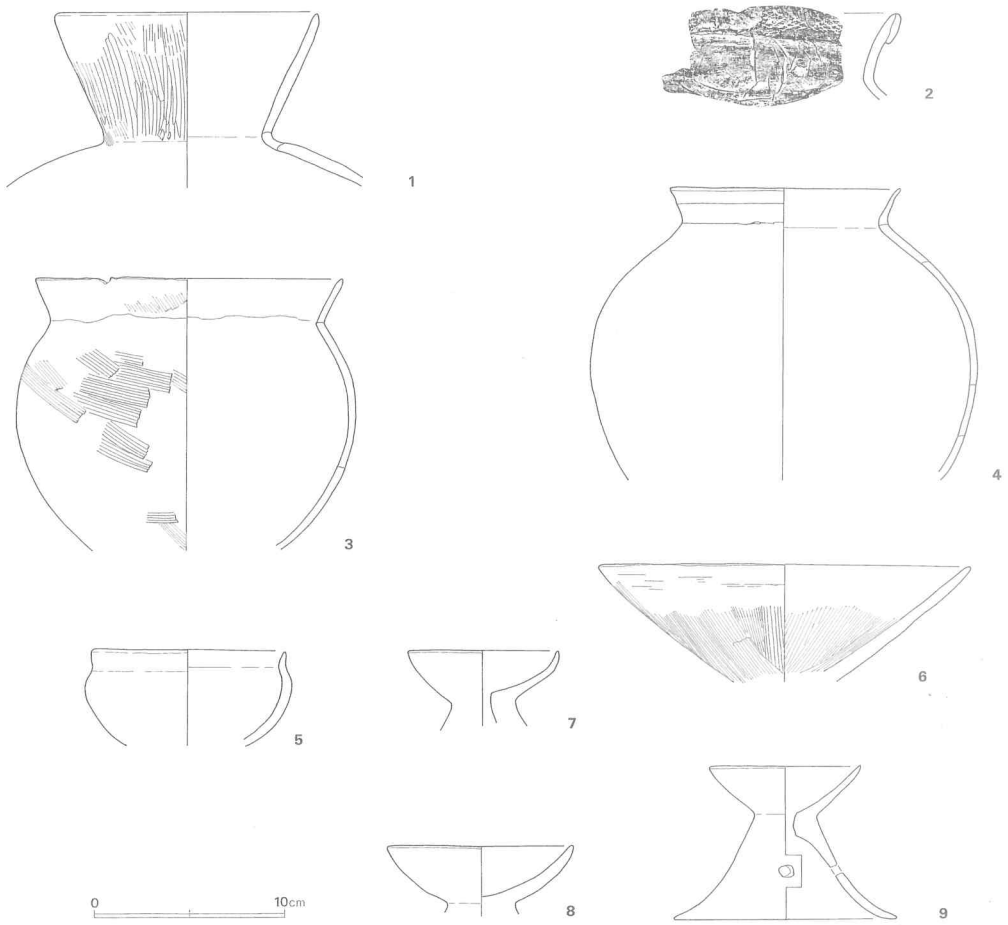
第14図　第５号住居跡実測図

第５号住居跡（第14・15図）

調査区の南側へ～ト－５～７グリッドに位置する。検出された部分での規模は、長径5.40m、短径5.10m、推定面積27.54㎡を測り、方形プランとなる。軸偏差は南北軸がN―25°―Wをとる。床面は、遺構確認面から23cmのところに確認できしっかりとした平坦な掘り込みであった。ピットは、各コーナー付近を中心に７ヶ所検出された。Ｐ－１は長径50cm、短径46cm、床面からの深さ10cmを測り、中型円形である。Ｐ－２は長径42cm、短径38cm、床面からの深さ７cmを測り、中型円形である。Ｐ－３は長径38cm、短径34cm、床面からの深さ７cmを測り、中型円形である。Ｐ－４は長径40cm、短径28cm、床面からの深さ７cmを測り、中型楕円形である。Ｐ－５は長径30cm、短径30cm、床面からの深さ35cmを測り、中型円形で底面に柱根状の掘り込みがある。Ｐ－６は長径30cm、短径30cm、床面からの深さ10cmを測り、中型円形である。Ｐ－７は長径72cm、短径50cm、床面からの深さ20cmを測り、中型円形で底面に柱根状の掘り込みがある。炭化物は住居跡内全面に広がり、とくに南側付近にまとまって多量に出土している。出土遺物は、古墳時代前期の壺型土器（№１・２）、台付甕形土器（№３・４）、針形土器（№５）、高坏形土器（№６）、器台形土器（№７～９）が検出され、小破片も含めて総数11点が検出された。



第15図　第５号住居跡遺物出土位置図



第16図　第５号住居跡出土遺物実測図

第５表　第５号住居跡出土遺物(1)（第16図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径（13.0） 頸径　8.8	小さく収縮する頸部、口縁部は直線的にロウト状に開く。胴部は欠損するが、丸く球形になるようである。外面、口縁部は刷毛整形後に丁寧なヘラミガキ調整が施される。胴部は磨滅が著しく不明瞭であるがヘラミガキ調整のようである。内面、口縁部は丁寧なナデ調整。胴部は粗いナデ調整が施される。外面を赤彩する。残存、口縁部から頸部40%。	胎土　FGH少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
2	壺		幅の狭い複合口縁の壺形土器。あるいは、広口壺形土器であろうか。複合部には、口唇部を含めて網目状撚糸文を施文、頸部は丁寧なヨコナデが施される。内面は、丁寧な横方向のヘラミガキ調整が施される。内外面ともに赤彩。残存、口縁部のみ。	胎土　H少FG多 焼成　良好 色調　淡い灰橙褐色	
3	台付甕	口径（8.0） 胴径　8.9	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は短く外傾する。胴部は張りが弱いが球形となる。脚台部を欠損する。	胎土　E微GH多 焼成　良好	

第６表　第５号住居跡出土遺物(2)

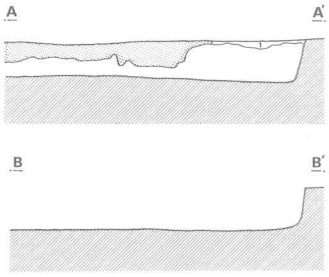
番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
			外面は細かい刷毛整形、内面の口縁部には僅かに横方向の刷毛整形が残るが、後に丁寧なナデ調整が施される。残存、60%。	色調　鈍い橙褐色	
4	台付甕	口径（12.1） 胴径（20.3）	収縮した頸部から口縁部は短く立ち上がる。口縁部はＳ字状をなし、器肉が全体にうすいつくりである。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。残存、30%。	胎土　EGH少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
5	鉢	口径　10.0 胴径　10.5	短く外反する口縁部。胴部の最大径は上位にもつが、底部を欠損する。内面には稜をつくり出すようになる。内外面ともに剥離が著しく調整等不明。胴部下半に黒斑あり。残存、70%。	胎土　EH少F多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
6	高　坏	口径　19.8	微妙に内湾しながら直線的に開く坏部。脚部を欠損する。内外面ともに細かい間隔でのヘラミガキ調整、口縁部にはヨコナデを加える。基部にφ80㎜程度の黒斑あり。残存、40%。	胎土　H微E少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
7	器　台	口径　8.0	混入物が少なく、うすく丁寧に整形されている。器受部は、小さいながらも深みを感じる。器受部は完存するが、脚部を欠損する。接合部には穿孔あり。内外面ともに剥落が著しく調整等不明。残存、50%。	胎土　EF微 焼成　良好 色調　濃い橙褐色	
8	器　台	口径　9.8	緩やかに内湾しながら開く器受部、脚部を欠損する。内外面ともに剥落・摩耗が著しく調整等不明であるが、赤彩痕を残す。残存、60%。	胎土　EH微 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
9	器　台	口径　7.9 器高　8.1	器受部は小さく、緩やかに内湾する。他と比較して僅かに深みがあるようである。脚部は、緩やかに外反しながら開く。接合部と脚部に穿孔あり。内外面ともに剥落が著しく調整等不明瞭で図示することができないが、脚部に微妙なヘラミガキ痕と赤彩痕がある。残存、80%。	胎土　H少E多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	

第６号住居跡（第17図）

調査区の南側イ～ロ－５～６グリッドに位置する。検出された部分での規模は、長径4.80m、短径4.20m、推定面積20.16㎡を測り、全体は不明であるが方形プランとなるようである。軸偏差は南北軸がN―50°―Wをとる。床面は、遺構確認面から42cmのところで確認でき、しっかりとした平坦な掘り込みであった。ピットは、検出されていない。出土遺物は、古墳時代前期の壺形土器（№１）の口縁部小破片１点が検出された。

第７号住居跡（第18図）

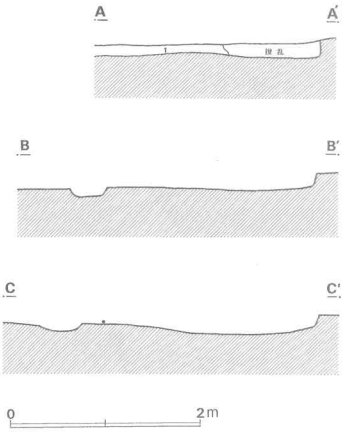
調査区の南側イ～ロ－７～８グリッドに位置する。検出された部分での規模は、長径3.60m、短径3.50m、推定面積12.60㎡を測り、全体は不明であるが方形プランとなるようである。軸偏差は南北軸がN―30°―Wをとる。床面は、遺構確認面から20cmのところで確認でき、しっかりとした平坦な掘り込みであった。ピットは、検出されていない。出土遺物は、古墳時代前期の台付鉢形土器（№１）の口縁部小破片１点が検出された。



土層註
1　暗褐色土　黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を少量、黒褐色土粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。

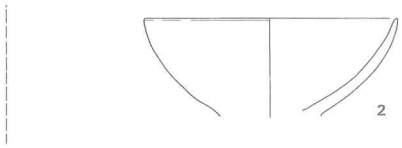
0　2m

第17図　第６号住居跡実測図



土層註
1　明褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を微量、粘性、良。しまり、良。

第18図　第７号住居跡実測図



0　10cm

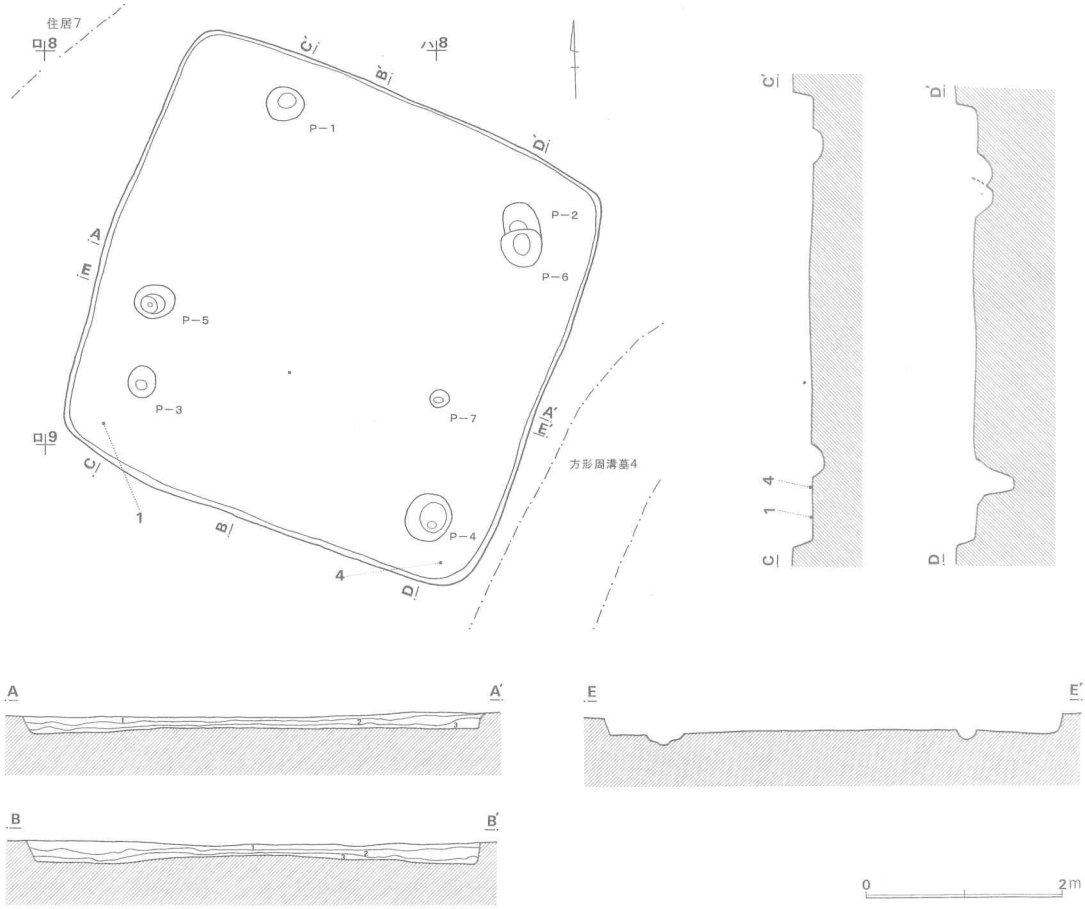
第19図　第６・.７号住居跡出土遺物実測図

第７表　第６・７号住居跡出土遺物（第19図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺		複合口縁の壺形土器。複合部には棒状浮文を付し、浮文上に櫛状工具の刺突による刻みがある。器面の調整は摩滅著しく不明瞭である。残存、口縁部のみ。	胎土　G少F多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	第６住出土
2	台付鉢	口径　13.0	緩やかに内湾する坏部。口唇部は細く尖る。器肉がうすく精緻なつくりである。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。脚部との接合点で離脱する。残存、坏部のみ30%。	胎土　HG少F多 焼成　良好 色調　鈍い橙褐色	第７住出土

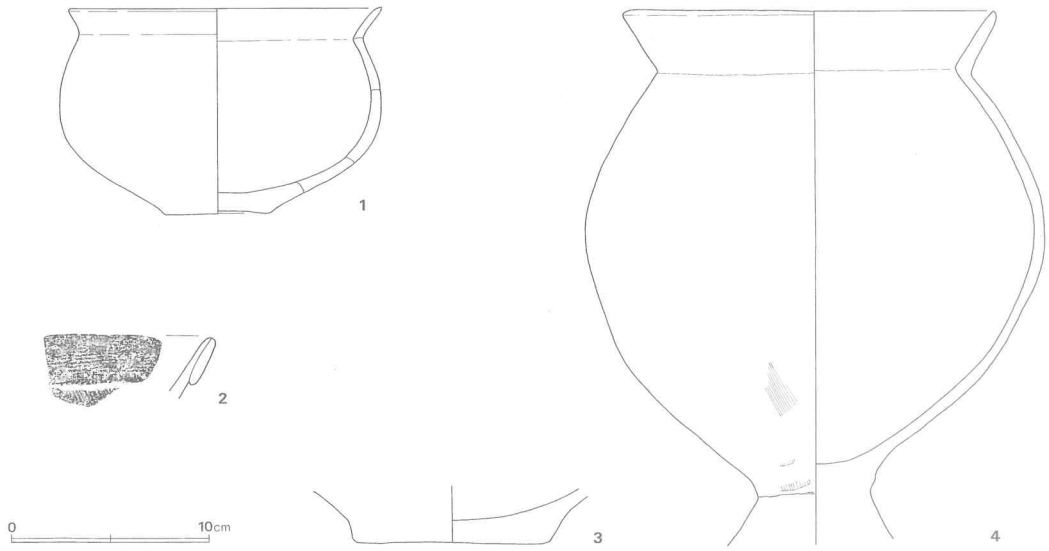
第８号住居跡（第20図）

調査区の南側ロ～ハ－７～９グリッドに位置する。検出された部分での規模は、長径4.70m、短径4.60m、推定面積21.62㎡を測り、隅が丸くなる隅丸方形プランとなる。軸偏差は南北軸がN―20°―Eをとる。床面は、遺構確認面から18cmのしっかりとした平坦な掘り込みであった。ピットは、各コーナー付近を中心に７ヶ所検出された。Ｐ－１は長径40cm、短径36cm、床面からの深さ10cmを測り、中型円形である。Ｐ－２は長径50cm、短径36cm、床面からの深さ14cmを測り、中型楕円形である。Ｐ－３は長径34cm、短径28cm、床面からの深さ12cmを測り、中型円形である。Ｐ－４は長径50cm、短径46cm、床面からの深さ35cmを測り、中型楕円形である。Ｐ－５は長径42cm、短径35cm、床面からの深さ11cmを測り、中型円形で底面に柱根状の掘り込みがある。Ｐ－６は長径40cm、短径40cm、床面からの深さ20cmを測り、中型円形である。Ｐ－７は長径20cm、短径20cm、床面からの深さ９cmを測り、中型円形である。出土遺物は、古墳時代前期の広口壺形土器（№１）、壺形土器（№２・３）、台付甕形土器（№４）が検出された。



土層註
1　暗褐色土　黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を微量、白色微粒子を多量含む。鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。
2　暗褐色土　黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を少量、白色微粒子を多量含む。炭化物・鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。
3　黒褐色土　黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を少量、白色微粒子を多量含む。粘性、強。しまり、良。

第20図　第８号住居跡実測図及び遺物出土位置図



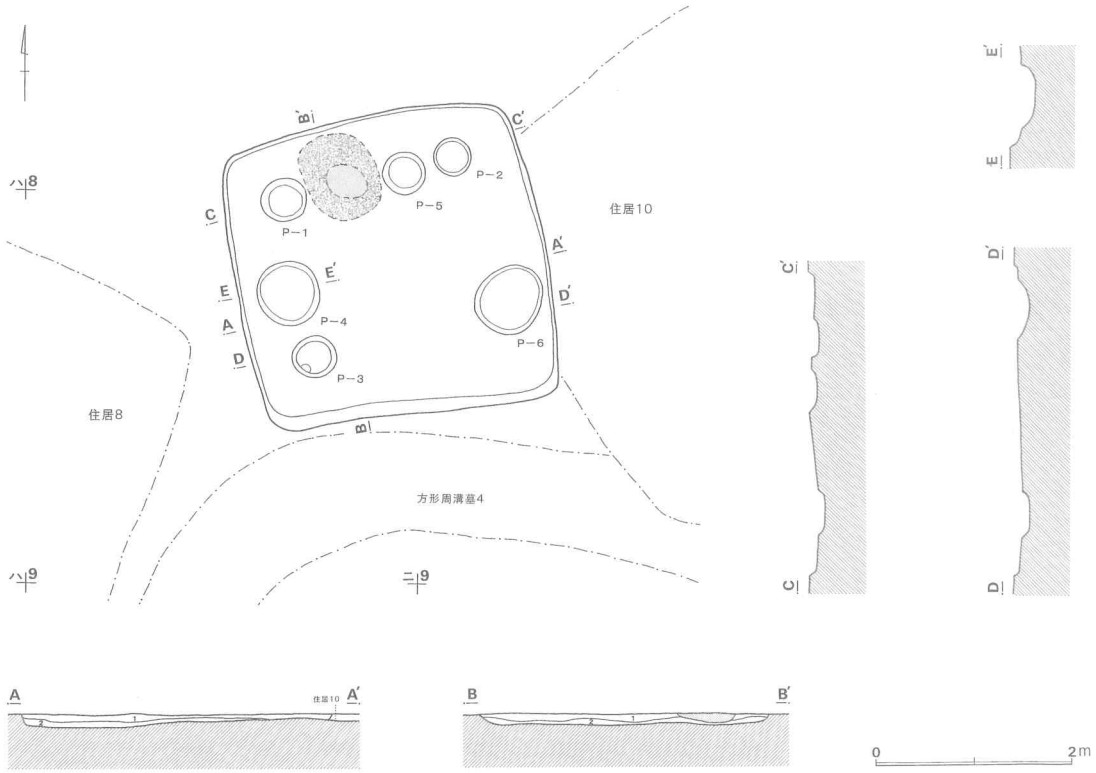
第21図　第８号住居跡出土遺物実測図

第８表　第８号住居跡出土遺物（第21図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	広口壺	口径（16.3） 胴径（16.4） 底径　5.4 器高　10.5	口径と胴径がほぼ同じ大きさになる広口壺型土器。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は短く外反する。外面は、図示することができないが細かいヘラミガキ調整。内面は丁寧なナデ調整が施される。内外面ともに赤彩。残存、40%。	胎土　FGH少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
2	壺		複合口縁となる壺形土器。あるいは、甑であろうか。外面は刷毛整形、内面は丁寧なナデ調整が施される。残存、口縁部のみ。	胎土　H少G多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
3	壺	底径　10.0	平底を呈する壺形土器。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。底面には籾殻の圧痕が見られる。残存、底部のみ完存。	胎土　EGH多 焼成　良好 色調　鈍い橙褐色	
4	台付甕	口径　19.0 胴径　23.4	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は短く直線的に開く。胴部は中位に最大径を有する。外面及び内面の口縁部に細かい刷毛整形を施す。内面の胴部は丁寧なナデ調整である。残存、60%。	胎土　FG少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	

第９号住居跡（第22図）

調査区の南側ハ～二－７～８グリッドに位置する。第10号住居跡と切り合うが本跡のほうが新しい。検出された部分での規模は、長径3.20m、短径3.10m、推定面積9.92㎡を測り、方形プランとなる。軸偏差は南北軸がN―15°―Wをとる。床面は遺構確認面から10cmのところで確認され、平坦な掘り込みであった。ピットは、６ヶ所検出された。Ｐ－１は長径45cm、短径42cm、床面からの深さ５cmを測り、中型円形である。Ｐ－２は長径40cm、短径38cm、床面からの深さ９cmを測り、中型円形である。Ｐ－３は長径45cm、短径40cm、床面からの深さ13cmを測り、中型円形である。Ｐ－４は長径66cm、短径64cm、床面からの深さ13cmを測り、やや大型の円形である。Ｐ－５は長径44cm、短径42cm、床面からの深さ８cmを測り、中型円形である。Ｐ－６は長径70cm、短径70cm、床面からの深さ14cmを測り、やや大型の円形である。この住居跡に伴う出土遺物はなく、前建築物による攪乱もあり不明瞭であったが床面を辛うじて検出したものである。

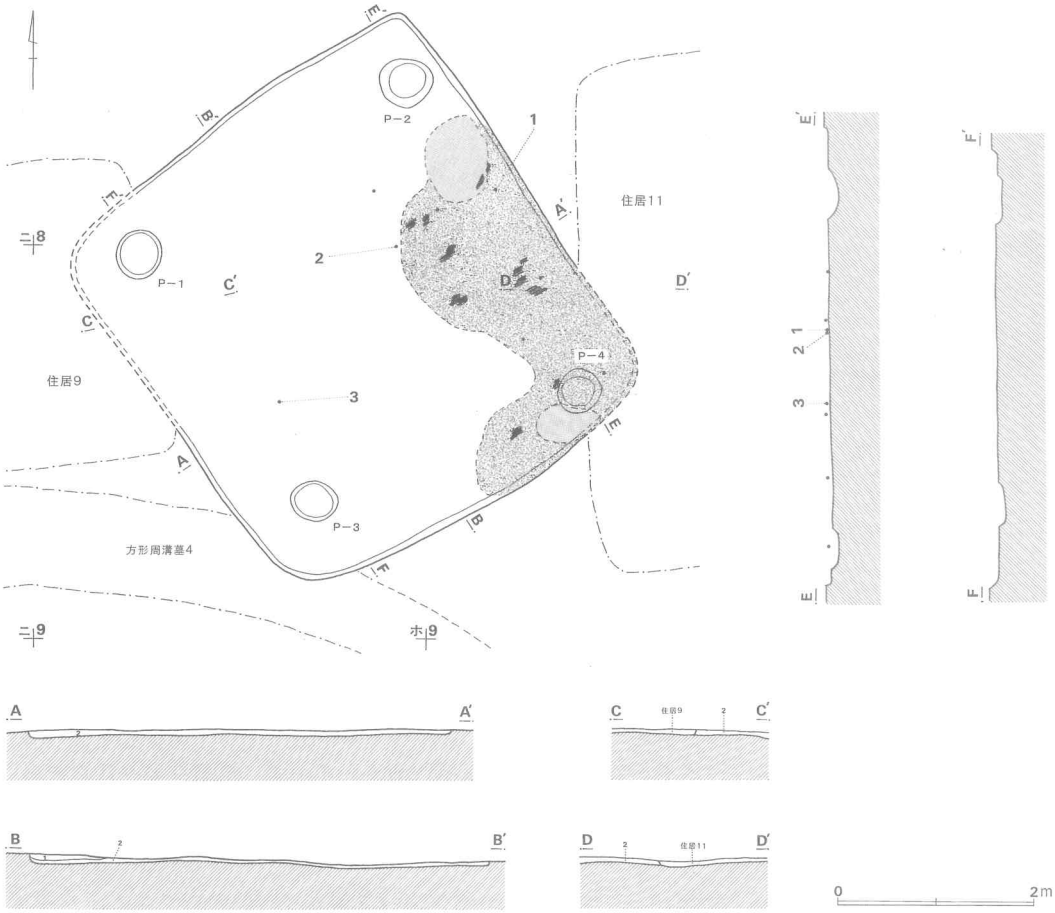


土層註
1　暗褐色土　黄褐色土粒子を少量、焼土・炭化物を微量含む。粘性、良。しまり、良。
2　暗褐色土　黄褐色土粒子をブロック状に多量、炭化物を少量含む。粘性、良。しまり、良。

第22図　第９号住居跡実測図

第10号住居跡（第23図）

調査区の南側二～ホ－７～８グリッドに位置する。第９・11号住居跡と切り合うが本跡が最も古い。検出された部分での規模は、長径4.80m、短径4.40m、推定面積21.12㎡を測り、方形プランとなる。軸偏差は南北軸がN―35°―Wをとる。床面は遺構確認面から７㎝のところで確認され、平坦な掘り込みであった。ピットは、各コーナー付近を中心に４ヶ所検出された。Ｐ－１は長径50㎝、短径50㎝、床面からの深さ３㎝を測り、中型円形である。Ｐ－２は長径54㎝、短径52㎝、床面からの深さ12㎝を測り、中型円形である。Ｐ－３は長径50㎝、短径40㎝、床面からの深さ７㎝を測り、中型円形である。Ｐ－４は長径48㎝、短径46㎝、床面からの深さ７㎝を測り、やや中型円形である。炭化物は南東コーナーに多量に検出された。出土遺物は広口壺形土器（No.１）、坩形土器（No.２）、台付甕形土器（No.３）が検出され、小破片も含めて総数８点が検出された。



土層註
1　暗褐色土　黄褐色土粒子を微量、黒褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。
2　黒褐色土　黄褐色土粒子を多量、黒褐色土粒子を少量、炭化物を少量含む。粘性、強。しまり、良。

第23図　第10号住居跡実測図及び遺物出土位置図

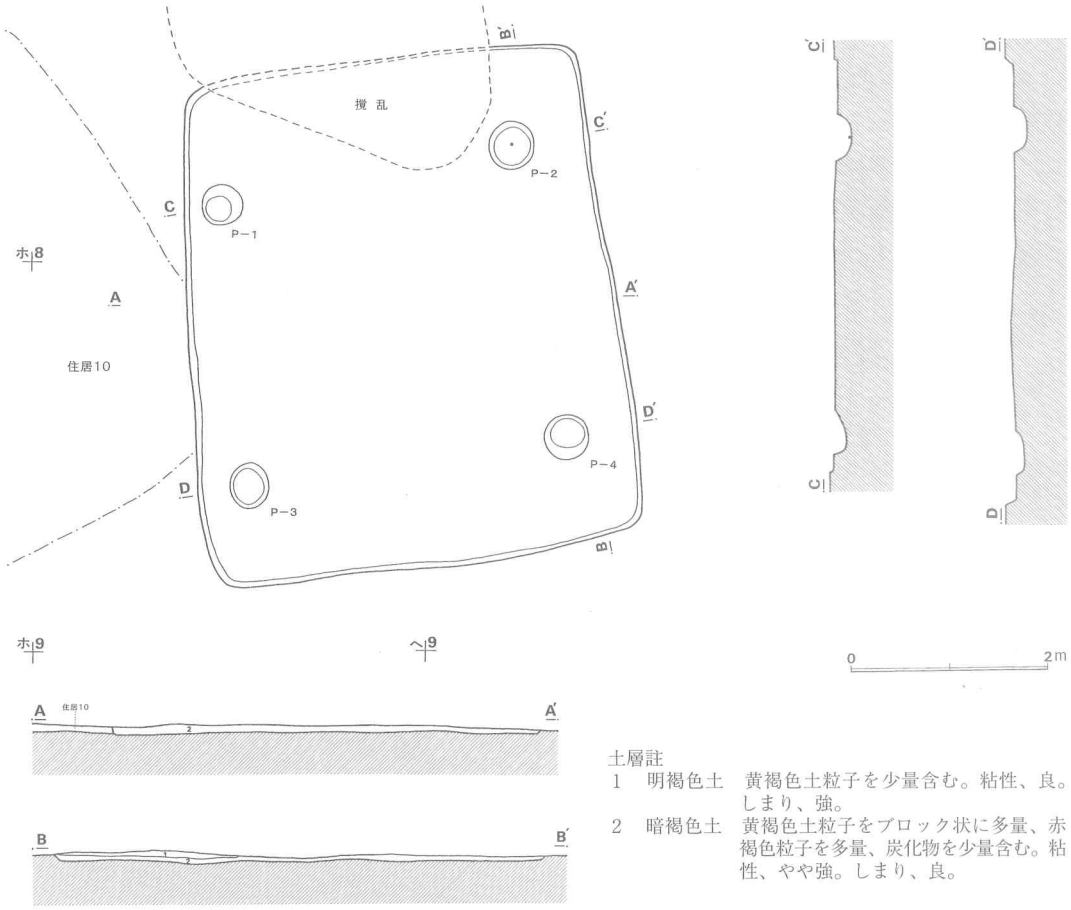
第24図　第10号住居跡出土遺物実測図

第９表　第10号住居跡出土遺物（第24図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	広口壺	口径　16.0	頸部は「く」に屈曲し、口縁部は短く外反して開く。器肉のうすい精緻なつくりである。内外面ともに刷毛整形後、ナデ調整を加える。残存、口縁部のみ40%。	胎土　EH少G多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
2	台付甕		やや大きめの甕部となる台付甕形土器の脚台部との接合部。外面は粗い刷毛整形後、ナデ調整を加える。内面は丁寧なナデ調整が施される。残存、10%。	胎土　GH（細）少 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
3	坩	胴径（7.6）	丸底となる小型の坩形土器。口縁部を僅かに欠損するが、ほぼ口縁に近い位置である。頸部は小さく収縮し、口縁部に向けて直線的に開く。内外面ともに剥落が著しく不明瞭であるが丁寧なヘラミガキ調整が施されていたようである。残存、20%。	胎土　EH微 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	

第11号住居跡（第25図）

調査区の南側ホ～ヘ－７～８グリッドに位置する。第10号住居跡と切り合うが本跡のほうが新しい。検出された部分での規模は、長径5.20m、短径4.30m、推定面積22.36m²を測り、隅丸方形プランとなる。軸偏差は南北軸がN―５°―Wをとる。床面は遺構確認面から７cmで、平坦な掘り込みであった。ピットは、各コーナー付近を中心に４ヶ所検出された。Ｐ－１は長径43cm、短径40cm、床面からの深さ10cmを測り、中型円形である。Ｐ－２は長径50cm、短径56cm、床面からの深さ15cmを測り、中型円形である。Ｐ－３は長径46cm、短径40cm、床面からの深さ８cmを測り、中型円形である。Ｐ－４は長径46cm、短径46cm、床面からの深さ13cmを測り、やや中型円形である。出土遺物はＳ字甕形土器（№１）１点が検出された。



第25図　第11号住居跡実測図

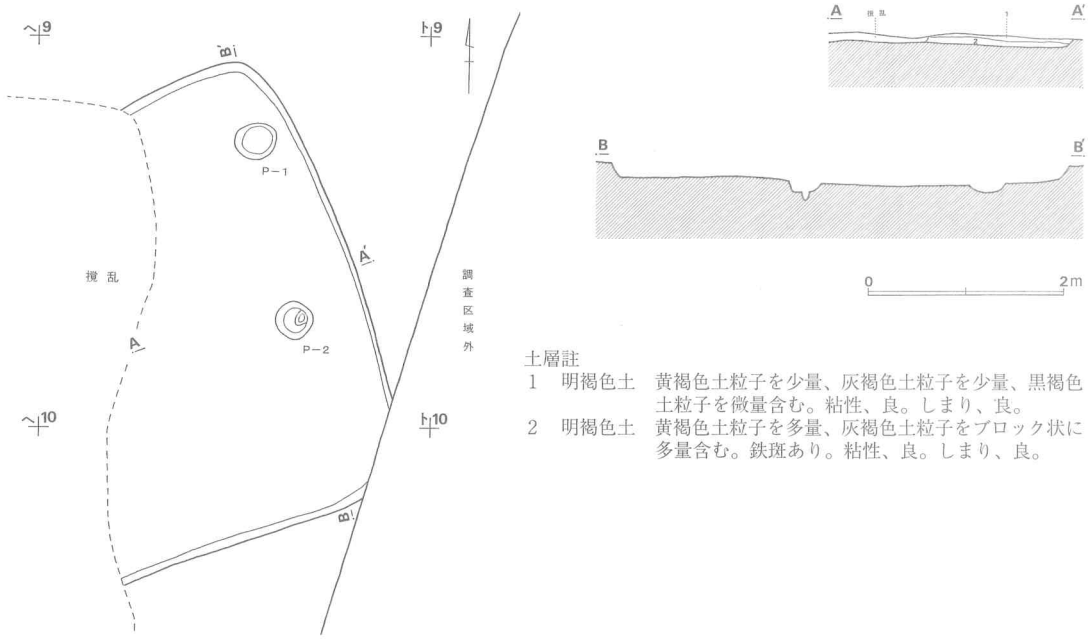
第26図　第11号住居跡出土遺物実測図

第10表　第11号住居跡出土遺物（第26図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	台付甕		S字状口縁を呈する台付甕形土器の口縁部。内外面ともに磨滅著しく調整等不明である。残存、口縁部のみ。	胎土　FH（細）少 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	

第12号住居跡（第27図）

調査区の南側へ－９～10グリッドに位置する。検出された部分での規模は、長径4.70m、短径4.00m、推定面積18.80㎡を測り、隅丸方形プランとなる。軸偏差は南北軸がN—20°—Wをとる。床面は遺構確認面から15cmで、平坦な掘り込みであった。ピットは、各コーナー付近を中心に２ヶ所検出された。Ｐ－１は長径46cm、短径36cm、床面からの深さ９cmを測り、中型円形である。Ｐ－２は長径40cm、短径38cm、床面からの深さ20cmを測り、中型円形で底面に柱根状の掘り込みがある。出土遺物は台付甕形土器（No.１）が検出された。



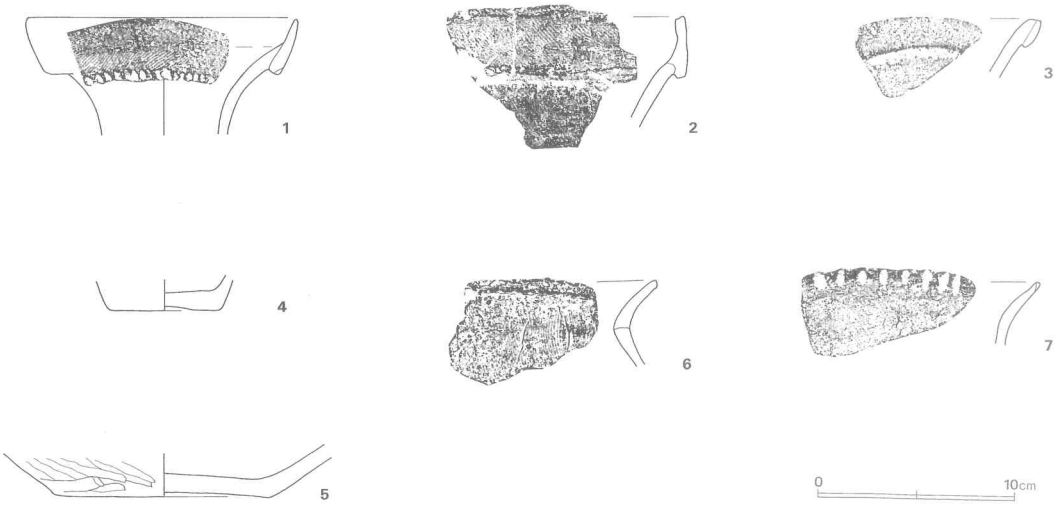
土層註
1　明褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を少量、黒褐色土粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。
2　明褐色土　黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子をブロック状に多量含む。鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。

第27図　第12号住居跡実測図

第28図　第12号住居跡出土遺物実測図

第11表　第12号住居跡出土遺物（第28図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	台付甕		緩やかに外反する口縁部。口唇部には刻み目が施される。外面は縦方向の刷毛整形、内面は横方向の刷毛整形にナデ調整を加える。残存、口縁部のみ。	胎土　FH少G多 焼成　良好 色調　鈍い茶褐色	



第29図　第１号方形周溝墓出土遺物実測図

第12表　第１号方形周溝墓出土遺物（第29図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径（14.0）	複合口縁となる口縁部破片。複合部には不明瞭であるが羽状縄文を施し、下端には刻み目が加えられる。外面の頸部及び内面は、丁寧なナデ調整が施される。内外面ともに赤彩痕あり。残存、口縁部のみ30%。	胎土　FH少G多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
2	壺		複合口縁となる口縁部破片。複合部には縄文が施される。外面の頸部及び内面は、丁寧なナデ調整が施される。残存、口縁部のみ。	胎土　H少FG多 焼成　良好 色調　鈍い灰褐色	
3	壺		幅の狭い複合口縁の破片。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。残存、口縁部のみ。	胎土　H微F少 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
4	小型壺	底径　5.8	器肉の厚い小型の土器底部破片。胴部は底部に比較してうすくなる。砂粒を多く含みモロモロとしている。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。外面のみ赤彩。残存、底部のみ50%。	胎土　G少EH多 焼成　良好 色調　濃い橙褐色	
5	壺	底径　11.0	平底となる大きな底部破片。底面は、ヘラ状工具で器面を調整する。外面は粗いヘラミガキ調整、内面はナデ調整が施される。内面の底に赤彩痕あり。残存、底部のみ60%。	胎土　FG多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
6	台付甕		緩やかに屈曲する頸部破片。口縁部は短く口唇部にあっては平坦となる。外面は縦方向の刷毛整形、内面の口縁部は横方向の刷毛整形で胴部にはナデ調整を加える。残存、口縁部のみ。	胎土　E少G多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
7	台付甕		緩やかに屈曲する口縁部破片。口唇部に粗めの刻み目を施す。外面は斜方向の刷毛整形、内面は横方向の刷毛整形にナデ調整を加える。残存、口縁部のみ。	胎土　E少G多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	

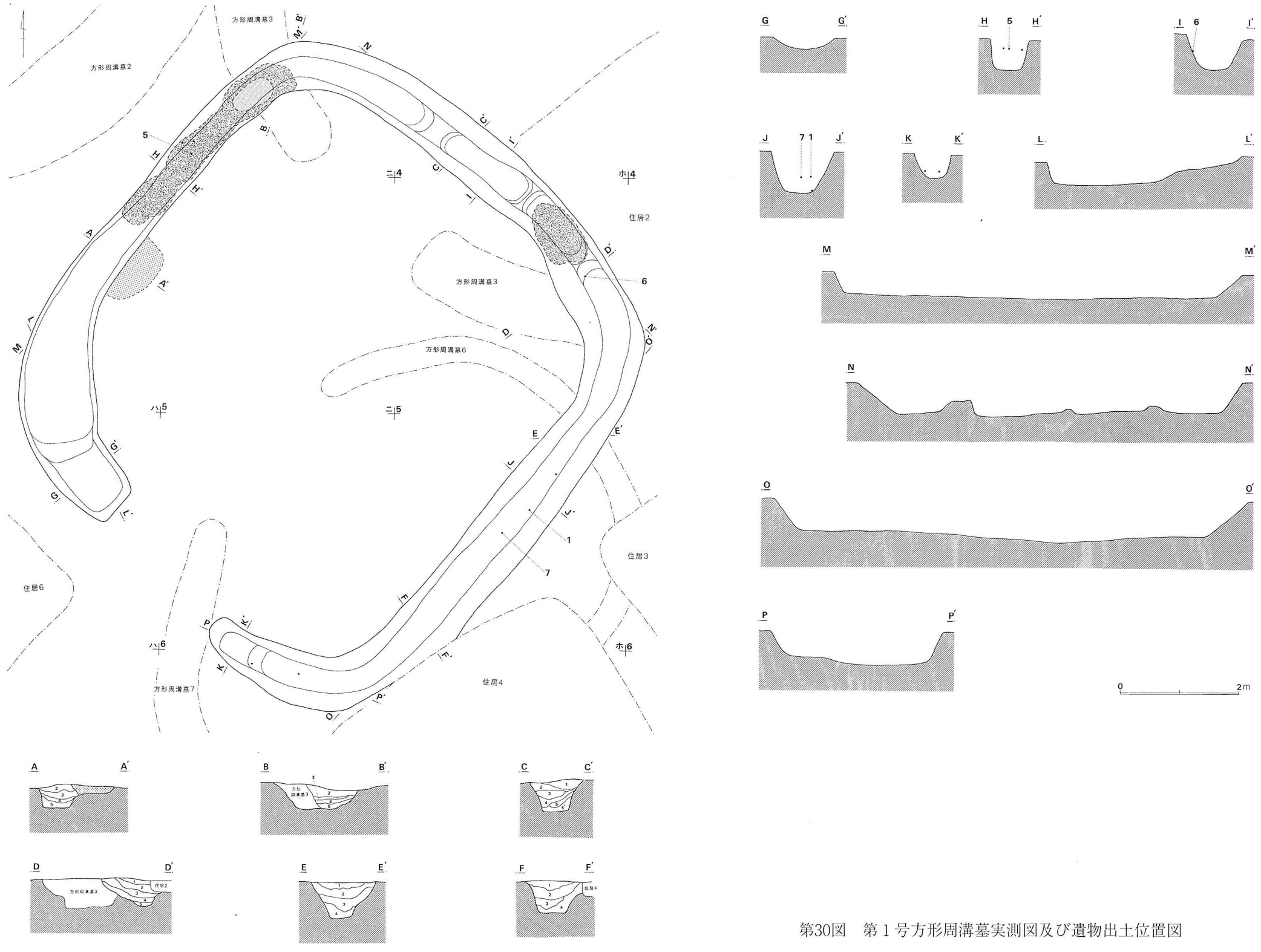
⑵方形周溝墓と出土遺物

第１号方形周溝墓（第30図）

調査区の中央やや北側ロ～ホ－３～６グリッドに位置する。北側では第３号方形周溝墓、南側では第６号方形周溝墓と切り合い、新旧関係は本跡が最も新しい。また、北側では第２号住居跡、東側では第４号住居跡と切り合い、新旧関係は本跡の方が住居跡よりも古くなる。形態は、南西方向を開口部とするもので「ハ」の字状のブリッジを形成している。開口部は、南溝の中央にあり遺構確認面において約2.5mの開口である。北溝は直線的で中央に２ヶ所の土壙状の掘り込みがあり、東西両隅にあっても土壙状の掘り込みを有する。中央部分の土壙状の掘り込みの１ヶ所からは炭化物が多量に出土している。東溝は直線的で中央部分が緩やかに低くなるが、ほぼ平坦な掘り方である。西溝は直線的でほぼ平坦な掘り方である。北側隅から中央部分にかけては焼土と炭化物が多量に出土している。南溝は中央部分に開口部を有し、隅に向かって段をもって掘り込まれるようで、南西隅の幅が広くなっている。放台部については、規模は東西7.4m、南北7.8mとなり推定面積は57.72mを測る。竪穴状の掘り方や柱穴などの存在を期待したが、検出することができなかった。北溝長さ8.4m、幅1.1m、深さ60cmを測る。東溝長さ7.8m、幅1.3m、深さ41cmを測る。西溝長さ8.3m、幅0.9m、深さ60cmを測る。軸偏差はN―40°―Eをとる。覆土は５層からなっており、掘り方に合わせて中ほどが窪む堆積の仕方である。遺物は、各溝ともまんべんなく出土しており、比較的に中層位から出土している。主な出土遺物は、壺形土器（№１～５）、台付甕形土器（№６・７）である。

土　層　註（第30図）

1	明褐色土	黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を微量、炭化物を微量含む。粘性、良。しまり、良。
2	明褐色土	黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子を少量、灰褐色土粒子を多量、炭化物を少量含む。粘性、良。しまり、良。
3	暗褐色土	黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を少量含む。粘性、強。しまり、良。
4	黒褐色土	黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子をまばらに多量、粘性、強。しまり、良。
5	黒褐色土	黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を少量含む。粘性、強。しまり、良。
5′	黒褐色土	黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック（φ30～50mm）を多量含む。炭化物あり。粘性、強。しまり、良。



第30図　第１号方形周溝墓実測図及び遺物出土位置図

第２号方形周溝墓（第31図）

調査区の北西側ロ～ハ－１～３グリッドに位置する。北側では第５号方形周溝墓、東側では第３号方形周溝墓と切り合い、新旧関係は本跡が最も新しい。形態は、南西方向を開口部とするものと推察されるが、北溝と東溝を辛うじて検出したのみで西側は調査区域外となり全容が見えない。北溝は緩やかな弧を描く。北溝との結節点において丸くなり東溝においても緩やかな弧を描くようである。北東隅部分にかけては焼土と炭化物が多量に出土している。検出された部分での規模は、北溝長さ6.7m、幅1.8m、深さ75cmを測る。東溝長さ9.4m、幅1.7m、深さ70cmを測る。軸偏差はN―40°―Eをとる。覆土は11層からなっており、掘り方に合わせて中ほどが窪む堆積の仕方で、第３・６・８層においてはつくり直しを行ったかと思われるほど黄褐色粘土ブロック、あるいは灰褐色粘土ブロックを多量に含み堅く踏み締められていた。遺物は、各溝とも多量に出土しており、中層位から出土している。主な出土遺物は、壺形土器（№１～６）、甕形土器（№７）、台付甕形土器（№８～11）である。

土　層　註（第31図）

1　暗褐色土　黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を少量、黒褐色土粒子を少量、白色微粒子を多量含む。粘性、良。しまり、良。

2　明褐色土　黄褐色土粒子を多量、赤褐色粒子をまばらに多量、黒褐色土粒子を少量、白色微粒子を多量含む。鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。

3　明灰褐色土　黄褐色土粒子を多量、黄褐色土ブロック（φ30～50㎜）を多量、灰褐色土粒子を多量、黒褐色土粒子を少量、白色微粒子を多量含む。鉄斑あり。粘性、強。しまり、強。

4　黒褐色土　黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を多量、黒褐色土粒子を少量、白色微粒子を多量含む。僅かに鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。

5　黒褐色土　黄褐色土粒子を少量、赤褐色粒子を多量、黒褐色土粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。

6　暗灰褐色土　黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を少量、黒褐色土粒子を少量含む。炭化物微量あり。粘性、強。しまり、良。

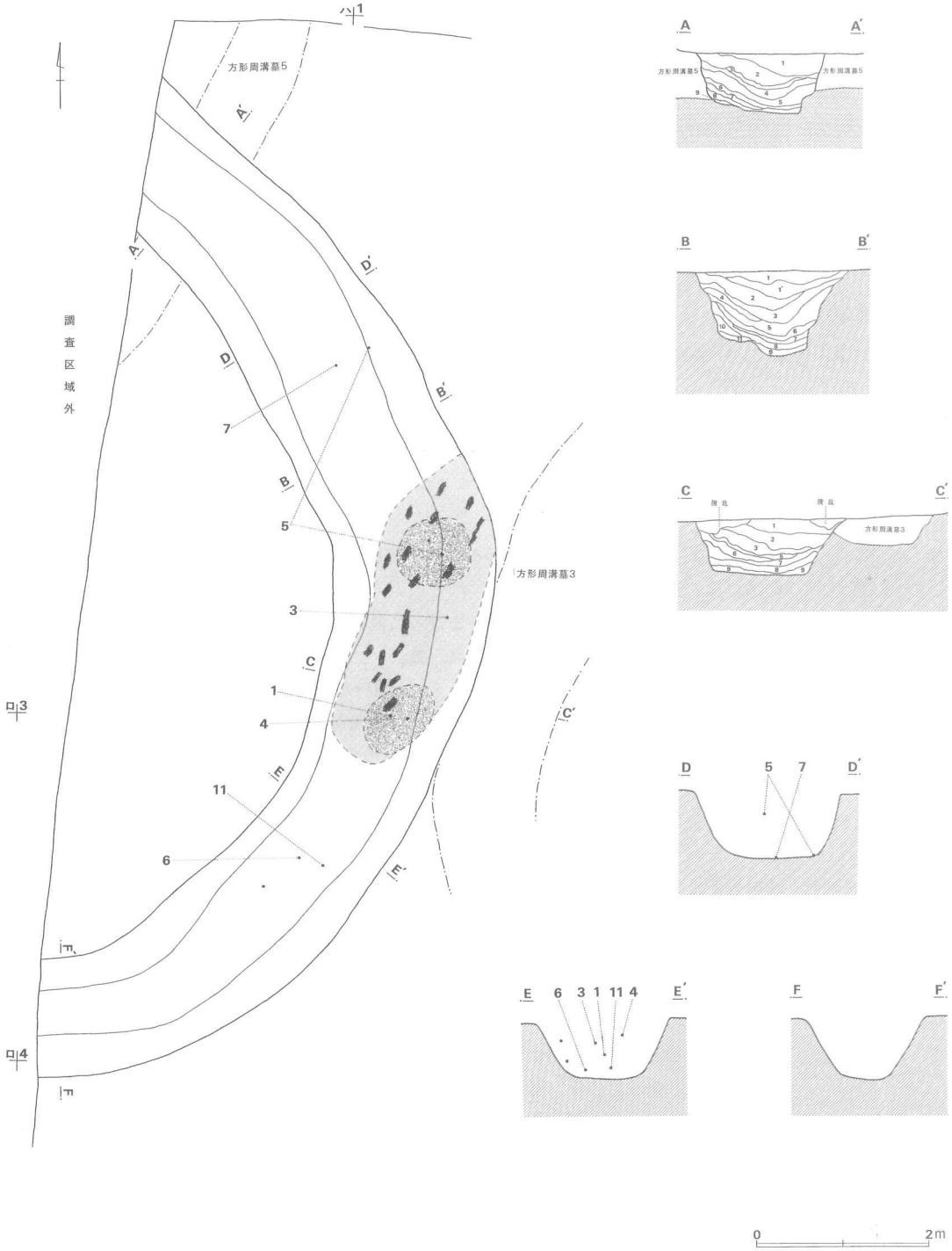
7　黒褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を少量含む。炭化物微量あり。粘性、良。しまり、良。

8　黒褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子をブロック状（φ30～50㎜）に多量含む。粘性、強。しまり、強。

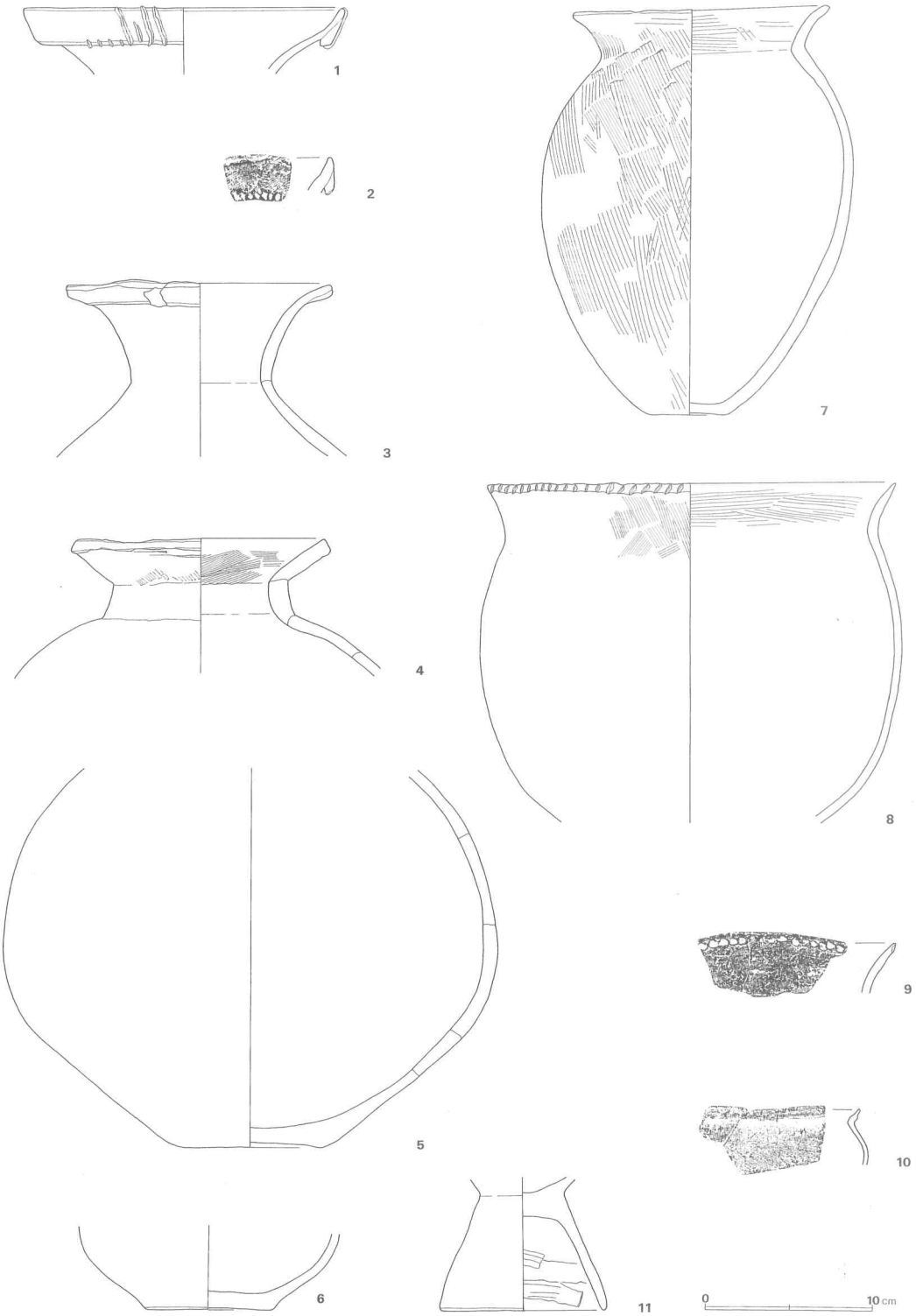
9　黒褐色土　灰褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子をブロック状（φ30～50㎜）に少量含む。僅かに鉄斑あり。粘性、強。しまり、強。

10　暗灰褐色土　黄褐色土粒子を多量、黒褐色土粒子を多量含む。鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。

11　黒褐色土　黄褐色土粒子を多量、黒褐色土粒子を多量含む。鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。



第31図　第２号方形周溝墓実測図及び遺物出土位置図



第32図　第２号方形周溝墓出土遺物実測図

第13表　第２号方形周溝墓出土遺物（第32図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径（19.3）	複合口縁の土器破片。複合部には棒状浮文を付し、口縁部下端には刻み目が施される。内外面ともに磨滅著しく調整等は不明である。残存、口縁部のみ20%。	胎土　EH少FG多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
2	壺		幅の狭い複合口縁の土器破片。不明瞭であるが、外面に縄文が施文され、複合部下端には刻み目が施される。残存、口縁部のみ。	胎土　EF少G多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
3	壺	口径（16.0） 頸径　7.5	頸部は小さく収縮し、口縁部に向かいロウト状に大きく外反する。口縁部は複合口縁となる。内外面ともに磨滅が著しく不明瞭である。僅かではあるが、頸部には縄文が、肩部には網目状撚糸文の痕跡がある。残存、20%。	胎土　H少G多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
4	壺	口径　15.4 頸径　11.0	頸部は段をもって立ち上がり、口縁部は短くつくられる。口唇部は平坦である。胴部の膨らみは大きく球形となるようである。外面、頸部及び口縁部は斜方向の刷毛整形後、ヨコナデ調整を加える。胴部は丁寧なナデ調整が施される。内面、口縁部は横方向の刷毛整形、胴部はナデ調整が施される。残存、20%。	胎土　E微FH少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
5	壺	胴径（29.8） 底径　8.9	胴部の中位やや下半に最大径をもつ壺形土器。底部は小さく上げ底状になる。頸部及び口縁部を欠損する。内外面ともに摩耗が著しく調整等は不明である。残存、30%。	胎土　DH多 焼成　やや不良 色調　淡い赤褐色	
6	壺	底径　7.7	底部から胴下半部にかけての土器破片。平底である。外面の下端に細かい刷毛整形痕が残り、横方向の丁寧なナデ調整が加えられる。内面においても丁寧なナデ調整が施される。残存、10%。	胎土　EGH少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
7	甕	口径　15.5 胴径　18.7 底径　4.9 器高　24.5	胴部の膨らみが弱い長胴の甕形土器。外面は粗い刷毛整形、内面の口縁部のみ横方向の刷毛整形、体部は丁寧なナデ調整が施される。残存、80%。	胎土　FG多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
8	台付甕	口径（24.7） 胴径（25.5）	口径のやや大きな台付甕形土器。頸部は緩やかに屈曲し短く開く。脚台部を欠損する。外面、口縁部に刻み目を付し、体部には刷毛整形痕が残る。内面、口縁部は横方向の刷毛整形、体部はナデ調整が施される。残存、30%。	胎土　FGH少 焼成　やや不良 色調　淡い赤褐色	
9	台付甕		緩やかに外反する口縁部。口唇部には刻み目を付す。内外面ともに刷毛整形後、丁寧なナデ調整が施される。残存、口縁部のみ。	胎土　F少G多 焼成　良好 色調　橙褐色	
10	台付甕		小型のＳ字状口縁。外面、口縁下部は縦方向、胴部は斜方向の刷毛整形。内面、胴部は横方向の刷毛整形後、丁寧なナデ調整が施される。残存、口縁部のみ。	胎土　FH少G多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
11	台付甕		直線的に開く脚台部。外面は丁寧なナデ調整、内面はナデ調整にヘラケズリ痕が見られる。残存、脚台部のみ60%。	胎土　H少G多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	

第３号方形周溝墓（第33図）

調査区の北側ハ～へ－１～４グリッドに位置する。南側では第１号方形周溝墓、西側では第２号方形周溝墓、東側では第１・２号住居跡と切り合い構築されている。新旧関係は本跡が最も古い。形態は、南西方向を開口部とするもので「ハ」の字状のブリッジを形成している。開口部は、南溝の中央にあり遺構確認面において約2.4mの開口である。北・東・西の各溝とも直線的であるが、やや緩やかな弧を描くように掘り込まれている。底面は各溝とも平坦な掘り方で、北溝からは炭化物が多量に出土しているが一部分は残念ながら調査区域外となってしまった。放台部については、規模は東西9.5m、南北10.4mとなり推定面積は98.8mを測る。竪穴状の掘り方や柱穴などの存在を期待したが、検出することができなかった。検出された遺構の規模は、北溝の長さ11.0m、幅1.4m、深さ50cmを測る。東溝の長さ10.0m、幅1.2m、深さ43cmを測る。西溝の長さ10.0m、幅1.6m、深さ59cmを測る。軸偏差はN—50°—Eをとる。覆土は５層からなっており、掘り方に合わせて中ほどが窪む堆積の仕方である。遺物は、各溝ともまんべんなく出土しており、比較的に中層位から出土している。主な出土遺物は、壺形土器（No.１～８・13）、小型壺形土器（No.９・10）、台付甕形土器（No.11・12）、甑（No.14）である。

土　層　註（第33図）

1　明褐色土　黄褐色土粒子を少量、黒褐色土粒子を微量、白色微粒子を部分的に多量含む。鉄斑あり。粘性、良。しまり、良。

2　明褐色土　黄褐色土粒子を少量、黒褐色土粒子を微量含む。炭化物微量あり。粘性、良。しまり、良。

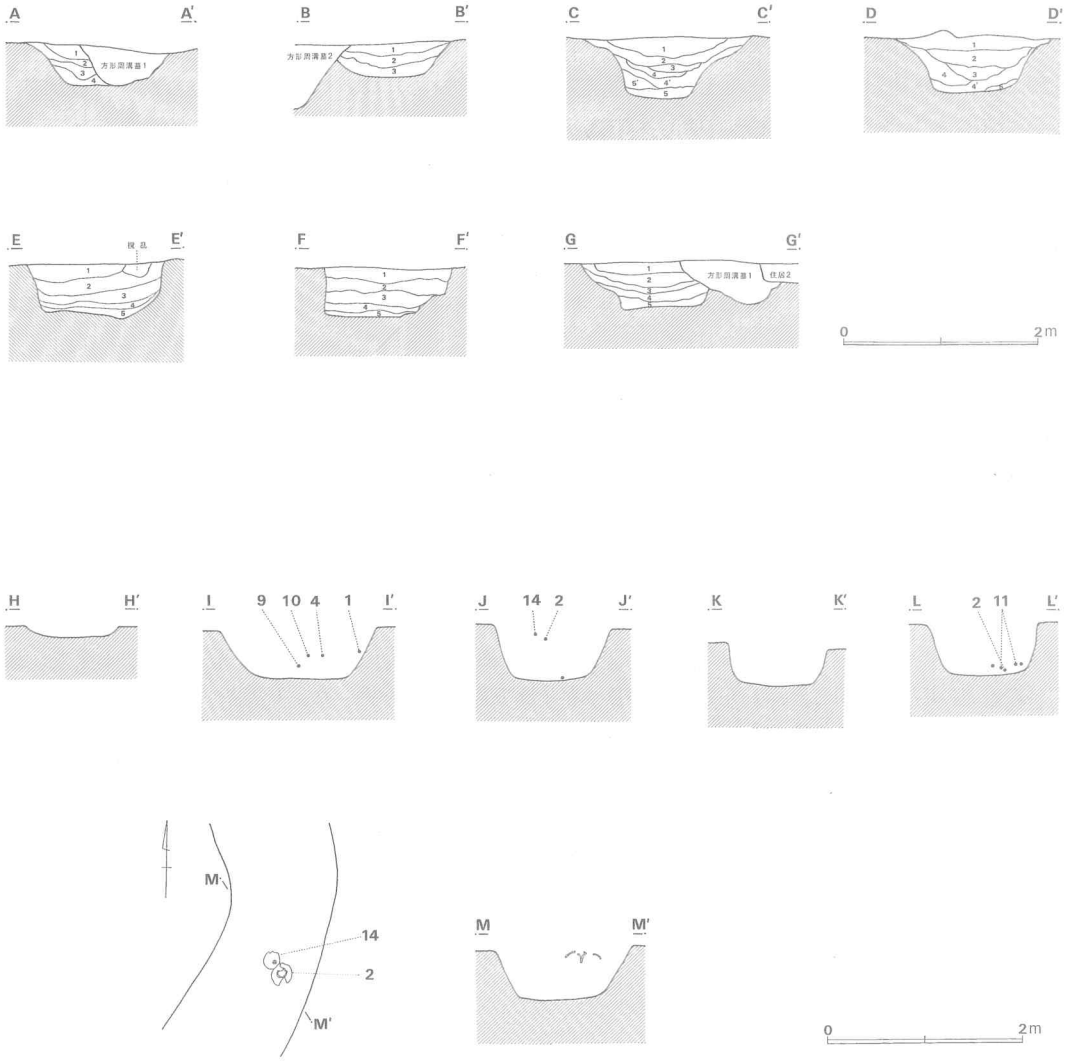
3　黒褐色土　黄褐色土粒子を少量、黒褐色土粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。

4　暗褐色土　黄褐色土粒子を多量、黒褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を微量含む。粘性、強。しまり、強。

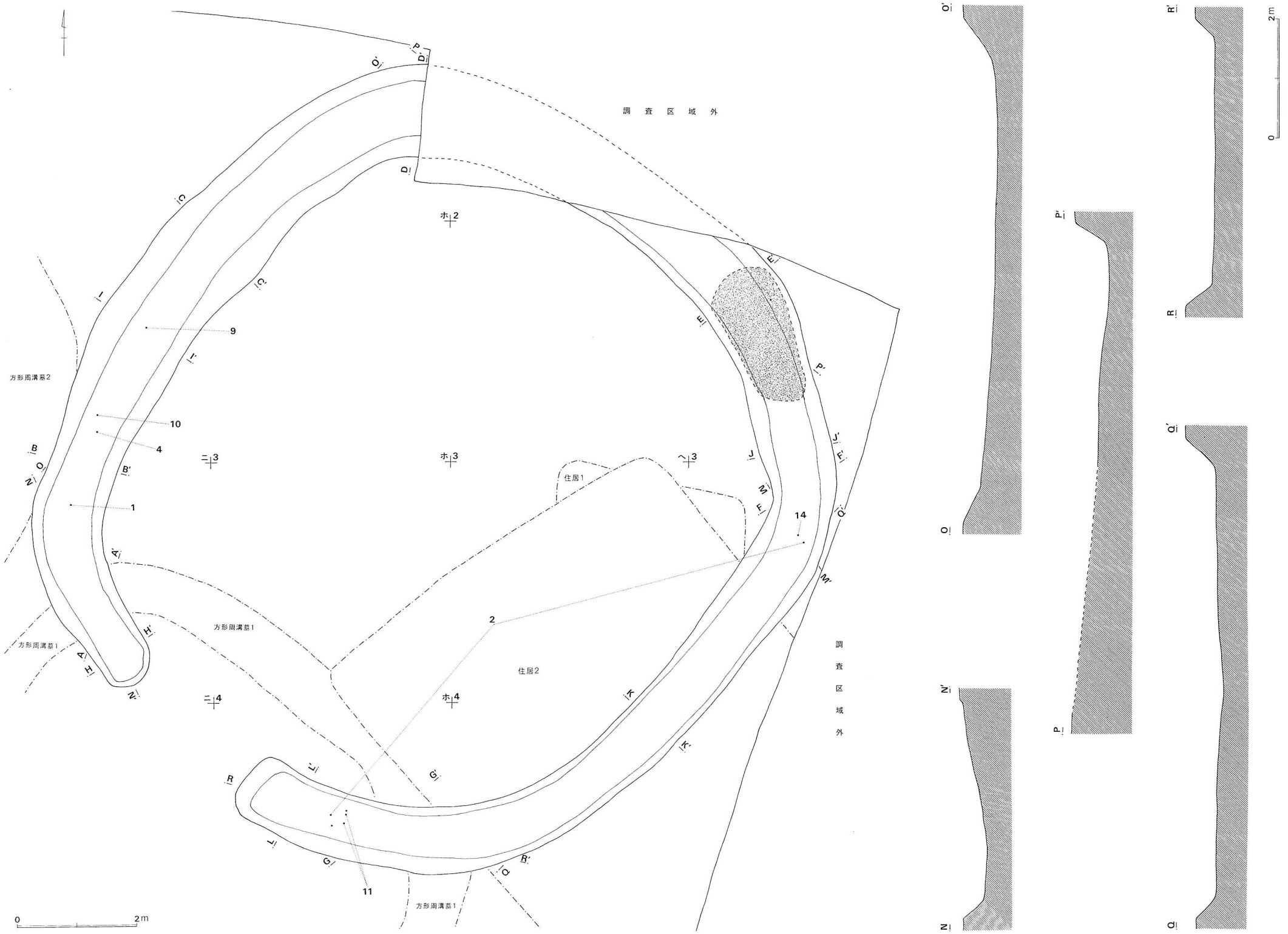
4′暗褐色土　４層と同じであるが、黄褐色土粒子が多くなる。粘性、強。しまり、強。

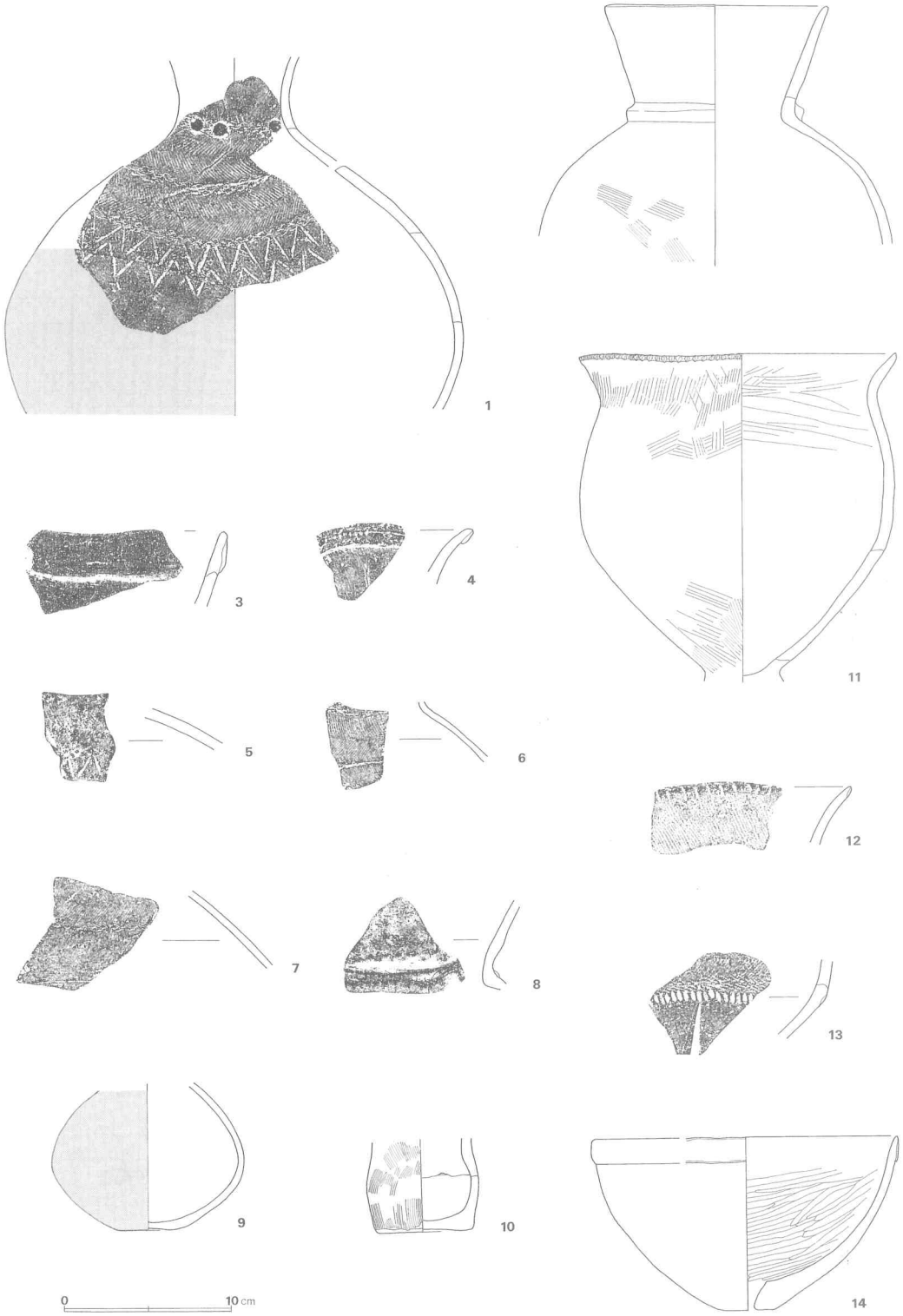
5　黒褐色土　黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子をブロック状（φ50～100mm）に少量含む。粘性、強。しまり、強。

5′黒褐色土　５層と同じであるが、灰褐色土粒子をブロック状（φ10～100mm）含む量が多くなる。粘性、強。しまり、強。



第33図　第３号方形周溝墓実測図及び遺物出土位置図


調査区域外
調査区域外
方形周溝墓2
方形周溝墓1
方形周溝墓1
方形周溝墓1
住居1
住居2
ホ2
ホ3
ホ4
ニ3
ニ4
ヘ3
0
2m
0
2m



第34図　第３号方形周溝墓出土遺物実測図

第14表　第３号方形周溝墓出土遺物(1)（第34図）

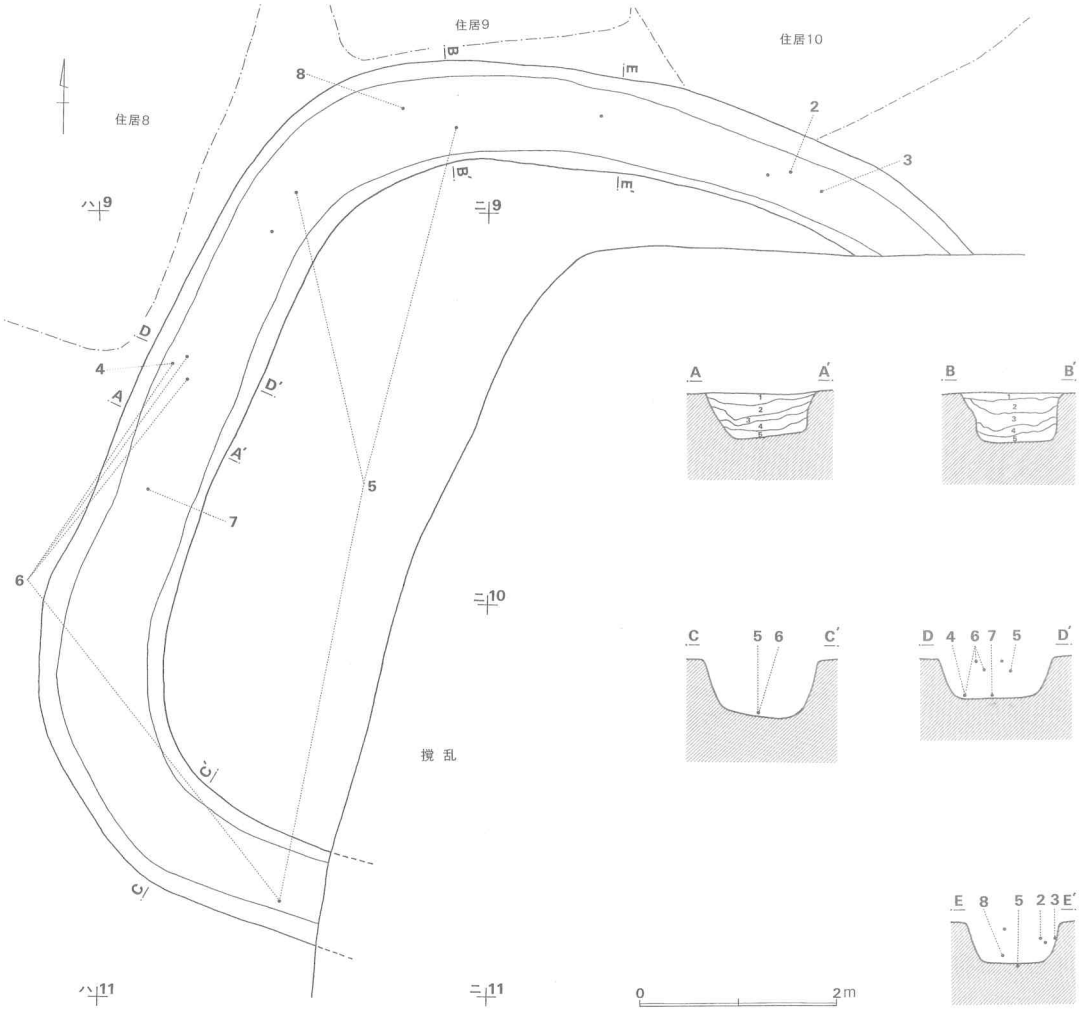
番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	頸径（6.6） 胴径（27.5）	頸部は細く収縮し、ロウト状に開きながら口縁部に向かう。残念ながら口縁部を欠損する。胴部は下半部が最大径となる。外面の頸部には縄文を施し、点付文を付す。肩部には羽状縄文が施文され、Ｓ字状結節文で区画する。肩部下位は、２段の鋸歯状文が施される。施文部分を除き、赤彩痕あり。残存、20%。	胎土　H少EG多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
2	壺	口径（13.4） 頸径（10.6）	口縁部はロウト状に直線的に開く。頸部には凸帯が付され、胴部は球形状をなす。内外面ともに二次的に火熱を受けているようであり、器面の調整等は摩耗が著しく不明瞭である。胴部には、僅かに刷毛整形痕が見られる。残存、30%。	胎土　GH微 焼成　良好 色調　淡い赤褐色	
3	壺		複合口縁を呈する土器破片。外面は丁寧な横方向のヘラミガキ調整、内面はナデ調整が施される。内外面ともに赤彩。残存、口縁部のみ。	胎土　H少FG多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
4	壺		幅の狭い複合口縁部の破片。口唇部は平坦となり縄文を付す。端部は細かい刷毛整形後、ナデ調整が施される。内面は丁寧なナデ調整。外面の頸部のみ赤彩される。残存、口縁部のみ。	胎土　F微G少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
5	壺		壺形土器の肩部破片。外面の文様帯には上部に羽状縄文を施し、Ｓ字状結節文で区画する。下部には鋸歯文が入る。内面はナデ調整が施される。残存、口縁部のみ。	胎土　FH少G多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
6	壺		肩部破片。外面に細かい羽状縄文を施文、後に文様帯の上部にＳ字状結節文を加える。内面は、丁寧なナデ調整が施される。残存、肩部のみ。	胎土　G少F多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
7	壺		大きな壺形土器の肩部破片。外面の上部には縄文が施され、Ｓ字状結節文で区画する。胴部はナデ調整である。外面の縄文帯を除き赤彩する。残存、肩部のみ。	胎土　G多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
8	壺		外面に凸帯を有する壺形土器の肩部破片。内外面ともに磨滅著しく調整等不明。残存、頸部のみ。	胎土　FH少G多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
9	小型壺	胴径（11.6） 底径　3.6	胴部の最大径を中位やや下にもつ小型壺形土器。底部は小さく平底になる。外面は不明瞭であるが上半部は横方向のヘラミガキ調整。内面は丁寧なナデ調整が施される。外面のみ赤彩。残存、30%。	胎土　FG微 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
10	小型壺	胴径（6.7） 底径　5.8	平底となる小型の壺形土器。胴部下半が若干膨らむ。外面、細かい刷毛整形後、僅かにナデ調整が施される。底部に黒斑あり。残存、30%。	胎土　G多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	

第15表　第３号方形周溝墓出土遺物(2)

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
11	台付甕	口径　19.2 胴径　18.8	頸部は緩やかに屈曲し、口縁部に向けて短く外反する。口唇部には刻み目を付す。胴部の張りは弱く、最大径は口縁部の方が大きくなる。脚台部を欠損。内外面ともに粗い器面調整である。外面の口縁部は縦方向の刷毛整形、胴部は横方向の刷毛整形後にナデ調整を加える。内面の口縁部は横方向の刷毛整形、胴部は粗い横方向のヘラナデ調整が施される。内面の下半部に僅かではあるが煤が付着する。残存、80%。	胎土　GH少 焼成　良好 色調　鈍い橙褐色	
12	台付甕		緩やかに外反する口縁部。口唇部には木口状工具による刺突で刻み目を付す。外面は斜方向の刷毛整形、内面は横方向の刷毛整形が施される。残存、口縁部のみ。	胎土　FH少G多 焼成　やや不良 色調　鈍い橙褐色	
13	壺		単純口縁になる壺形土器破片。口縁下半には刻みを付す。外面の口縁部には不明瞭であるが縄文を施文し、頸部及び内面にはナデ調整が施される。残存、口縁部のみ。	胎土　H少G多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
14	甑	口径（18.5） 底径　3.2 器高　10.3	複合口縁。底部は小さく穿孔されている。底部から緩やかに内湾しながら立ち上がる。外面は火熱を受けているためか器表面は摩耗している。内面は丁寧なナデ調整が施される。残存、60%。	胎土　F少G多 焼成　良好 色調　淡い赤褐色	

第４号方形周溝墓（第35図）

調査区の北側ロ～ニ－８～10グリッドに位置する。北側では第10号住居跡と切り合い構築されている。新旧関係は本跡の方が古い。形態は方形となるようであるが、南東部から方台部の大部分を前建築物による撹乱を受けており、開口部など不明な部分が多い。検出された北・西の各溝とも直線的に掘り込まれており、底面は各溝とも平坦な掘り方である。検出された部分での遺構の規模は、北溝の長さ7.4m、幅1.1m、深さ49cmを測る。西溝の長さ7.0m、幅1.1m、深さ49cmを測る。軸偏差はN―25°―Eをとる。覆土は５層からなっており、掘り方に合わせてほぼ水平な堆積の仕方である。遺物は、各溝ともまんべんなく出土しており、底面及び中層位から出土している。主な出土遺物は、壺形土器（№１～６・８）、台付甕形土器（№７・９）、器台形土器（№10）、土錘（№11）である。



土　層　註

1　暗 褐 色 土　黄褐色土粒子を微量、黒褐色土粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。

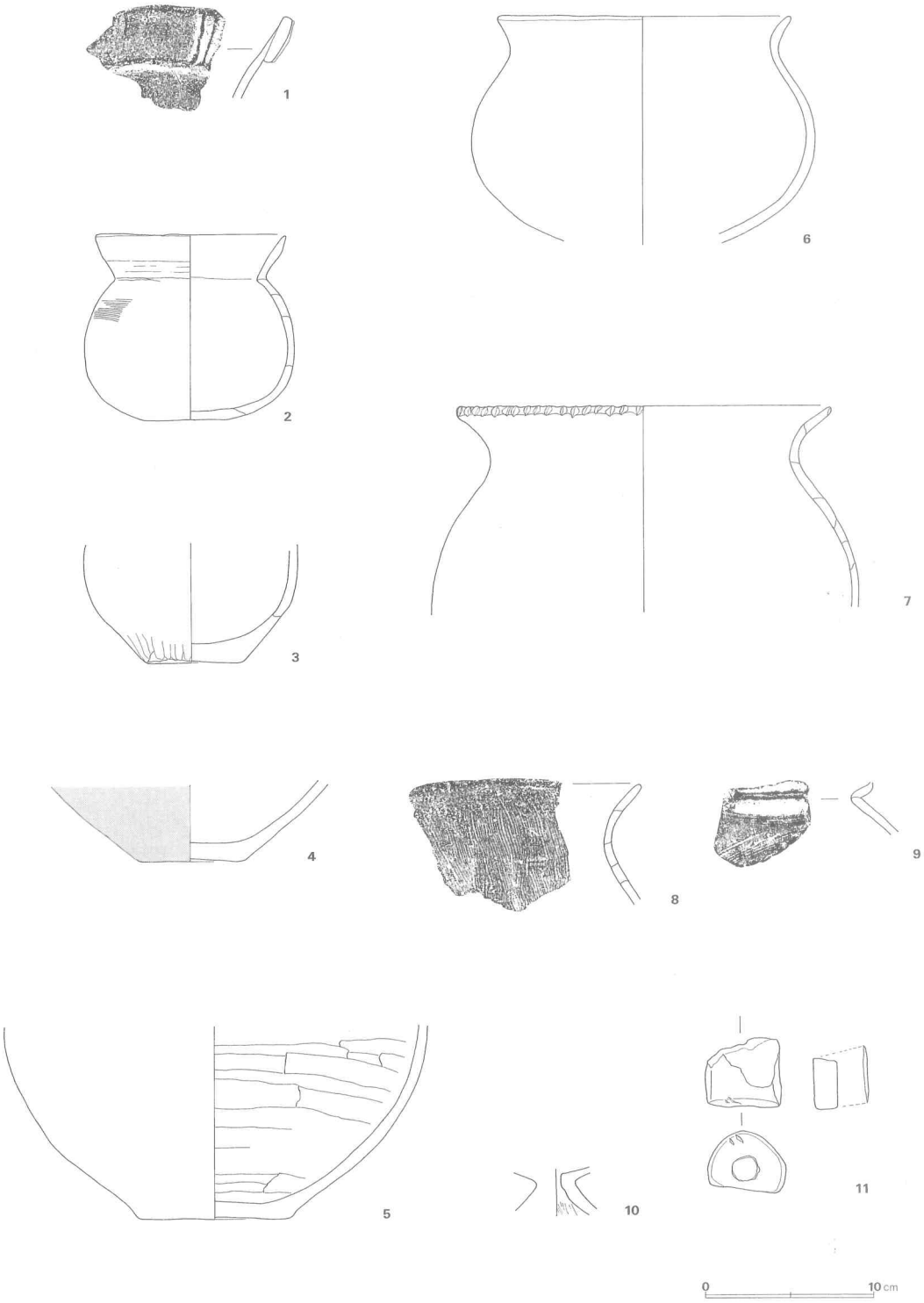
2　暗 褐 色 土　黄褐色土粒子を微量、黒褐色土粒子を微量含む。土器破片を多数出土。粘性、良。しまり、良。

3　明 褐 色 土　黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子をブロック状に多量、黒褐色土粒子を少量含む。砂っぽく鉄斑が多い。粘性、強。しまり、強。

4　黒 褐 色 土　黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子をブロック状に多量含む。粘性、強。しまり、強。

5　黒 褐 色 土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子をまばらに多量含む。粘性、強。しまり、強。

第35図　第４号方形周溝墓実測図及び遺物出土位置図



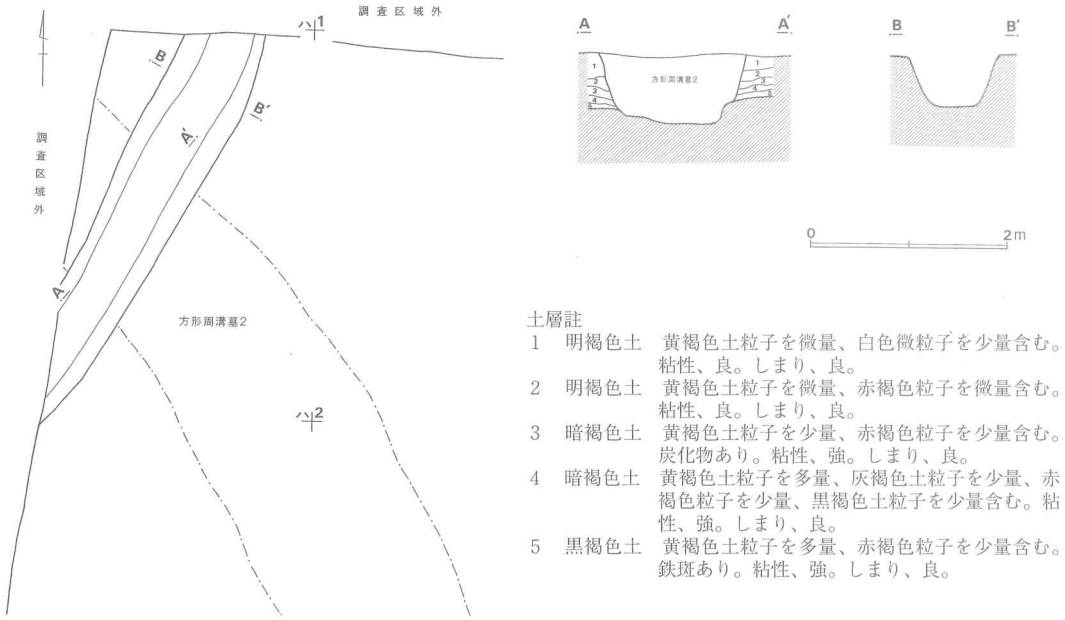
第36図　第４号方形周溝墓出土遺物実測図

第16表　第４号方形周溝墓出土遺物（第36図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺		複合口縁となり複合部には棒状浮文を付す。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。内面のみ赤彩痕が見られる。残存、口縁部のみ。	胎土　GH少F多 焼成　良好 色調　鈍い橙褐色	
2	小型壺	口径　11.2 胴径　12.5 底径　4.9 器高　11.1	頸部の収縮は弱く、口縁部は短く直線的に開く。胴部は球形に膨らみ、底部は小さく凹状になる。内外面ともに刷毛整形後、ナデ調整が施される。残存、80%。	胎土　G少FH多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
3	小型壺	底径　5.7	平底となる底部破片。緩やかに内湾しながら球形になる胴部。内外面ともに丁寧なナデ調整。外面の底部付近にはヘラミガキ痕が僅かに残る。底部を中心に大きな黒斑あり。残存、底部のみ30%。	胎土　H少FG多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
4	壺	底径　6.1	平底となる壺形土器の底部破片。外面は丁寧なヘラミガキ後、ナデ調整を加える。内面は丁寧なナデ調整が施される。外面のみ赤彩。残存、20%。	胎土　FH少G多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
5	壺	底径　9.0	平底。底部から大きく内湾しながら球形となる胴部。外面は磨滅著しく調整等は不明。内面は粗いヘラ削りによる調整が施される。外面には火熱を受けたためか赤褐色に変色している。残存、20%。	胎土　H少G多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
6	広口壺	口径　17.5 胴径　20.6	緩やかに屈曲する頸部、口縁部は短く外反する。胴部最大径が中位にあるが、底部を欠損する。内外面ともに磨滅著しく調整等は不明瞭であるが、外面及び内面の口縁部はヘラミガキ調整が施されたようである。残存、40%。	胎土　FH少 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
7	台付甕	口径（22.3）	緩やかに屈曲する頸部、口縁部は短く外反する。口唇部には刻み目を付す。体部は短く球形となるようである。外面は図示することができないが丁寧な刷毛整形、内面は丁寧なナデ調整が施される。残存、20%。	胎土　H少FG多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
8	壺		緩やかに屈曲する口縁部。外面は縦方向の刷毛整形、内面は横方向の刷毛整形が施される。残存、口縁部のみ。	胎土　H少FG多 焼成　良好 色調　鈍い橙褐色	
9	台付甕		Ｓ字状口縁。口唇部を欠損する。外面は横・斜方向の刷毛整形、内面は丁寧なナデ調整が施される。焼成は、堅緻である。残存、頸部のみ。	胎土　H少F多 焼成　良好 色調　濃い橙褐色	
10	器　台		受部と脚部の接点となる接合部。中心に穿孔があり内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。脚部内面に刷毛整形痕がある。内外面ともに赤彩。残存、10%。	胎土　EF少 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
11	土　錘		土錘の破損品。中心に穿孔あり。穿孔部分をはずして欠損しており、平坦面をつくり出す。平坦面は摩耗している。表面は、ナデ調整である。残存、40%。	胎土　F少EG多 焼成　良好 色調　淡い灰褐色	

第５号方形周溝墓（第37図）

調査区の北側ロ－１グリッドに位置する。第２号方形周溝墓と切り合い構築されている。新旧関係は本跡の方が古い。遺構のほとんどが調査区域外となってしまうため、検出された部分が少なく形態は不明であるが、方形と推定できる。検出された溝は東溝と推察でき、直線的に掘り込まれており、底面は各溝とも平坦な掘り方である。検出された部分での遺構の規模は、東溝の長さ4.6m、幅0.9m、深さ52cmを測る。軸偏差はN—30°—Eをとる。覆土は５層からなっており、掘り方に合わせてほぼ水平な堆積の仕方である。遺物は少ないが中層位から出土している。主な出土遺物は、高坏形土器（№１）である。



第37図　第５号方形周溝墓実測図

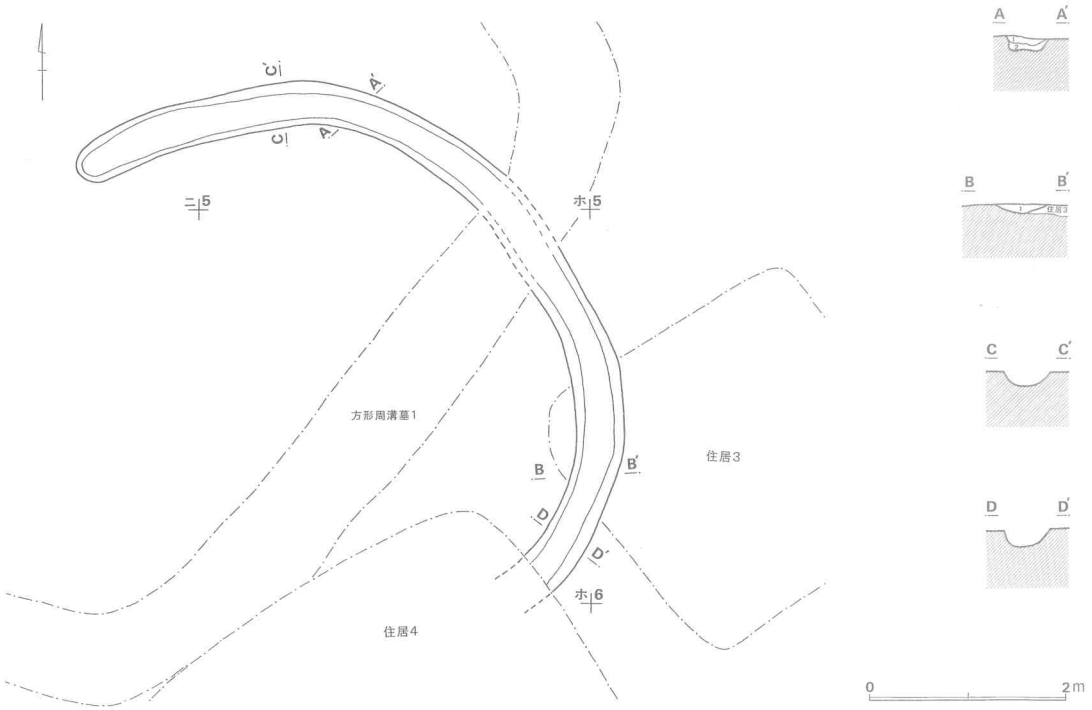
第38図　第５号方形周溝墓出土遺物実測図

第17表　第５号方形周溝墓出土遺物（第38図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	高　坏	口径（14.7）	器肉のうすいつくりで外反する口縁部破片。内外面ともに不明瞭であるが、丁寧な横方向のヘラミガキ調整後、赤彩されていたようである。残存、口縁部のみ。	胎土　F少G多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	

第６号方形周溝墓（第39図）

調査区の北側ハ～ホ－４～５グリッドに位置する。北側では第１号方形周溝墓や第３号住居跡、東側では第４号住居跡と切り合い構築されている。新旧関係は本跡の方が古い。形態は方形となるようであるが、掘り方が浅く、全容において不明な部分が多い。検出された北・西ともやや緩やかに弧を描くように丸く掘り込まれており、底面は各溝とも平坦な掘り方である。検出された部分での遺構の規模は、北溝の長さ5.3m、幅0.4m、深さ11cmを測る。軸偏差はN―60°―Wをとる。覆土は２層からなっており、掘り方に合わせてほぼ水平な堆積の仕方である。遺物は、小破片が出土しているが図示し得るものはなかった。



土　層　註

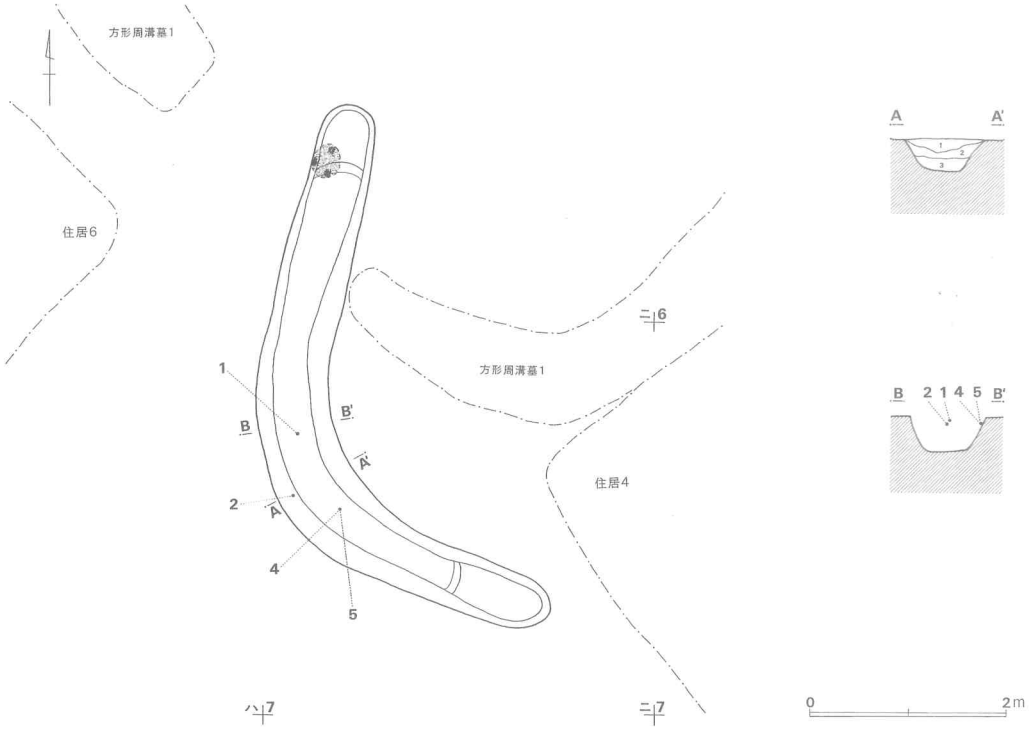
1　暗 褐 色 土　黄褐色土粒子を少量、黒褐色土粒子を少量含む。炭化物微量あり。粘性、良。しまり、良。

2　暗 褐 色 土　黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を多量含む。粘性、強。しまり、良。

第39図　第６号方形周溝墓実測図

第７号方形周溝墓（第40図）

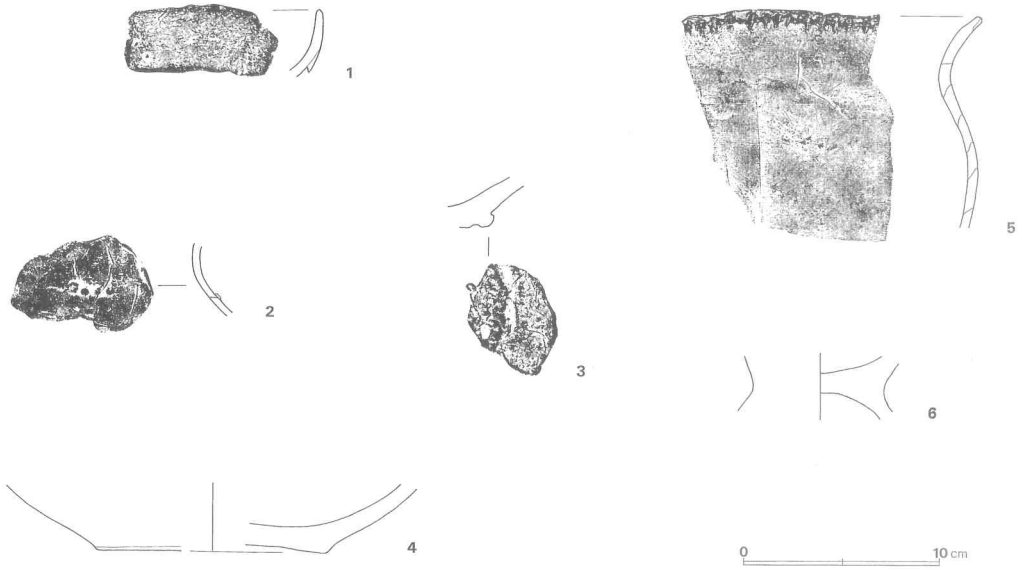
調査区の北側ロ～ハ－５～６グリッドに位置する。形態は方形となるようであるが、掘り方が浅く、全容において不明な部分が多い。検出されたのは南・西溝の部分のみで、ともに直線的に掘り込まれており、底面は各溝とも平坦な掘り方である。検出された部分での遺構の規模は、南溝の長さ3.2m、幅0.7m、深さ35cmを測る。西溝の長さ4.2m、幅0.7m、深さ36cmを測る。軸偏差はN―15°―Eをとる。遺物は少ないが上層位から出土している。主な出土遺物は、壺形土器（№１～４）、台付甕形土器（№５・６）である。



土　層　註

1　明褐色土　黄褐色土粒子を多量、黒褐色土粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。
2　暗褐色土　黄褐色土粒子を多量、黒褐色土粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。
3　暗褐色土　黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子を多量含む。粘性、強。しまり、良。

第40図　第７号方形周溝墓実測図及び遺物出土位置図



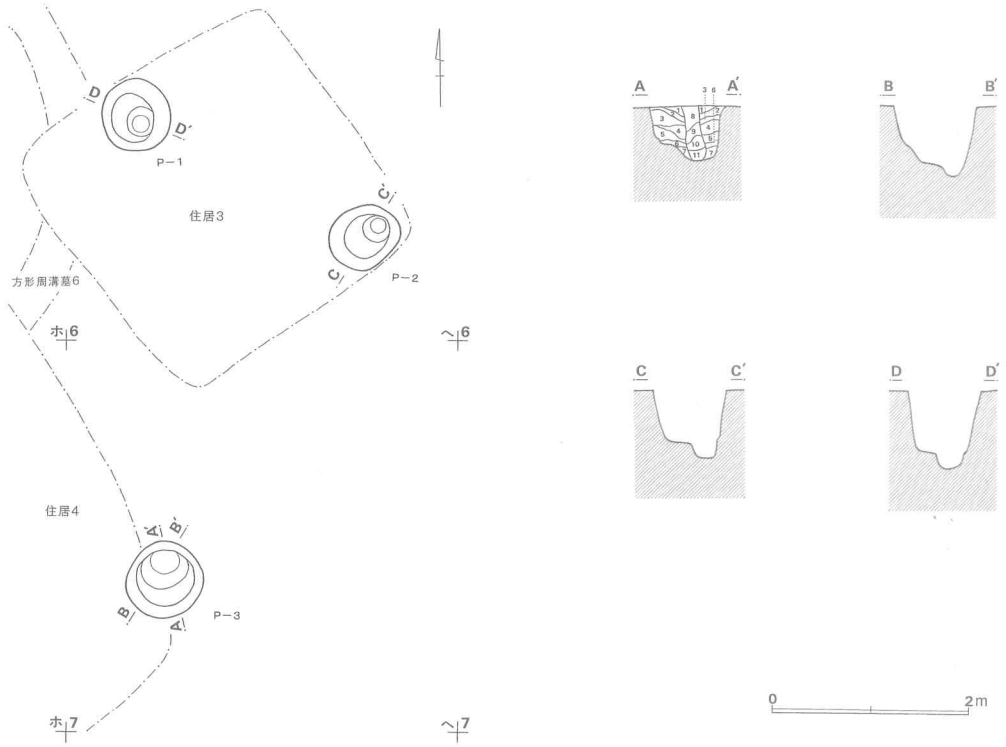
第41図　第７号方形周溝墓出土遺物実測図

第18表　第７号方形周溝墓出土遺物（第41図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺		内湾する複合口縁。内外面ともに不明瞭であるが、複合部の外面に縄文の痕跡がある。残存、口縁部のみ。	胎土　F少G多 焼成　やや不良 色調　淡い橙褐色	
2	壺		緩やかに屈曲する頸部。φ３～５㎜程度の点付文を付す。内外面ともに不明瞭であるが丁寧なナデ調整が施される。残存、頸部のみ５％。	胎土　EF少G多 焼成　やや不良 色調　濃い橙褐色	
3	壺		平底となるが、外面は丁寧なナデ調整が施される。底面に籾殻の圧痕がある。残存、底部のみ。	胎土　FG多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
4	壺	底径（11.6）	平底となる大きな壺形土器の破片。内外面ともにナデ調整が施される。残存、底部のみ10％。	胎土　H少FG多 焼成　良好 色調　鈍い橙褐色	
5	台付甕		緩やかに屈曲する頸部。口唇部には刻み目を付す。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。内面の口縁部には僅かに刷毛整形痕が残る。残存、20％。	胎土　F少G多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	
6	台付甕		やや大きめの台付甕形土器の接合部。内外面ともに磨滅著しく不明瞭であるがナデ調整が施されるようである。体部内面には煤が付着する。残存、接合部のみ10％。	胎土　H少FG多 焼成　良好 色調　淡い橙褐色	

⑶その他の遺構と出土遺物（第42図）

当調査地からは、住居跡や方形周溝墓に伴わない遺構としてピットが上げられる。ピットは第３・４号住居跡付近から３ヶ所検出されており、ともに柱痕状の掘り込みを有するものである。掘建柱建物遺構の存在を想定させるものである。



土層註（ピット３）
1　明褐色土　黄褐色土粒子を微量、赤褐色粒子を微量含む。粘性、弱。しまり、良。
2　明褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を微量含む。粘性、弱。しまり、良。
3　暗褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子をブロック状（φ30～50㎜）に多量含む。粘性、良。しまり、良。
4　暗褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子をブロック状に少量含む。粘性、良。しまり、良。
5　黒褐色土　黄褐色土粒子を多量、灰褐色土粒子をブロック状に多量、黒褐色土粒子を微量含む。粘性、良。しまり、良。
6　黒褐色土　黄褐色土粒子を微量、灰褐色土粒子を多量含む。粘性、強。しまり、良。
7　黒褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を多量含む。粘性、強。しまり、良。
8　明褐色土　黄褐色土粒子を微量、灰褐色土粒子を少量含む。粘性、弱。しまり、良。
9　暗褐色土　黄褐色土粒子を微量、灰褐色土粒子を少量含む。粘性、良。しまり、良。
10　黒褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を微量含む。粘性、強。しまり、良。
11　黒褐色土　黄褐色土粒子を少量、灰褐色土粒子を少量含む。粘性、強。しまり、良。

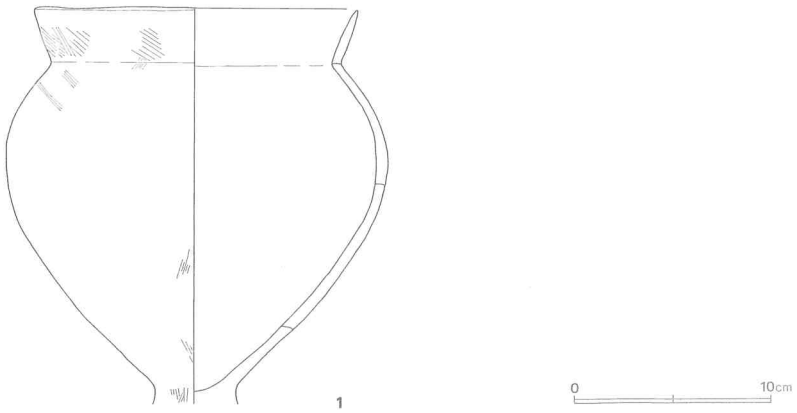
第42図　ピット実測図

第19表　ピット一覧表（第42図）　　単位：cm

番号	グリッド	形　態	長　軸	短　軸	深　さ	底面形	備　考
1	ホ－５	円　形	７０	７０	７０	凹状	柱痕あり
2	ホ－５	不整円形	７６	６０	５９	凹状	柱痕あり
3	ホ－６	円　形	８０	８０	６３	凹状	柱痕あり

(4)グリッド出土の遺物（第43図）

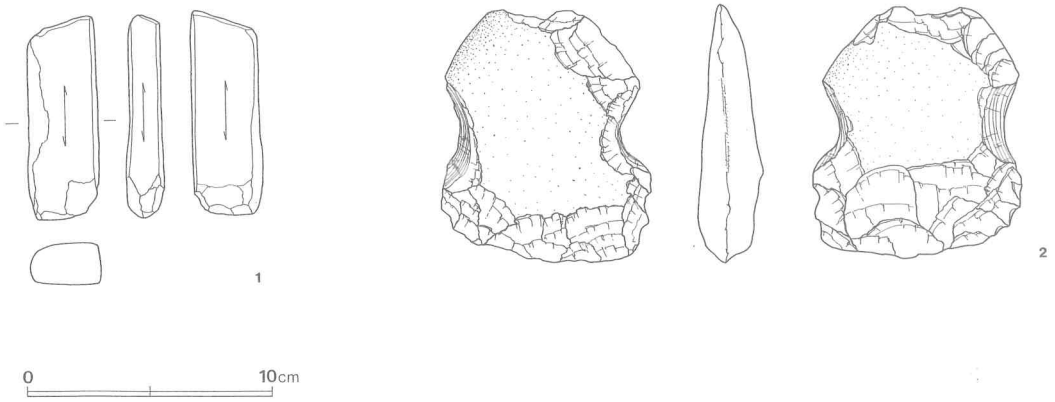
遺構に伴わない遺物として取り上げたものである。基本土層の第３層中に紛れ込んでいたものである。



第43図　グリッド出土遺物実測図(1)

第20表　グリッド出土遺物(1)（第43図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	台付甕	頸径　11.7 胴径　19.7	「く」の字に屈曲する頸部、口縁部は直線的に開く。胴部の最大径は上位にあり、脚台部を欠損する。内外面ともに摩耗が著しく調整等不明瞭であるが、外面の口縁部には斜方向の刷毛整形痕が残る。残存、40%。	胎土　EH少FG多 焼成　良好 色調　鈍い橙褐色	



第44図　グリッド出土遺物実測図(2)

第21表　グリッド出土の遺物(2)（第44図）

番号	機種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	砥　石	長さ　8.3 幅　2.9 厚さ　1.6 重さ　66g	角材状の砥石。表・裏・側面を砥ぎ面とする。上・下部は、敲打痕があり磨滅している。	石質　砂岩 色調　淡い橙褐色	第2‘層
2	打製石斧	長さ　10.3 幅　8.6 厚さ　2.7 重さ　290g	硬質ではあるが、刃部を丁寧に加工する分銅型の打製石斧。柄の装着部分は、細かく打ち欠いて調整し、さらに抉るようにつくり出している。表・裏面ともに自然面を残す。	石質　硬質砂岩 色調　暗灰褐色	第2‘層

6　ま　と　め

鍛冶谷・新田口遺跡の発掘調査は、昭和42年に第１次調査が行われて以来、この調査で８次を数えるものである。この第８次調査は第７次の西側の隣接地にあたり、当遺跡の西縁に近い地点を調査したことになる。主な遺構としては住居跡12軒、方形周溝墓７基を検出した。ただし、前建築物（給油所）の撹乱や調査区域外となってしまっており、全容が明らかになっていない遺構があることも否めない。ここでは、検出された住居跡と方形周溝墓について、これまでの成果に合わせて簡単ではあるがまとめておきたい。(註１)

住居跡

住居跡は12軒検出されているが、いずれも出土した土器から古墳時代前期に位置づけられる。ここでは、それらの形態と規模について従来からの分類に含めておくこととする。形態は、方形・隅丸方形に分類することができる（註２)。また、規模については大型・中型Ａ・中型Ｂに分類することができる（註３)。各遺構については以下のとおりである。

方形　２・５・６・７・９・10　　隅丸方形　１・３・４・８・11・12

大型　２　　中型Ａ　４・５・６・８・10・11　　中型Ｂ　12　小型３・７・９

※残念ながら、第１・６・７号住居跡などは全容が不明である。

この第８次調査では、中規模の住居跡が多く比較的重複せずに検出することができた。第１次調査からこれまでに検出されている住居跡の総数は、(財）埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団による調査も含めると57軒が調査されたことになる。

方形周溝墓

この調査地点から方形周溝墓は７基検出されているが、ほぼ全容を検出することができた第１・３号方形周溝墓について、形態や主軸方向について従来からの分類に含めておきたい。

いずれも、周溝の一辺において中央に開口部をもつＢタイプに属するものである（註４)。同遺跡内では最も検出例の多いもので、開口部は南溝の中央に位置し、南西方向に主軸をとるものである。第１次調査からこれまでに検出されている方形周溝墓の総数は、㈶埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団による調査も含めると113基を数えるものとなった。

以上、第８次発掘調査の成果である。鍛冶谷・新田口遺跡において、とくに方形周溝墓は墓制として取り扱ってきたが、近年の方形周溝墓をめぐる研究成果として「周溝を有する建築物」という新たな研究の方向性が指摘されている。今回の調査は、このような視点もあって、方台部における掘建柱などの痕跡を示すピットを丹念に精査したが残念ながら見つからなかった。今後においても検証を重ねながら調査を進めてゆきたい。

註１　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団により報告されている『鍛冶谷・新田口遺跡』において住居跡や方形周溝墓について分類されているので、その分類をもとに位置付けをしておきたい。

西口正純　1986『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集　㈶埼玉県埋

蔵文化財調査事業団

註２　このほかに、長方形・隅丸長方形・楕円形・円形がある。

註３　分類は面積から大型（32.5～49.0㎡）、中型Ａ（23.5～28.6㎡）、中型Ｂ（14.3～19.3㎡）、小型（4.0～12.6㎡）に分類される。

註４　形態は、開口部（ブリッジ）の位置によりＡ～Ｈの８種類に分類される。

［参考文献］

及川良彦：1998「関東地方における低地遺跡の再検討―弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に―」『青山考古第15号』青山考古学会

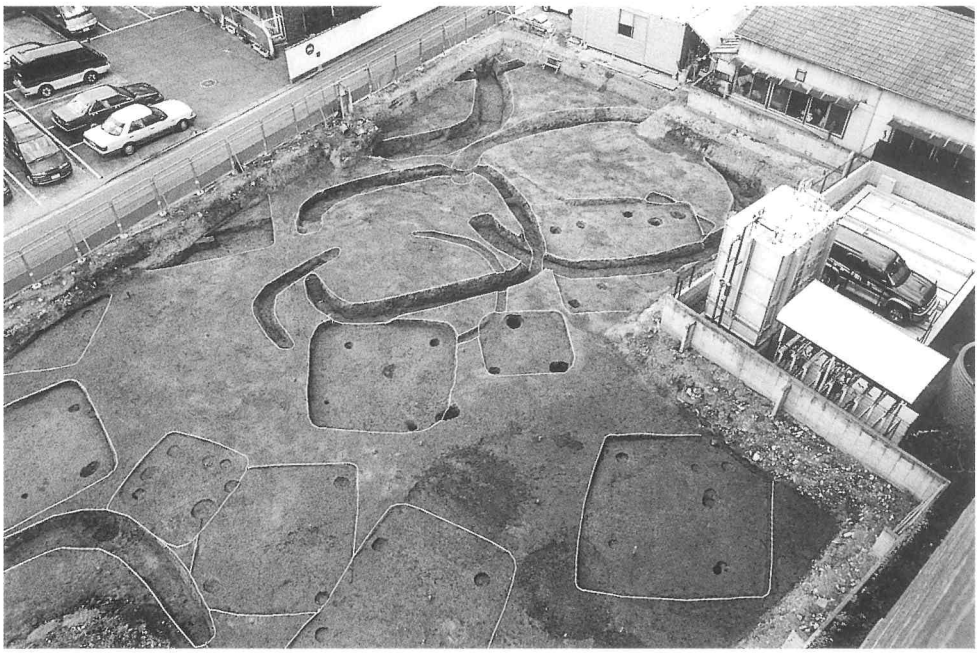
飯島良雄：1998「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要第19号』群馬県立歴史博物館

福田　聖：2000『方形周溝墓の再発見』㈱同成社

中島広顕：1995『豊島馬場遺跡』北区埋蔵文化財調査報告第16集　北区教育委員会

中島広顕：1995『豊島馬場遺跡』北区埋蔵文化財調査報告第25集　北区教育委員会

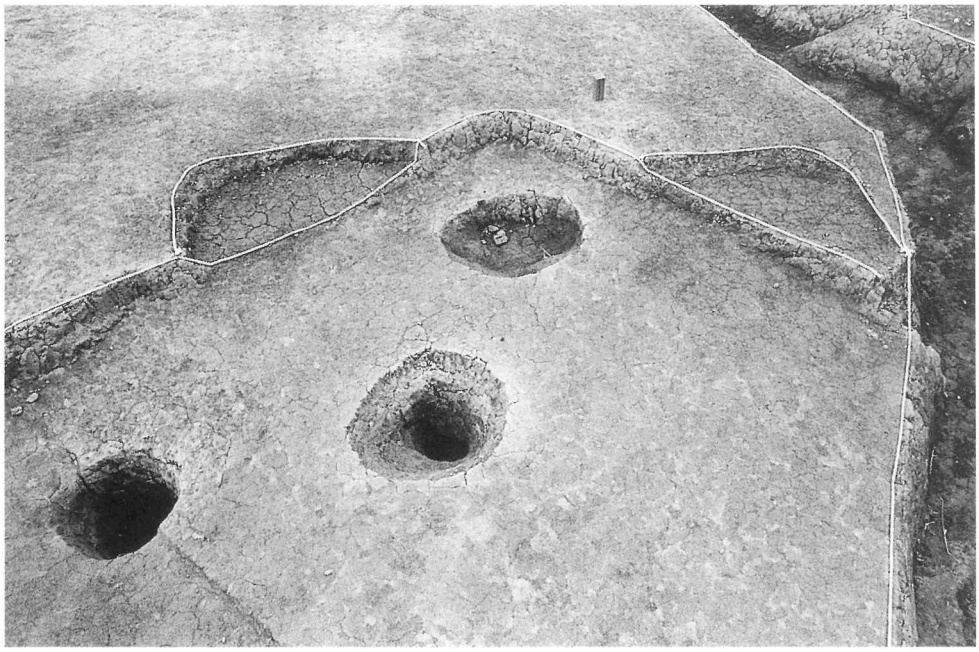
(1)　鍛冶谷・新田口遺跡Ⅷの位置　○調査地



(2)　調査区全景（南東から）

図版 2

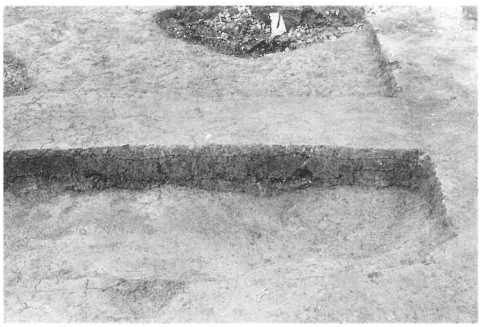
(1)　調査区全景（北から）



(2)　第１号住居跡（南から）

(1)　第２号住居跡（南から）

(2)　第２号住居跡土器出土状態

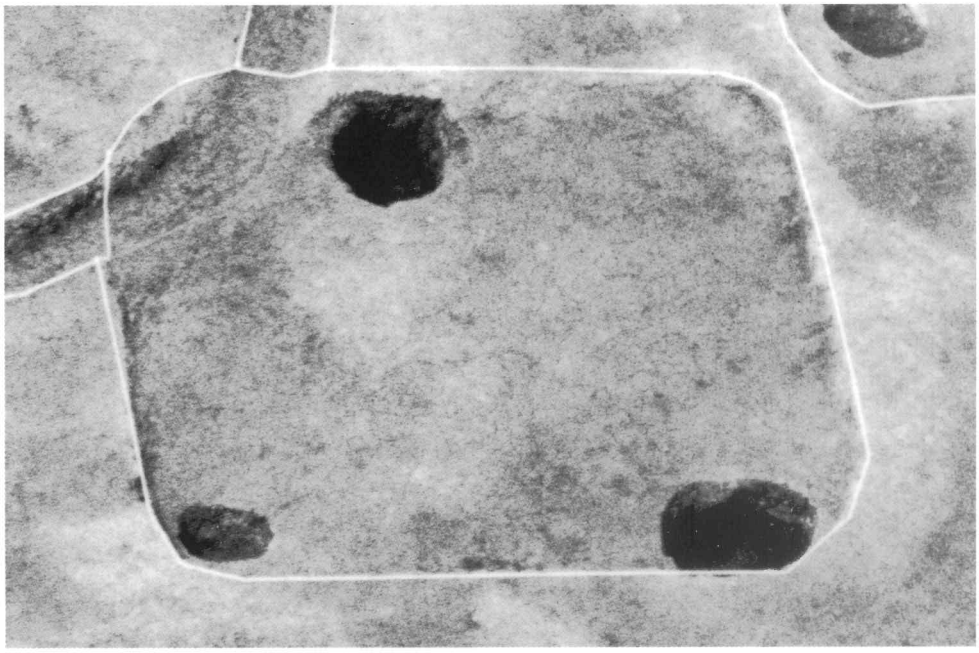


(3)　第２号住居跡土層断面（ＳＰＢ南側）

(4)　第２号住居跡ピット２

(5)　第２号住居跡ピット８

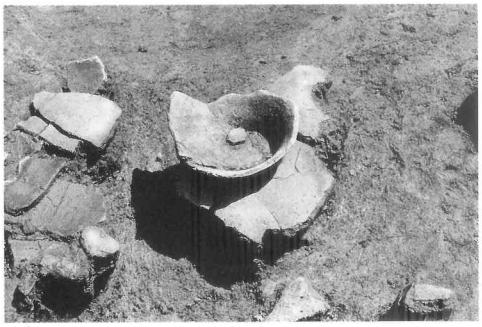
図版 4



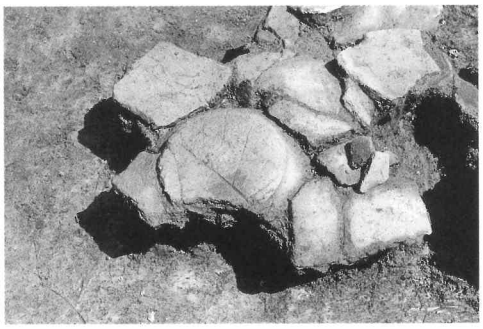
(1)　第３号住居跡（東から）

(2)　第４号住居跡（南から）

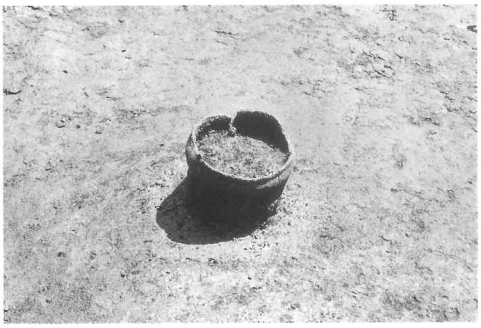
(1)　第４号住居跡土器出土状態(1)



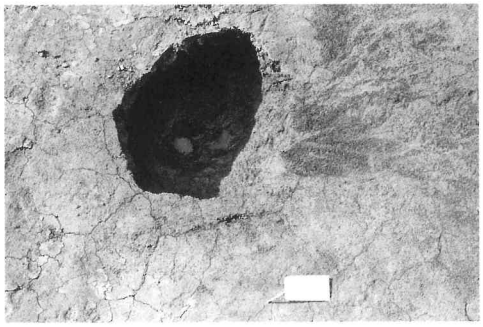
(2)　第４号住居跡土器出土状態(2)



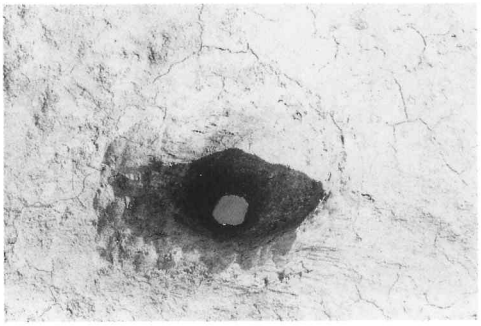
(3)　第４号住居跡土器出土状態(3)



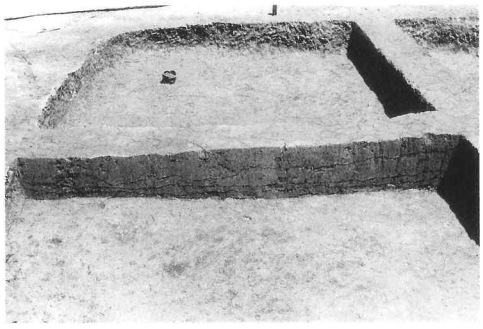
(4)　第４号住居跡土器出土状態(4)



(5)　第４号住居跡ピット１



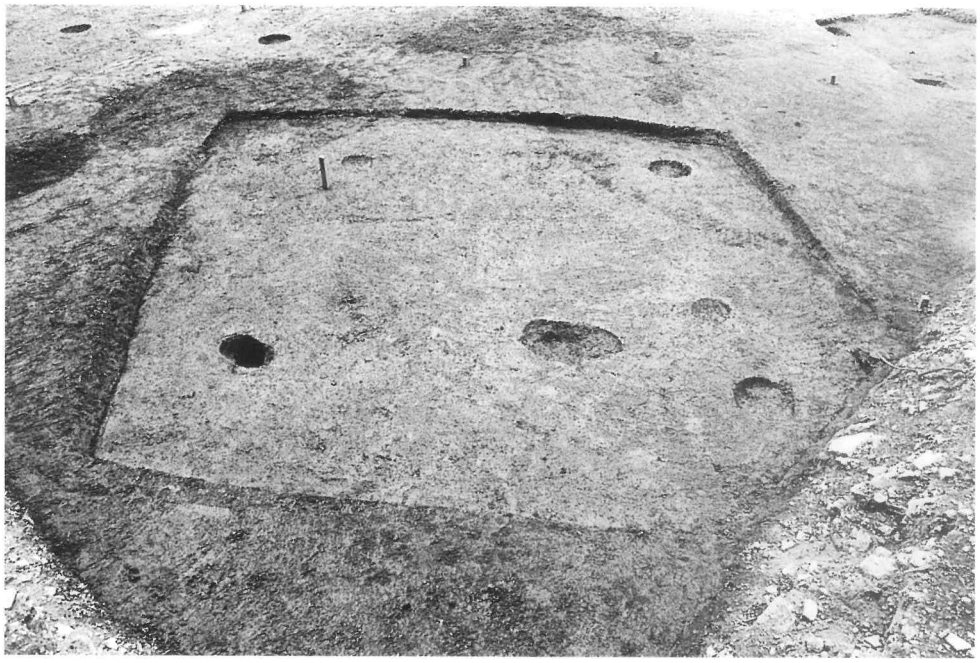
(6)　第４号住居跡ピット２



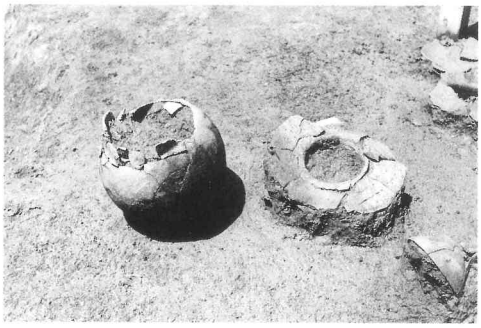
(7)　第４号住居跡土層断面　ＳＰＡ西側

(8)　第４号住居跡土層断面　ＳＰＢ北側

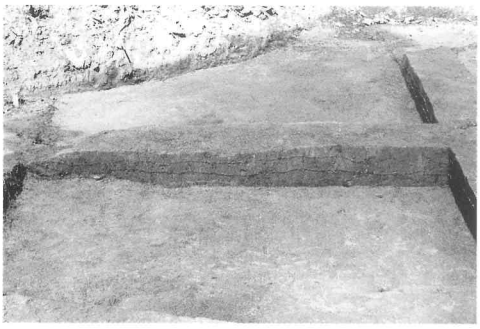
図版 6



(1)　第５号住居跡（北から）

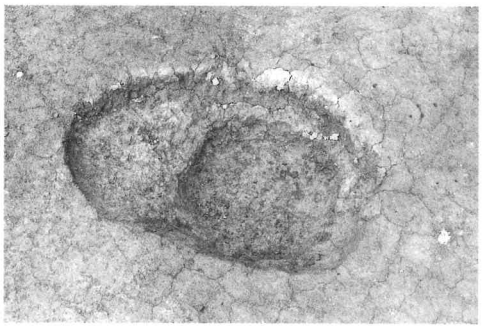


(2)　第５号住居跡土器出土状態



(3)　第５号住居跡土層断面　ＳＰＡ東側

(4)　第５号住居跡ピット

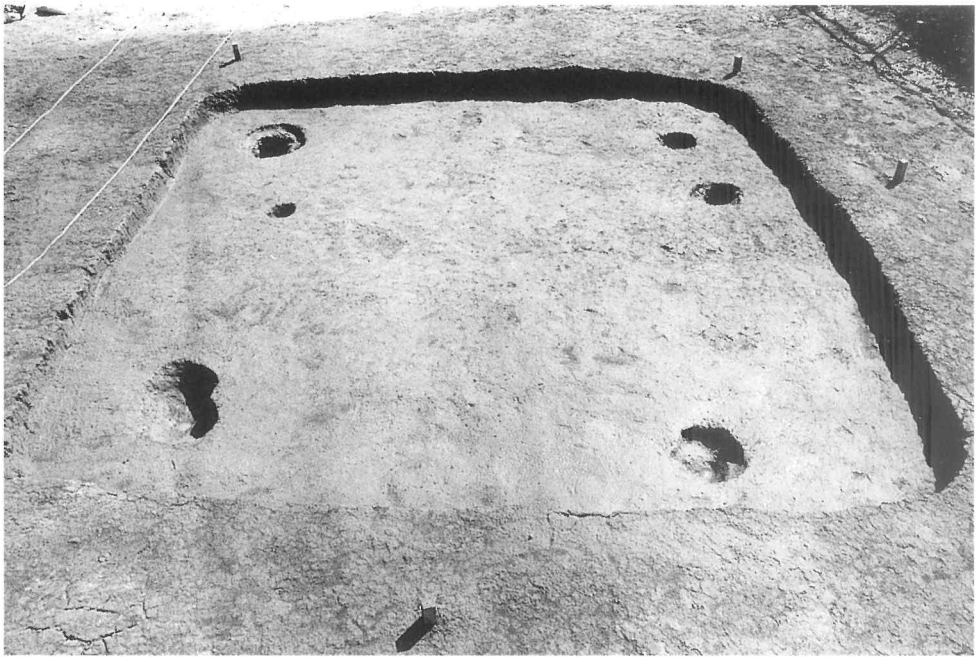


(5)　第５号住居跡ピット

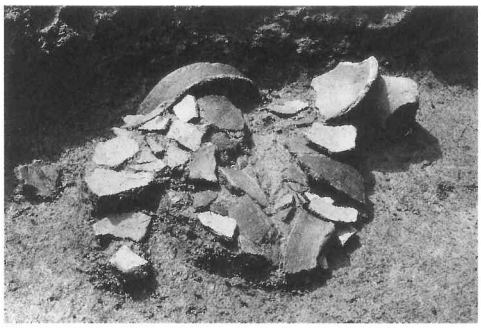
(1)　第 6 号住居跡（西から）

(2)　第 7 号住居跡（西から）

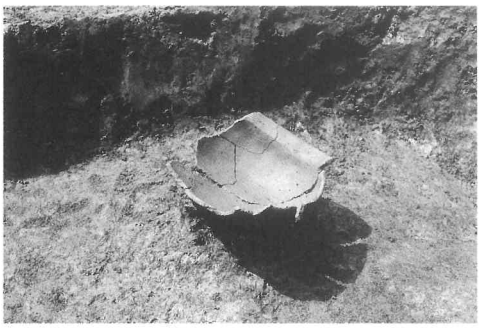
図版 8



(1)　第８号住居跡（北から）

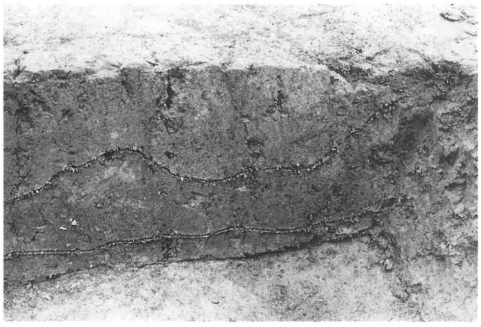


(2)　第８号住居跡土器出土状態(1)



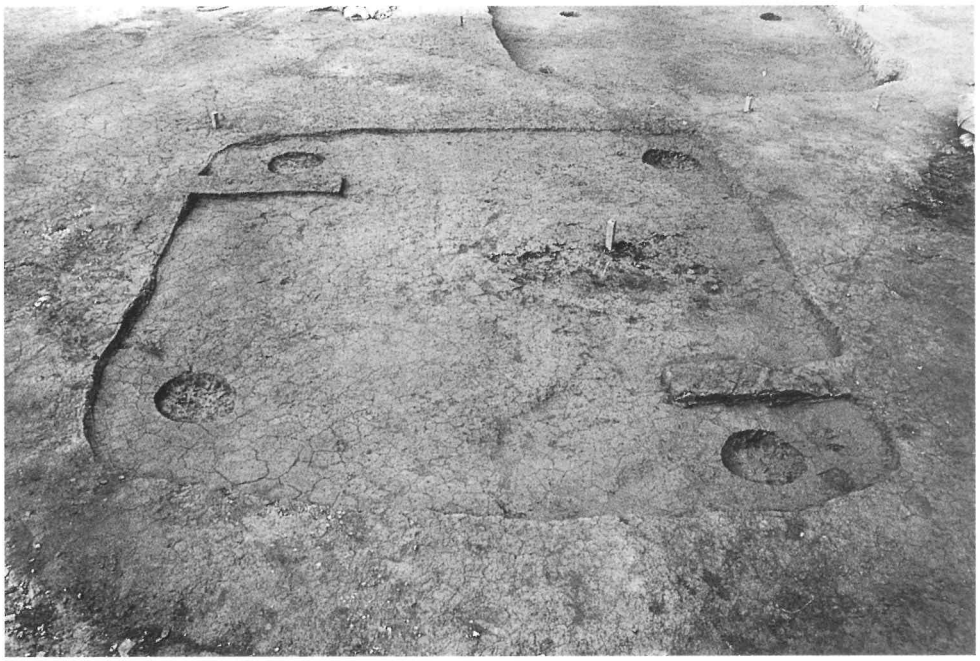
(3)　第８号住居跡土器出土状態(2)

(4)　第８号住居跡土層断面　ＳＰＡ東側



(5)　第８号住居跡土層断面　ＳＰＢ南側

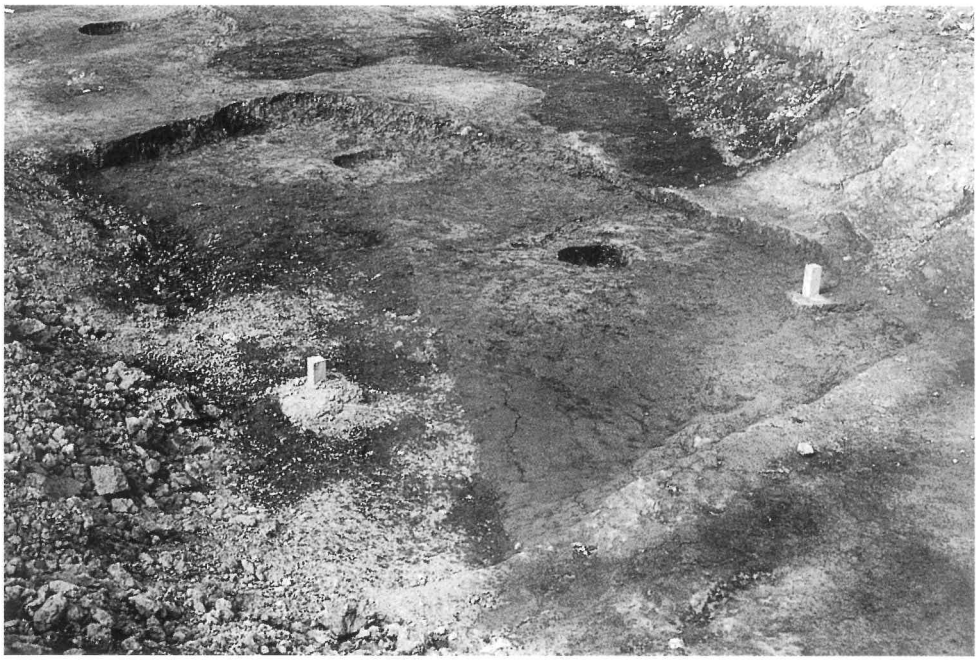
(1)　第 9 号住居跡（東から）



(2)　第10号住居跡（南から）

図版10

(1)　第11号住居跡（北から）

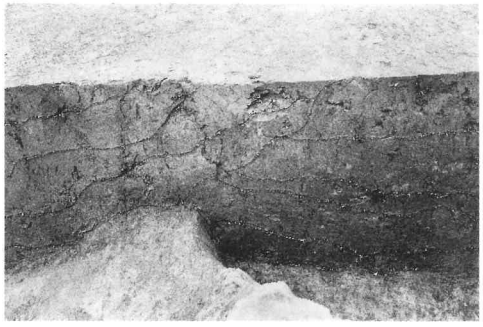


(2)　第12号住居跡（南から）

(1)　第１号方形周溝墓（東から）

(2)　第１号方形周溝墓　北溝

(3)　第１号方形周溝墓　東溝



(4)　第１号方形周溝墓土層断面　ＳＰＤ

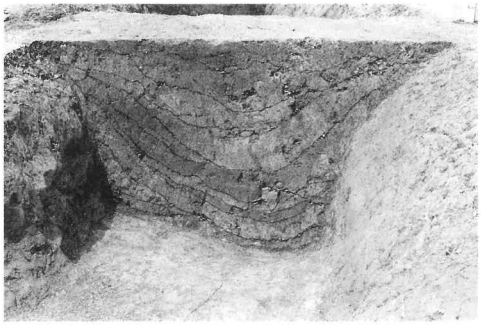
(5)　第１号方形周溝墓土層断面　ＳＰＦ

図版12

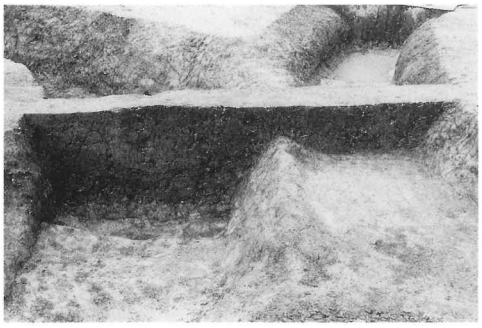
(1)　第２号方形周溝墓（東から）

(2)　第２号方形周溝墓　北溝

(3)　第２号方形周溝墓　南溝

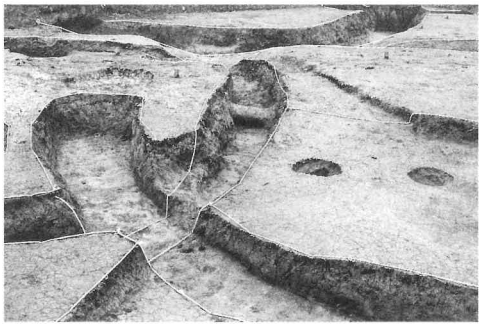


(4)　第２号方形周溝墓土層断面　ＳＰＢ

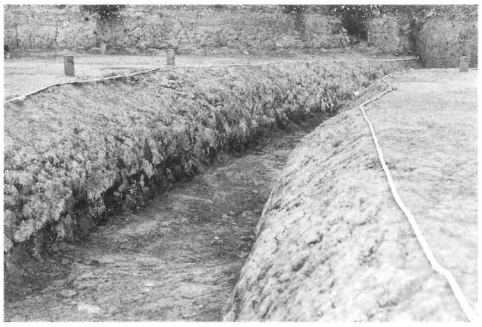


(5)　第２号方形周溝墓土層断面　ＳＰＣ

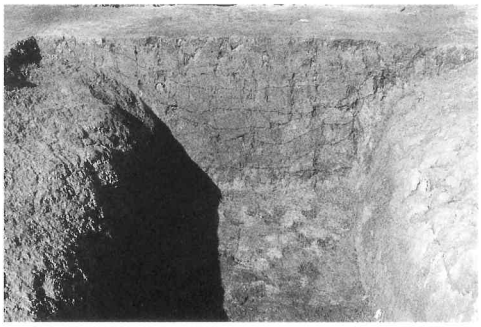
(1)　第３号方形周溝墓（東から）



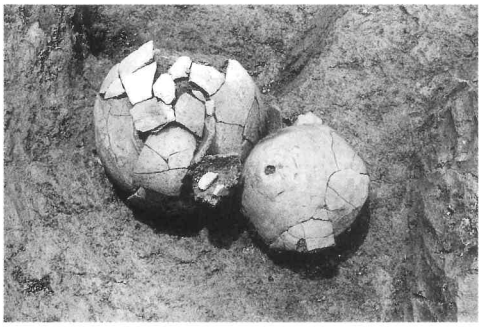
(2)　第３号方形周溝墓　南溝



(3)　第３号方形周溝墓　西溝

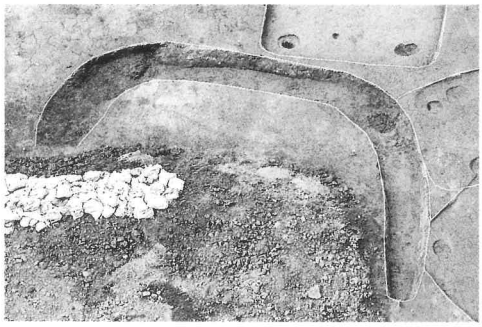


(4)　第３号方形周溝墓土層断面　ＳＰＣ

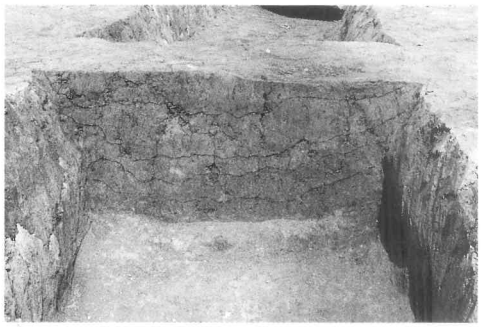


(5)　第３号方形周溝墓土器出土状態

図版14

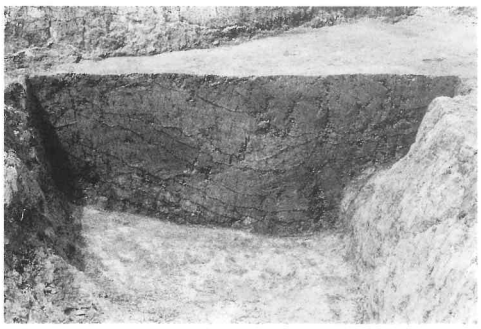


(1)　第４号方形周溝墓（東から）

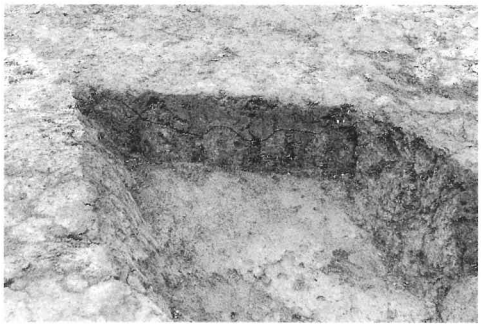


(2)　第４号方形周溝墓土層断面　ＳＰＡ

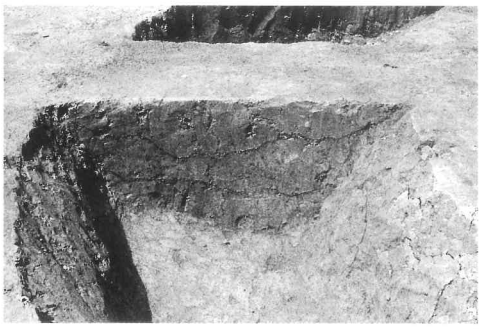
(3)　第５号方形周溝墓（南から）



(4)　第２・５号方形周溝墓土層断面　ＳＰＡ



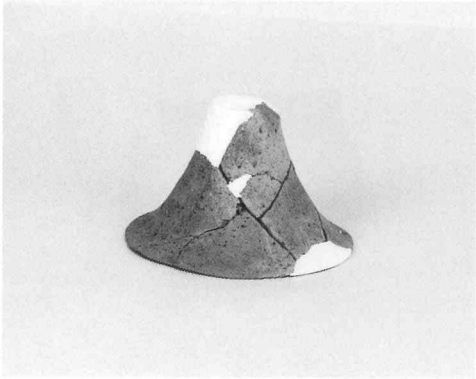
(5)　第６号方形周溝墓土層断面　ＳＰＡ



(6)　第７号方形周溝墓土層断面　ＳＰＡ

(1)　第２号住居跡出土遺物（第９図－１）

(2)　第２号住居跡出土遺物（第９図－２）



(3)　第２号住居跡出土遺物（第９図－６）

(4)　第２号住居跡出土遺物（第９図－８）

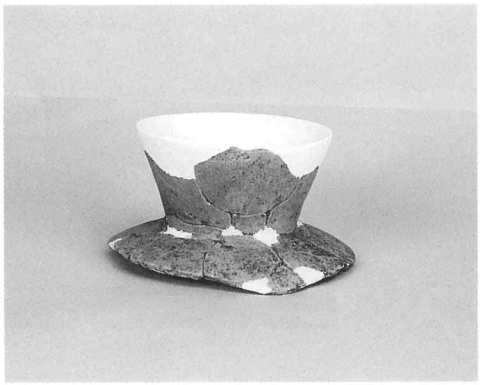
(5)　第３号住居跡出土遺物（第11図－１）

(6)　第２号住居跡出土遺物（第11図－２）

図版16

(1)　第４号住居跡出土遺物（第13図－５）

(2)　第４号住居跡出土遺物（第13図－６）



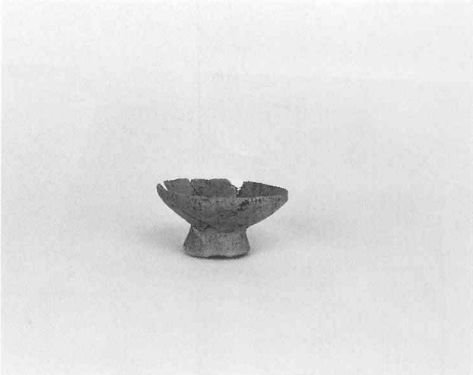
(3)　第５号住居跡出土遺物（第16図－１）

(4)　第５号住居跡出土遺物（第16図－３）

(5)　第５号住居跡出土遺物（第16図－４）

(6)　第５号住居跡出土遺物（第16図－５）

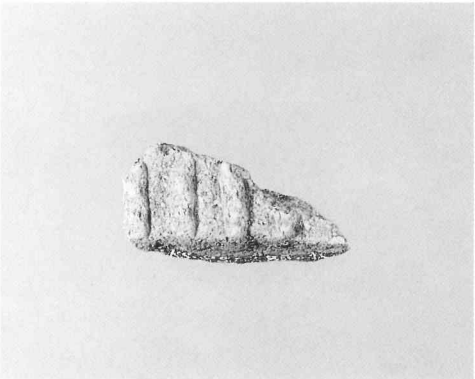
(1)　第５号住居跡出土遺物（第16図－６）



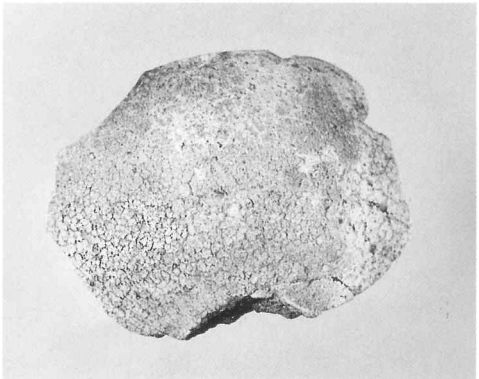
(2)　第５号住居跡出土遺物（第16図－７）

(3)　第５号住居跡出土遺物（第16図－８）

(4)　第５号住居跡出土遺物（第16図－９）



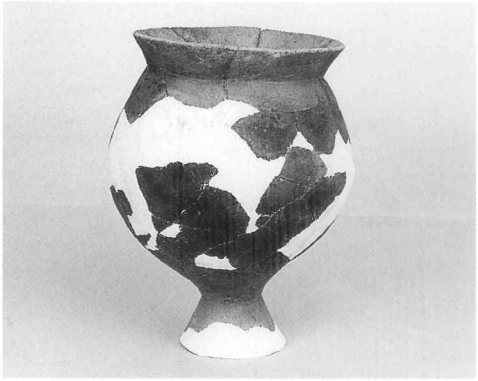
(5)　第６号住居跡出土遺物（第19図－１）



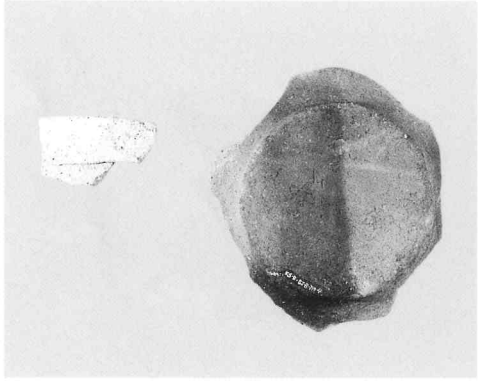
(6)　第７号住居跡出土遺物（第19図－２）

図版18

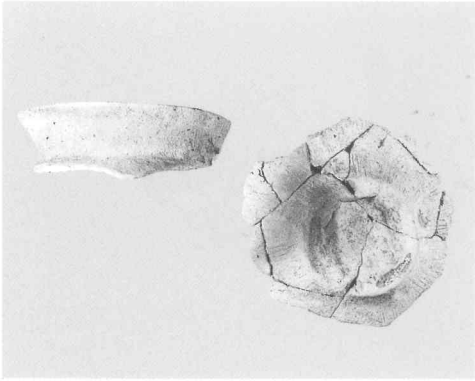
(1)　第８号住居跡出土遺物（第21図－１）



(2)　第８号住居跡出土遺物（第21図－４）

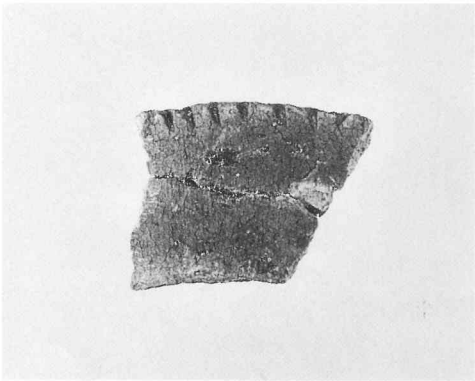


(3)　第８号住居跡出土遺物（第21図－２・３）

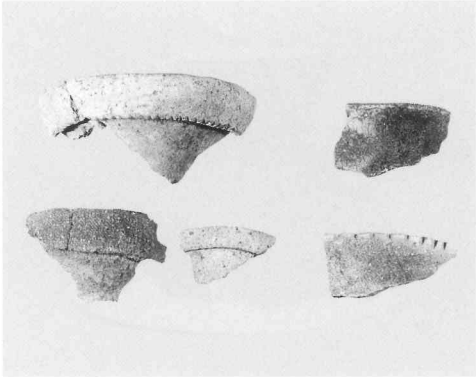


(4)　第10号住居跡出土遺物（第24図－１・２）

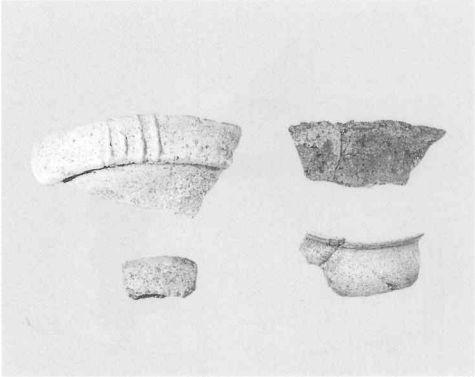
(5)　第10号住居跡出土遺物（第24図－３）



(1)　第12号住居跡出土遺物（第28図－１）



(1)　第１号方形周溝墓出土遺物
（第29図－１・２・３・６・７）

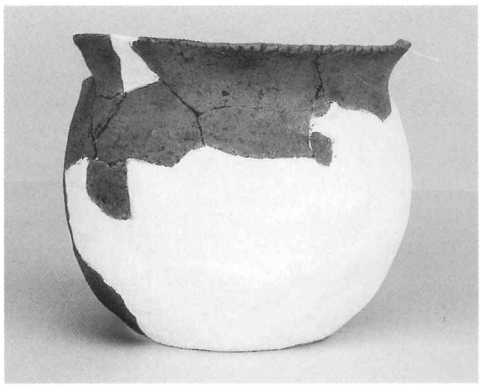


(2)　第２号方形周溝墓出土遺物
（第32図－１・２・９・10）

(3)　第２号方形周溝墓出土遺物（第32図－３）

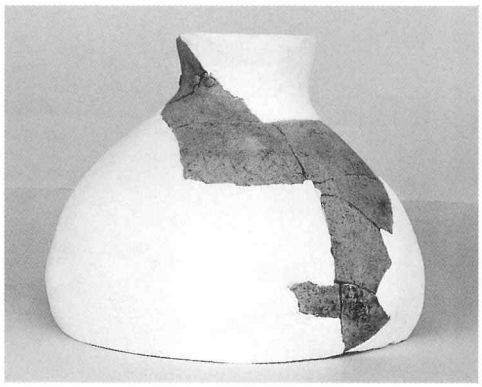
(4)　第２号方形周溝墓出土遺物（第32図－４）

(5)　第２号方形周溝墓出土遺物（第32図－７）

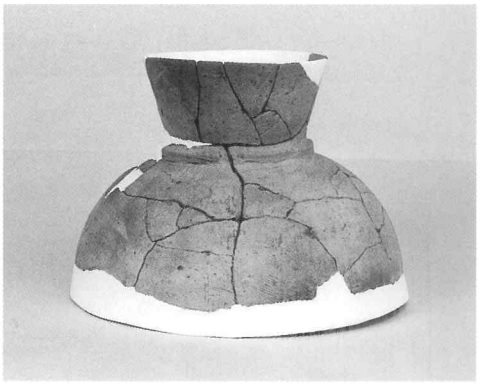


(6)　第２号方形周溝墓出土遺物（第32図－８）

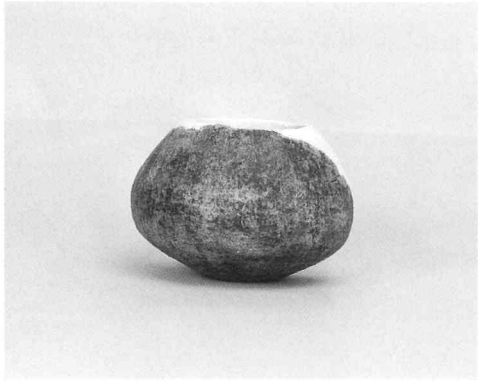
図版20



(1)　第３号方形周溝墓出土遺物（第34図－１）



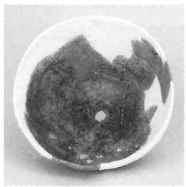
(2)　第３号方形周溝墓出土遺物（第34図－２）



(3)　第３号方形周溝墓出土遺物（第34図－９）

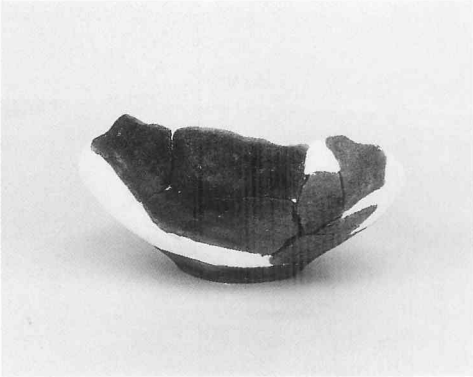
(4)　第３号方形周溝墓出土遺物（第34図－10）

(5)　第３号方形周溝墓出土遺物（第34図－11）



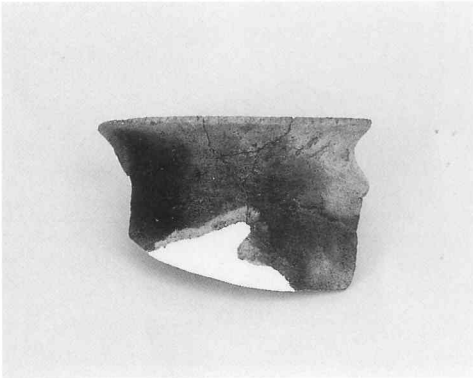
(6)　第３号方形周溝墓出土遺物（第34図－14）

(1)　第４号方形周溝墓出土遺物（第36図－２）

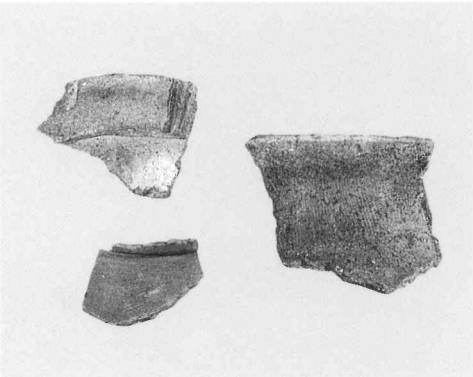


(2)　第４号方形周溝墓出土遺物（第36図－５）

(3)　第４号方形周溝墓出土遺物（第36図－６）



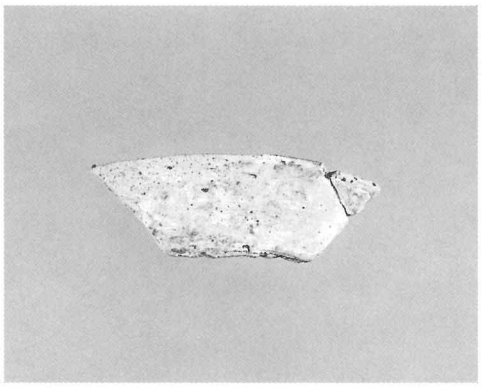
(4)　第４号方形周溝墓（第36図－７）



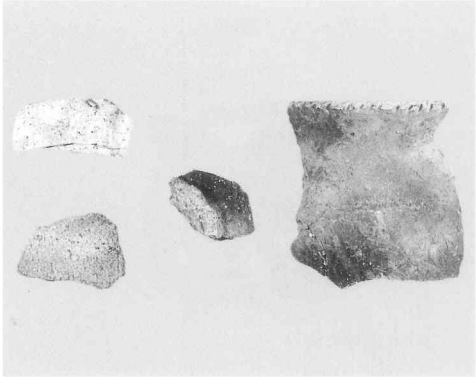
(5)　第４号方形周溝墓出土遺物
（第36図－１・８・９）

(6)　第４号方形周溝墓出土遺物（第36図－11）

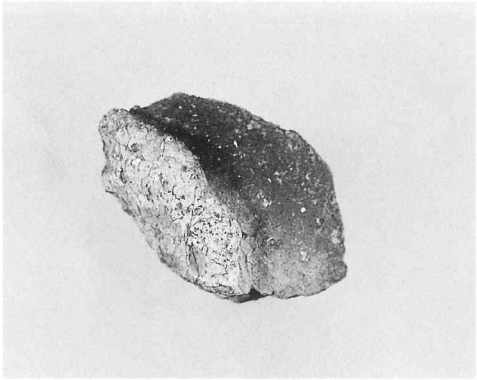
図版22



(1)　第５号方形周溝墓出土遺物（第38図－１）



(2)　第２号方形周溝墓出土遺物
（第32図－１・２・３・５）



(3)　第７号方形周溝墓出土遺物（第41図－４）

(4)　グリッド出土遺物（第43図－１）

報告書抄録

フリガナ	カジヤシンデングチイセキ		
書名	鍛冶谷・新田口遺跡Ⅷ（第８次）		
副書名		巻次	
シリーズ	戸田市遺跡調査会報告書	巻次	第10集
編著者	小島清一		
編集機関	戸田市遺跡調査会		
所在地	〒335－8588　戸田市上戸田１－18－１　ＴＥＬ　048－441－1800		
発行日	2005（平成17年）３月25日		

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯 （°′″）	東緯 （°′″）	調査期間	調査面積 （m²）	調査原因
鍛冶谷（カジヤ）・新田口（シンデングチ）遺跡（第８次）	戸田市（トダシ）上戸田（カミトダ）５丁目	11224	001	35°48′30″	139°40′26″	平成11年７月21日～平成11年９月21日	1088.22	共同住宅建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
鍛冶谷・新田口遺跡（第８次）	集落	弥生時代後期～古墳時代前期	住居跡　12軒 方形周溝墓　７基	土器	

鍛冶谷・新田口遺跡Ⅷ

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書　第10集

発行日　平成１７年３月２５日
発　行　戸田市遺跡調査会
戸田市上戸田１－１８－１
戸田市教育委員会内
印　刷　株式会社　エビス
さいたま市緑区太田窪１丁目21番23号